
先生ネギま！ 史上最強の転生者——Fight with the personified god」

蒼炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一部「魔法先生ネギま！ 史上最強の転生者——Fight with the personified god」

【Nコード】

N3749P

【作者名】

蒼炎

【あらすじ】

主人公はオタクと一般人の狭間にいるただの一人間……だった。転生。異世界の思念。好敵手の出現。果たして、その世界で主人公は何を見るのか——主人公はもちろん最強。果たしてどうなるか！？作者でも知りません（笑） ※感想、レビューがありましたらどんどん送ってください。

ただし、メンタル激弱ですので、誹謗中傷はご遠慮ください。クロスの希望ありましたら受け付けます。 後、出てくるキャラが、最

初の設定上で、かなりの作品のキャラが出てきます。苦手な方は戻るを押してください

第一話 序章（前書き）

初めまして。蒼炎と言います。

以前、モバゲー、エブリスタで書いていたものを投稿しています。
長い間放置していましたが、修正を書けながら投稿しますのでよろしく願います。

第一話 序章

全てはここから始まった……………

この話は主人公及び、その仲間達が織り成す壮大な物語である。

さて、その話を最初から最後まで形にしていこう——

——全ては俺が転生してから始まった。

これから語るのは果てしなく長い物語。

数々の世界を辿り、数多くの真実を知って来た——

俺の物語。

さて、まずは俺が転生した時の話をしようか——

第一章――「魔法先生ネギま! 史上最強の転生者――Fight
with the personified god」

第二話 転生（前書き）

そのままコピペしてるので、かなり長いです

第二話 転生

目を開けると――

そこには白い空間が広がっていた。
限りなく白一点の空間が。

「ここ・・・どこだ？」

ふぁー、眠い。

俺確か普通に家で寝てた筈なんだが。

ちっと記憶が曖昧になってるな・・・

しかし、そんな事よりも疑問に思ってる事がある。

さっきも言った通り、限らない白一点の空間なのだが、俺以外にも
う一人。

これで、俺の疑問がおわかりいただけだろうか？

「あんた、誰だ？」

「私はあなたの世界で女神と呼ばれる存在です。」

はぁ？ w a t s ?

女神だと？

どう考えても信じられないと言わざるを得ない、が。

この空間、本当に果てが見当たらねえんだよ。

例えとかじゃなく、ガチで。

普通だったらあり得ない。

こんな空間作るとか・・・この女、本当に・・・

「ええ、さっきも言ったように、私はれっきとした女神です。」

「人の心読むなし」

心まで読むとか。

プライパシーの侵害だろこれ。

「んで、その女神が、俺に何の用だ？

まさか転生小説にありがちな「あなたは死にました」とか言うんじゃないだろうな。」

いやさすがにそんなベタな展開はn

「ええ、その通りです。

あなたは、一回死にました。」

ベタな展開あったアアアアアア！

本当にそんな展開になる事ってあるもんなのかよ……

「一体どういう事だ、説明してくれ！」

「どうやら、あなたは覚えてないようですね……」

え？

覚えてる覚えてない以前に、記憶が曖昧なんだけど。

俺まさか何かやらかした訳？

「とりあえず、事の顛末を話します。

あなたは夜中に外を出て、子猫が道にいるのを助けた後、トラックがあなたに激突したんです。

あなたは即死――

子猫は助かりましたけどね。」

「・・・へ？マジで？」

あー・・・」

思い出してきた。

確か、目が覚めて、目がやけにさえるから、暇潰しにコンビニ行こうと外に出て、その後に車道にいた子猫を急いで保護したけど、その直後に避けきれずにトラックに跳ねられたんだよね——
って、マジで？

どんだけベタな死に方・・・

「どんだけ転生小説でありがちな死に方してんだ俺は・・・」

ったく・・・これからどうしろってんだ・・・

大方、天国か地獄に行くんだろうなー。

やっぱり普通に天国行きたいよねー。

そんな事を考えていると——

「でも、あなたにチャンスをあげます。」

「え？チャンス？」

「ええ。」

実は本来、あの猫が転生するはずだったのが、あなたが代わりに死んだ事によって、転生権があなたに移動したんです。

ですから、あなたが転生する事に同意すれば、あなたは好きな世界に転生する事が出来るんです。」

なん・・・だと！？

ここまで転生小説でありがちな展開とかマジk t k r！
これはある意味、最大のチャンスなのでは！？

「それでは、転生する事に同意しますか？しませんか？」

「もちろんするに決まってるだろ！
こんなチャンス、二度とねえよ！」

「そうですか、わかりました。
ではまず、あなたが転生する世界を選んで貰います。」

「転生する世界？」

「はい。」

あなたは元の世界では既に死んでいるので、別の世界を選択して貰います。」

ふーん、元の世界には未練もねえし、特に気にしないから問題ないとして。
んじゃ、聞いてみるか。

「聞きたい事があるんだが。」

「何ですか？」

「その選択できる世界のカタログとかない？」

「ええ、ありますよ。」

ただし、かなりの量があるので、できるだけキーワードを言って絞ってくれば幸いです。」

「それじゃあ、『魔法』、『学園都市』、『漫画』で調べてくれな
いか。」

このワードで第一に行きたい世界が見つかるはずだが・・・

「はい、わかりました。」

女神がIPoneみたいなものにキーワードを打ち込んでいく。
そして、カタログらしきものが転送されてきた。

「お待ちせしました。」

これがキーワードに掛かったカタログです。」

「絞ってもこれほどあるのかよ・・・」

転送されてきたカタログは、約2、30冊ほどもあった。

しかも、1冊1000ページ以上はありそうな本で、中身もビッシ
リと様々な世界の概要が書かれていた。

こん中から探すのは至難の業だぞ・・・

そんな事を思いながら、本をめくっていく・・・

———約3時間後

「やっと見つかった・・・」

急ピッチで読み上げ、早3時間。

やっと一番行きたい世界のページが見つかり、そのページを女神に

見せる。

「この世界でいいんですね？」

「ああ、その世界で頼む！」

後、時代は原作から150年前で。」

「それでは、転生する世界を『魔法先生ネギま！』の世界、時代は150年前に決定します。
では次に、希望する能力を教えてください。」

ここも見事なまでに転生小説にありがちな感じだな。
大抵ここは迷うもんだが・・・
意外とあっさり手に入りたい能力が思い浮かぶ。

「よし、決めた！」

俺は以下の能力を求めた。

不老不死

様々な世界に存在するキャラの仮契約カードパクティオー

大空を始めとする波動すべてを使用可能

基本属性すべてを使用可能

Xブレードキをコントロール可能

臨界点突破を最初からしているイノセンス

魔力は最強クラス（ナギの約10倍）

竜人族化

我ながら結構頼んだなあ。
やり過ぎな気もするけど。

「こんなもんかな？」

「わかりました。」

少々多い気もしますが・・・いいでしょう。」

これでも一応削ったんだがなあ・・・
まあそれでも多いけども。

「それでは、これで転生の準備を終了します。」

「やっと転生出来るのか・・・」

長かった・・・特に世界の選択が。

「あとひとつ、最後に言っておく事があります。」

・・・？

まだあんの！？

「言っておく事って何だ？」

「転生は一応現在の年齢で転生します。」

ただし、転生によって、姿が多少変化するかわかれます。」

・・・へ？

まさかのランダム？

いやいやいや・・・まだ確定した訳じゃない。
念のため聞いておこう。

「……で、具体的にはどうなるんだ？」

頼むから大した変化じゃないって言ってくれエエエエエエエエ！
しかし、そんな俺の願いも空しく

「下手をすると●●●●●●●●になるかもしれません。」

ちょ、ひっでえ！

今とんでもない事さらりと言ったぞ、この女！

「え、ちょっ……」

あくまでランダムなんだよな……？」

「ええ、約10%の確率でなりますね。」

意外と高めエエエエエエエ！

●●●とか●●●はマジで勘弁勘弁勘弁勘弁勘弁勘弁勘弁勘弁
勘弁勘弁勘弁……

やはり気にしないなんて無理無理無理！

だが当然そんなのおかまいなしに何らかの空間を作っていた。

「転生陣、形成。」

転生陣、内容構成。

転生陣、完成。

転生、開始。」

直後、俺の下には魔法陣のようなものが浮かび、光り始めた。
つか完成すんの早すぎだろ！

「ちよっ、待っ……！」

そして――

俺の体に浮遊感を感じ、その次の瞬間

俺は意識を失った。

今思えば、これが全ての話の始まりだったな・・・
笑える話でもあったが。

全てはここから始まったんだ。

この後、俺は長い年月に渡って、戦いの輪廻に巻き込まれる事になる――

第三話 レッツ魔法世界！

原作から約150年前

魔法世界 メガロメゼンブリア――

目が覚めると、俺はメガロメゼンブリアの特に人目のつかない公園の真ん中にいた。

「ん・・・転生したのか・・・？」

俺は目をこすり体を起こす。

とりあえず姿も変化してる筈だ・・・

つーか頼むから●●●とか●●●とかはホントになってない事を祈るしかねえ！

そして、近くにある池で顔を覗く。

姿を見て見ると――

「うわっ、すげえイケメソになっとる！」

運良くいい方向に変化している。

元の時もそれなりにイケメソと言われたが、これはすげえ。

まあ、自分で言うなって話だけどな。

とりあえず、よかったあ。

●●●とかになってたら絶対orzどころじゃすまねえ。

自殺もんだよ、ホント（不死だから死ねないけど）。

ちなみに容姿に関する変化だが、黒髪は白くなっており、頭に曲がった感じの角もある。

おまけに体がみなぎっている。

つか、この目なんだ……？

金と銀、オッドアイなのだが、それに加えて、十字架が刻まれている。

何かの能力を秘めていそうなのだが、女神にこんな能力を頼んだ覚えはない。

一体この目はなんなんだ……？

そんな疑問が頭に浮かんだが、特に思いつめる事もなく

「ま、せっかく魔法世界に来たんだ。

魔法の射手でも撃ってみるか。」

俺はさらに人気のない場所に移動し、魔法の射手を撃って見る事にした。

つか……始動キーとか考えた方がいいのか？

確か、始動キーが必要だった気がするんだよねー。

んー、どうだったかなー……

「……とりま、詠唱だけでいってみつか。」

という事で、始動キーなしでいってみる事に。

セブテントリーギンタスビーリトウス・ルユサエンテース　サギテント・イニミクムサギタ・マギカ
「光の精霊　37柱　集い来りて敵を射て　魔法の射手　連弾・光
の37矢！」
ルーキス

よし、詠唱は完璧だ。

……どうだ？

シーン

「無理か……」

まだ体が馴染んでないんかねえ……

まあ、もし決めたとしても今度は無詠唱出来るようにしないといか
んしなあ……

最悪、『^{アララブラ}紅き翼』が活躍する時代までには使いこなさないとヤバイ
な……

100年以上あるから、大丈夫だとは思うが。

「後は体術もこなせるようにした方がいいか……」

体術は覚えという損はない。

ま、最初は魔法世界を一周してみようかな。

と、その前に……旅の準備をしねえと。

俺は世界を一周するため準備をするため、雑貨屋に向かう事にした。
今更ながら思い出した事だが、始動キーは別に高等魔法以外別に入
れなくてもいい事を思い出した。

何でこんな重要な事を忘れてたんだか……
ホント俺ってバカス。

そして、相当重大な問題に直面した。

現在俺は、雑貨屋のすぐ目の前にいる。

雑貨屋に入るのはいい。

が、金がない……

このままじゃ何も買えんし、かと言って金のアテもないしな……
さて、どうしたモンかなあ……

そんな事を考えていると、運悪くガラの悪そう（いや普通に悪いけ
ども）なゴロツキにぶつかった。

「おい、テメエ。」

当然ながら、因縁を付けられる。
正直なところ、逃走した方が手っ取り早いんだが、後々面倒くさくなりそうだし、ここは返事をしとくか。

「何ですか？」

まあ、予想はついてるんだがな。

服が汚れたから弁償しろとか、骨折したから金払えとかさー、ありがちだよねー。

で、ゴロツキ（と書いて雑魚と読む）の返答は

「テメエがぶつかったから服が汚れたじゃねえか。
弁償代として30000ドラクマ払えや。」

ホント、見事に予想通り。

ジャストミートだよ。

ホントありがち過ぎて笑えてくるわ。

ま、ちようどいい。

技の実験台になってもらうとしますか。

「わかりました。

あっちの路地裏で払いますよ。」

俺はビビったふりをして、路地裏に誘導する。

こうやって人目につかない場所に移動させて・・・っと。

「話がわかるじゃねえか。」

んじゃ、このバカを技の実験台にしますか。

「安心しな。

死なない程度の技にしたから。」

ゴロツキは壁に上半身が丸ごとめり込んでいた。

よくコロツと騙されるとは・・・コイツ、バカだな。

ちなみに、らいかほうけん雷華崩拳出せるかどうかやって見たら1発で出来た。

結果は見ての通り。

完璧に壁にめりこんでる。

らいかほうけん雷華崩拳が出せたところを見る限り、わずかながら体が馴染んできた
ってところか・・・

ちなみに、アイツから財布を抜き取ってきた。

コイツが意外と金を持ってたおかげで、しばらくは金に困る事はない。

雑貨屋で最低限のものを買い、後はどこに行くかを決めるだけとなった。

カツアゲ？

他にアテがないんだ、しょうがない。

後は実力不足なのが問題だな。
ジャングルにでも行っとくか？

世界一周するのに何故ジャングルに行こうとする？という疑問はスルーしていただきたい。

・・・・とは言え、ジャングルなんてこの付近にないし・
代わりに条件を課せるか。

まあ名付けて「リアル縛りプレイ作戦」だ。

大方の条件はこの通り。

- ・喧嘩を売ってきた奴は男であれば倒す。
- ・女の場合、手刀で気絶させる。
- ・一部の技は制限する。
- ・仮契約カードは滅多な事がない限り発動しない。
バックタイオー

まあ、こんなところかな。

万が一、自分と同等またはそれ以上の力を持つ奴がいた場合は、この条件は無効、つてのも入れとかないとな。
そうしないと俺がオワコンになる、ガチで。

1周目はこのルールで行くか。

最低限の武器もあるし。

つか、この時点じゃ今持つてる武器だけでも十分過ぎるくらいだ。
んじゃ、今から――

「世界一周を開始しますか。」

――
――
――
――
――

今思い出すと懐かしい出来事だったな……
まあ、この話全てを記しても、未だ――に過ぎないのだが――

――
――
――
――
――

主人公紹介

名前 シン

年齢 17

性別 男

身長 185

体重 65

外見 黒髪だったが白髪に。

目も変化し、黒から十字架が刻まれた金と銀のオッドアイに。
顔もそこそこのイケメソだったが超イケメソに変化。

主人公の希望で種族すら変化。

現在は竜人族になっている。

服は白と黒の組み合わせの服で、いくつかのリングを付けている。

特徴 一般人とオタクの境目

能力 大空を始めとする波動

基本属性すべてを使用可能

異世界の住人の仮契約カード

脳内CV…櫻井孝宏

今の所はこんな所です。

途中で新たな能力を手に入れるかもしれません（というかほぼ確定的）。

主人公紹介（後書き）

書いた当時はかなりチートかな？と思いましたが、ここから更にチート能力のオンパレードになってました（笑）
修正が終わりしだい、続きを投稿します。

第四話 修行（前書き）

これから本当に長くなります。

万越えが珍しいって、この他の小説見て初めて知った・・・
修行とか書いてますが、ほぼはしよってます（笑）

第四話 修行

世界一周& a m p ;リアル縛りプレイ作戦開始から2、3日が経過した。

メガロメセンブリアを出てからは、ガラの悪い奴によくからまれ、現在の時点で50人程のしている状態だ。

当然ながら男はブチのめし、女は手刀で気絶させた。

この2、3日でわかった事と言えば、メガロメセンブリアの治安がいいだけで、それ以外の大半の土地は治安が悪いのが当たり前つ1事。

まあ、タチが悪い訳だ。

今んところ、実力の差も分からないバカしか来ないしなあ・・・
竜種とか出て来ねえかな。

今の実力でも竜種を倒せるだけの力はあるはずだ、多分。
とにかく、一ゴロツキ（雑魚）では全然鍛えようがない。
かと言ってこの時代で生きてる奴なんか・・・あ。

エヴァンジェリンとアルビレオ。

アイツらならちゃんとした腕試しが・・・

いや、やっぱ無理。

いくら不老不死とは言っても強くなきゃ宝の持ち腐れ。

つまり何が言いたいかと言うと・・・このままでは間違いなく殺られる・・・

死ぬのが一回だけならいいんだが（↑よくねえよ

不老不死だから・・・延々と生き地獄を味わう事になる。

それに第一、原作でアイツらがガチの本気になった所を見た試しがない・・・

ネギまを見てればわかるだろうが、まともなバトルの時は相手はほぼ全員お遊び同然であしらわれ・・・

ナギとのバトル時は一切実力を発揮できないまま撃沈。

ネギは一応倒したものの、人造霊・・・

※ちなみにエヴァ本体の強さは人造霊の数倍

アルもほぼ同様である故に、倒せる自信がない。

だってアイツ本体・・・骨董品にありそうな本なんだから。

倒せる倒せない以前に、強過ぎるんだ。

おまけに、俺以外にも異世界人はいるらしい・・・

しかもそいつはエヴァと行動をとみにしているらしい・・・

とにかく、アイツに挑むのはせめて魔法とか使いこなせるようにしないと無理過ぎる。

ついでに一緒にいる異世界人の情報も集めないと・・・

拳闘士で鍛える方法もありだが、問題点があり過ぎるから無理だし。

「・・・やっぱ普通に世界一周するのが一番かな。」

結局、最初に予定していた世界一周にすることに。

最初から世界一周はするつもりだったけどな。

それから約2、3時間経過し、森道をのんびり歩いていると

ガアアアアアアアアアアアア！！

・・・何か歩いてたら竜種出て来たよ。

しかも黒竜・・・初っ端からかよ？

ちよっと村を離れただけの森にだぞ？

普通こんな場所にいる事自体がありえねえ。

・・・あ。

そういえば、この辺の地図見た時、竜の絵に「D E N G E R（危険）」とか書いてあった気が・・・

どうせ出ないだろうと思って気にもしてなかったんだが・・・ガチで出るとは思わなんだ。

まあ、いずれ竜種とは戦いたかったし、願ったり叶ったりなんだけどな。

じゃ・・・

「剣と後、仮契約カードを^{バックティオー}と・・・」

俺はX^{キー}ブレードを出し、仮契約カードが^{バックティオー}収納されているホルダーから適当に一枚取り出した。

さて、一体誰かな？

・・・ハセヲか。

とりあえず、コイツが仮契約カード第4号だな。
念話で話しかけるか。

テレパディア
「念話。」

俺は念話を発動する。

程なくしてハセヲに繋がった。

（・・・誰だ？

俺の頭の中で話しかけてくるのは？）

（・・・んー、やっぱ、知らないようだねえ。

俺はお前の契約者、ってところかな？）

（・・・契約者？

一体、どういう事だ？

何が言いたい？）

・・・やっぱし、事情説明が必要になってくるよねー。

「（ま、事情は後で話す。今はコイツ倒すの手伝ってくれ。）

召喚 シンの従者 ハセヲ。」

とりあえず面倒くさいので事情説明は後回し、有無を言わず召喚。
これが当たり前なのよ。

一応今までに召喚したのはコイツを含めて4人。

で、この事情を知っていたのは1人だけ。

つまり簡単に言うとな・・・

あの女神、一部の契約者にしか事情説明してないんだよ・・・
という訳で、事情を知らない奴が出た時には俺が事情説明をするハ
メに・・・

「・・・!？」

は!？なんでPCの姿なんだ!？

ここってまさかAIDAサーバーじゃ・・・!？」

ちよい、パニックってんな。

ま、一回PCに意識が取り込まれてたからな。

AIDAサーバーだと思うだろうよ。

一応原作プレイしてるからある程度は把握出来る。

フォームとかからして、こいつはゲームクリア後のハセヲだな。

「安心しな。

ここはお前の世界でも、The worldでもない。
異世界だ。」

「は・・・？」

異世界？」

「信じられないか？

まあ、当然だろうな。

でもアレ、The worldにいたと思うか？」

俺は黒竜の方に指をさした。

ハセヲの顔からは血の気が引いていた。

「り・・・竜!？」

こんなモンスター見た事なんてねえぞ・・・!？」

バグモンスターか!？」

「そりゃあな。

でもお前、クビアと戦った事あんだろう？

あれと比べれば、雑魚同然だったの。」

こればかりはどうしようもない。

さて、他の奴ら同様納得してくれればいいんだけど・・・

「チッ、納得行かねえが、この状況を打破するためだ、仕方ねえ!」

ハセヲは武器を出そうとする。

が、俺が制止をかける。

「普通の武器より効率良く倒せる方法がある。
持ち物を調べてみる!」

「持ち物・・・？」

・・・なんだ、このカー、うおっとお!？」

喋ってる間にも、黒竜は容赦なく攻撃をしてくる。

当然、攻撃を避けながらの話になる。

「そのカードを持って『^{アデアット}来たれ』と言ってみろ!」

「こ、こうか!？
^{アデアット}
来たれ!」

発動した瞬間、トゥーン、という音が鳴り響く。

来い———

来いよ———

俺はここにいる！

『スケエエエイス！』

「……これは、憑^{アバター}神！？
何で使えるんだ！？」

これは……

「どうやら、お前の能力はこっちでも憑^{アバター}神が使えるようになる事と
基本能力向上らしいな……
さて、行くぜ。
一緒にアイツを倒すぞ。」

「あ、ああ！」

俺はXブレ^キードで黒竜を斬りにかかる。

「フンッ！」

ガアアアア・・・！

当然の話だが、俺の太刀筋は見事なまでに素人。

だが、Xブレードで切りつけた場所は、見事なまでに綺麗に切れていた。

切れ味が異常に高いのだ。

流石あの世界ですべての世界の扉を開ける最強のキーブレードだけあるな。

ちなみに何故Xブレードで物が切れるの？という疑問があると思うが知るか！の一言に尽きる。

俺は、更なる追撃を与えるため、黒竜に向かっていく。

案外楽に黒竜を倒せた。

これもハセヲがサポートに回ってくれたおかげだな。

しかし、トドメ俺がさしたかったのにハセヲがデータドレインやり出すとは思わなかった。

しかも、もう少しで俺にも当たるところだったし。

危な過ぎワロタ。

つかデータドレインも使えるのかよ……

それ以前にデータドレインって生身の竜とかにも使えるモンなのか？
まあそこは気にすんなって事ですわかります。

その後、俺は事情説明をした。

ハセヲはあんまり信じられないような顔をしていたが、自分がPCの姿になっている事や、つい先程の出来事によって、少々理解したようだ。

「んじゃ、もう戻っていいか？

色々あって疲れた・・・」

「ああ。

戻っていいぜ、次もよろしく頼むわー。」

「あんまし面倒じゃない時に頼む・・・
リリース
帰還。」

ハセヲは元の世界に戻って行った。

見てわかる通り、ハセヲ達の仮契約カードは普通の仮契約カードと
バクティオー
は違う。

召喚距離や、戻る手段として帰還とかがあり、オリジナルより便利な機能がついている。
リリース

ちなみに、帰還に関しては、1人目が幸い事情を知っていたため、他の三人に事情を説明する事が出来た。

そんな事はさておき。

実は『マギア・エレベア闇の魔法』を覚えてみようかと思っている。

試練をクリアする事には自信がある。

だが、問題がある。

『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物がどこにあるかって事だ。

マジックキャンセル
『魔法無効化』を習得するって手？

修行以前に修行の必要がなくなっちゃうだろうが。
とにかく、今は修行、あるのみだ。

「とりあえず、仮契約カードバクティオーから対戦相手を出すか。」

さて、ハセヲ以外で・・・っと。

俺は適当にカードの束から一枚引く。

お、当たりk t k r。

テレパディア
「念話。」

（――女神から事情は聞いてる。
俺に何か用？）

お、繋がった繋がった。

（修行の相手をして欲しいんだけど、時間空いてるか？）

（まだ会った事ないけど、カード越しからでも異常な魔力持ってる
のわかるんだが・・・

お前、修行しなくても十分強いだろ。

自分で修行出来ると思うんだけど？）

（自分一人で修行するより誰かいた方が効率がいいんだよ。

確かに魔力容量は自分で言うのも何だが、結構あると思ってる。

だが武器の扱い方とかに関しては素人同然なんだ。

頼むから、修行に付き合ってくれないか？）

（・・・分かったよ。

だけど、俺が教えられるのはキープレードの使い方だけだぜ？）

（大丈夫だ、全然問題ない。

キープレードの使い方は剣にも利用できる。

それじゃ、呼ぶからな？）

俺は、カードを頭から離す。

そして、カードを何もない所にかざす。

「召喚 シンの従者 ソラ」

ソラを召喚し、今回の修行の細かい内容を話す。

「あんた、キープレード使いなのか。

修行に付き合ってもいいんだんだけど、何で俺なんだ？他の人でも良かっただろ？」

「適当に引いたらお前だったんだ。

都合が良かったし、今現在のキープレード使いの中じゃ、お前が一番強いだろうと思ってな。

一応、まだ他に誰かいるとか把握していないのもあるけどな。」

「それで俺に・・・

俺にそこまでの実力があるとは思えないんだけどなあ・・・」

無駄に謙虚なソラ。

実力が無い筈がない。

世界を二度救ってる「光の勇者」なんだからな。

「とりあえず、キープレードを使うコツを教えてください。」

コイツの能力は一応ゲームとかで把握はしてるが、まさか実際に戦
る事になるとは・・・

ほぼ未知数の領域だ。

正直言って、ゲームで見ると実際にやるのではワケが違う。
だから、把握していても、ちゃんと対応出来るかは、俺次第だ。

「コツね……」

ハッキリ言って、ただただハートレスとか倒してただけなんだけど
なあ……………」

まあ、確かにいきなり光の勇者になって、世界をかけた戦いに巻き
込まれていったからなあ・・・
少し無理があったか。

その時、ソラが口を開く。

「でも・・・強いて言うなら、実戦あるのみ、かな？」

俺はとにかくカイリやリクに再会したくて、旅をしてきて、戦って
きたからね。」

なるほど。

確かに実戦を重ねれば必然的に強くなるな・・・

まあソラの場合は、カイリとリクに再会する目的だったのが、ハー
トレスやノーバディによって戦いの渦に巻き込まれていったからな
・
・

だが、俺の場合、すでに身体能力が並以上、魔力に関しては異常と
きた。

実戦は、やはり雑魚ではなく、できる奴と戦いたいものだ。

「それじゃ、早速だけど修行を始めるよ。」

「ああ、よろしく頼むぜ。」

さて、コイツはどのような能力なんだろうな・・・？

アデアット
「来たれ。」

ソラが仮契約カードを発動すると、ファイナルフォームに変化し、身体能力も上がっていた。

これを見る限り・・・

「能力はフォーム制限解除& a m p; 身体能力向上か。
妥当な能力だな。」

ハセヲ、ソラそして他の3人を見る限り、今の力より更に向上出来る類、つまり、ドーピングみたいなものだと言える。

ただ、まだハセヲとソラ、他3人しか分かっていないから、別の類のものもあるかもしれないけどな。

「んじゃ、準備OK？」

「ああ、来い！」

同然というか、初っ端から本気で来やがった。

見事にフルボッコにされたよ……

流石世界を闇から救った勇者。

予想以上に戦闘技術が高い上に、キープレードを手のように操ってたからな。

しかも、ゲームみたいにワンパターンではないから、全然動きが読みにくい。

コイツの実力は伊達じゃねえ。

ここから約1ヶ月修行に励むのだが、長くなるので省略。
そして、1ヶ月後。

俺はXブレードを使いこなせるようになっていた。

修行は大詰めに入り、ソラとの一騎打ちに突入した。

そして、今し方決着が着いた。

勝負は――俺の勝ち。

やはり実戦が一番実力を伸ばしやすいな。

「これだけ出来れば上出来かな。

ここまで伸びると思わなかったよ。」

「ありがとよ。

そりゃ実戦を繰り返してたら、必然的に強くなるさ。」

まあ、他の奴と相手してたからのもあるんだけどな。

我流だが剣術もたしなむ程度にはなったし。

「言えてるかも。」

じゃ、俺は帰るから。」

「ああ、修行に付き合ってくれてありがとな。」

「どういたしまして。
リリース
帰還。」

よし、キープレードの扱い方とおおまかな剣術はマスターした。

後は体術と魔法e t c . . .

これは自力でOK。

まあ、体術はすぐにはできないから後回しとして、まずは魔法のマスターが優先だな . . .

ちなみ習得順は、覚えたいものから覚えていくつもりだ。

まず、詠唱を試して、成功すれば無詠唱。

後は虚空瞬動とか、覚えられるものはすべて覚えとこう。

約30分後

さて

魔法↓体術↓e t c . . . の順にマスターする、としてだ。

一応今現在まで、プランを練ってたわけなんだけども．．．．．俺、今約100人のゴロツキ（と呼んで無謀なバカ）に絡まれてるんだ．．．．．

てか賞金稼ぎもいるんですけど．．．約2分の1、つまり約半分くらい。い。

ま、コイツらを実験台にして、魔法をかましますか。

俺は詠唱を始める。

「ウェニアント・スピリダスアールス・マムクサセグチオアヒット・テンベスタースアウストリーナ来れ雷精 風の精 雷を纏いて吹きすさべ ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス 南洋の嵐 雷の暴風
！」

直後、雷の暴風が3分の1ぐらいのゴロツキ（雑魚とも言う）どもを吹き飛ばした。

ん、雷の暴風もコントロール出来るようになってきてるな。

肉体がある程度魂に馴染んできてるっぽい。

しかしよく懲りないな．．．

賞金稼ぎまで雇うとは．．．それもタチが悪い奴ばかり。

ここだけの話、修行中にも乱入してきてた事もあった。

全部撃沈させたけど。

正直超面倒くさい。

「蛆みたいにしつこく沸き過ぎだろ．．．たる過ぎてうんざりするわ．．．」

あ。思わず口に出しちゃった。

しかも運悪くゴロツキ（面倒くさいから以降雑魚）の一人に聞こえてしまったが故に、残りの雑魚が怒りをあらわにして来るハメに．．．

俺の場合、魔力容量がナギ以上にある上、本気の出力でやったら間違いない雑魚集団が死ぬ。

雷の暴風であの威力なんだからな。

後、さすがに悪人でも殺るのは引けるっていうのもあるけどな。

偽善者？なんとでも言いなさいな。

と言う訳で、出力を大体100分の1にして試す。

さて、詠唱開始だ。

ヘカトンタキス・カイ
「百重千重と重なりて」

ここらまで読んだらここから離れて・・・と。

瞬動をとっさに使って、雑魚の一斉攻撃を回避する。

キーリアリス・アストラブサト
「走れよ稲妻」

ここで座標の目安を設定。

初めてだが、座標設定くらいチート仕様でなんとかなるだろうと思つての事である。

よし、トドメだ。

ここらで威力調整・・・と。

食らいな！

キーリブル・アストラベ
「千の雷！」

ドガアアアン！！

「ギャアアアアアア！！！！！！」

雑魚達が絶叫を上げながら気絶していく。

ま、気絶どころか、下手したら重傷だな、ありや。、

ただ出力は100分の1ぐらいに設定したから死なんだろう。

雷の暴風を食らった奴らは・・・一応今食らった奴らと同じぐらいだな、多分。

ダメージをどれくらい食らったか頭の中でおおまかに計算すると、同じくらいの計算になる。

ちなみに瞬動はその場しのぎでやってみたんだが、問題なく1発で成功出来たな。

自分で言うのもなんだが、意外と天性の才能があるのかもしれん。そうそう、ずっと忘れてたのだが、確か全属性の波動が使えるようになったってはず。

さて・・・

俺の指には右に3つ、左に2つ指輪がついていた。

全部見た事がないリングだな・・・

とりあえず、覚悟を炎に・・・

ボツ

「おっ、燃えた。

まさか一発で出来るなんてな・・・

っーか見た事ねえ炎だな。

虹の炎・・・？」

あの女神、どうやら7つある属性を1つにしてくれたらしい。今度会えたら、礼でも言っとかないとな。

「・・・剣に炎を灯してみるか。

アイツ（山本）がやってたみたいに出来るかな？」

俺は虹の炎をXブレードに灯して見る・・・

ボツ

灯す事は出来たが、すぐに消えてしまう。

「・・・成功だが、まだ実戦では使えるレベルじゃないな・・・自由に扱えるようになるまで、このままでもいいか・・・」

他には匣兵器^{ボックス}。

アニマル匣とあのイノセンスの収納匣^{ボックス}の2つが腰に付いてる。

俺は、ボックスに炎を注入しようと試みたが、危険性が多い。

ただ、まだ死ぬ気の炎のコントロールが完全じゃないし、ヘタをすると匣^{ボックス}を殺してしまうか、よくて暴走するからな。

しばらくは使用を控えようと思う。

さて、仮契約カード^{パクティオー}だが・・・

俺は収納されてるホルダーからカードを全部引っ張り出す。

・・・引っ張り出したのだが、出した後、ホルダーに目を向けると、何故かカードがびっしり入っているのだ。

一応さっき全部引っ張り出したはずなんだが・・・実際、俺の手にはさっき引っ張り出したカードがある。

そして、そのカードの束も全部抜き取るのだが、抜き取った直後、ホルダーからさらにカードが収納されている。

・・・何これ四次元ポケット？

つか多過ぎじゃね？

ちゃんと数えてないからよくハッキリわからんが、少なく見積もっても100枚は余裕であるわ・・・

あのホルダー普通だったら50枚くらいが限界なんだが、俺が今持つてる2つの束、そして今収納されているカードを見ればわかる通

り、どう考えてもドラ●ものの四次元ポケットみたいにめっちゃ収納出来るっばい。

ついでにザッとカードを見てみたが、ホントに色々な世界の主人公や、主要キャラクターの仮契約カードパクティオーが目立つ。

ん？

このカードはまさか……

ネギ・スプリングフィールド……

当然ながらこの世界の住人のカードも入ってましたよこの野郎。

他にも何人かの主要キャラクターの仮契約カードがあり、驚きの一言に尽きる、と言ってもいい。

幸いほとんどのカードは俺の知っている世界のものだったのだが、中には白いカードが入っていた。

……これは何か条件を満たせば仮契約カードパクティオーになるって類か……？

……時間はまだあるんだ。

原作メンバーの件も含めて、今は気にしなくてもいいか……とりあえず……

「ネギ達のカードが入っているって事は、アイツら（原作）の時代からここに呼び出せるって事か？

これ呼び出してもタイムパラドックス起きねーんだろうな……？」

今頃向こうじゃ多分ヤバイ事（多分ゲートポートらへんの時系列の可能性が高い）が起こってるかもしれないなあ……呼び出すのはちよつとな……

念話テレパディアでも使えば状況はわかるんだろうが……今使うのはちよつとな……

とにかく、俺が今成すべき事は、『闇の魔法』マギア・エレベアの巻物を手に入れる

事だ。

「魔力濃度が高い場所を片っ端から探して行くか……？」

今は、『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物を見つけるためにも、ネギ達のパクティオー仮契約カードの件は一旦保留する事に……
まあ結構後々になる可能性高し、だがな。

「後は無詠唱を極めておかないとな……『マギア・エレベア闇の魔法』を使う時にバリエーションを増やさないと。
それが終わったら、体術を極める番だ。」

ちなみに体術と言えば、ネギやエヴァンジェリンが思い当たるが、基本的にアイツらレベルになれば必然的にかなりのレベルになると思っている。

とにかく、我流でやってみようかと思ってる。

中国拳法？

桃源とか行ってみるさ。

魔力だけなら自分で言うのもなんだが、ナギを越えたバグキャラ。が、魔法はまだごく一部だけしか使えないうえに、体術も皆無に近いので、バグメンバーを越えるためにはおそらく最低でも5〜10年は掛かると踏んでいる。

俺はそんな事を考察しながら柔軟運動をする。

瞬動が成功したので、虚空瞬動も試してみる準備をしているのだ。

「瞬動ができたんだから、虚空瞬動だって出来るだろ。
やってみっか。」

とりま、準備OK。

「まずは空中にジャンプして、その後に瞬動、だっけ？」

結果として、このやり方でやったみたのだが、いとも簡単に出来た。何か簡単に出来るな。

これ、他の転生者もこんなんでホイホイ出来てたんじゃねーかな。ま、これから転生者になるであろう奴らにはいい参考になったかもねー。

え、妄想乙？

妄想じゃない、想像だ！

でもこの調子なら普通に魔法、体術をマスターするのには5年でいけるかもしれない。

思った通りにはいかないだろうが。

『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物があるとすれば、やはり魔力が濃厚で危険な所だよな。

大体危険な場所にあるのが相場だし……

「……探すよりラカンがやった事を試した方が早い気もするが・
・やってみるか。
やって損はないしな。」

サギタ・マギカ魔法の射手は何故か出来なかったが、多分偶然か、体がまだ完全に馴染んでなかったのだろう。

千の雷も普通に出来たし、ラカンが奈落の業火でやったみたいに俺も奈落の業火でやってみるか。

同じ魔法の方が、失敗した時の対処が楽に出来るし。

「一來れ（アギデー）テネブラエ・アビュシエンシス・インケンデンス エト・インケンデ深淵の闇 燃え盛る大剣 闇と影と憎悪と
ウンブラエ・イニミ・キティオス・イダモト・エヌト・メー・エト・エウム シント・ソールム・インケンデンス破壊 復讐の大焰 我を焼け 彼を焼け そはただ焼き尽くす者
インケンディム・ナエ奈落の業火！」

魔法は問題なし。

次は、術式固定だ。

スタグネット
「術式固定」

パキパキパキ

魔力を丸い固まりにしていく。

よし、固まりにする事も成功した。

後は体に取り込むだけだ。

コンプレクシオー
「掌握！」

スプレメントウム・ゾルマティオーネ
魔力充填『術式兵装』！

成功したか！？

・・・うつ！？

取り込んだ瞬間は何もなかったのだが、少しすると、体の節々から激痛が走る。

ビキッ、パキ、パキン！

「ぐっ、これは超キツイ・・・
さっきから体中パキパキいってやがる・・・」

ラカンがキツイと思う訳だ。

こんな激痛、耐えられる奴なんかなかないねえって。

これは確かに相当のチートorバグ野郎じゃなかったら死んでるな、
絶対。

かと言う俺も、不死じゃなかったら死んでただろう事は言うまでもない。

「やっぱ、『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物が必要だな。
あんなやり方だと精神が逝っちまう。」

結果を言うまでもない。

見事なまでに失敗。

流石にこれは例外らしい。

さて、色々な事を調べてたり、検証していたが、現在いる場所はエ
オス。

メガロメゼンブリアから約1000km程離れた街だ。

この街に入ってから当然の如くまた雑魚が絡んでくる訳だが……

魔法の実験台にしているから問題はない。

鬼畜と思った奴。

腐ってる野郎共を実験台にしてんだ。

問題ないだろ？

ま、殺ってはいないから、大丈夫だろ。

稀に賞金首を見つけるが、向こうから絡んで来ない限り、倒すようなマネはしていないし、するつもりもない。

わざわざ賞金首と戦うなんて危険な橋を渡る必要なんかないだろう？ま、危険な橋と言う程でもねえが。

一応これからの予定は、様々な土地を移動し、『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物がある可能性のある場所を探す。

いずれヘラスの方にも行こうかなとも思っている所だ。

はつきり言って、ヘラスがどんな所か原作でも全然出て来ていないので、一回見てみたいと思っている。

今の時代はまだ人と亜人が対立している時代だ。

だが、今の俺は亜人だからな。

向こうに着いても多分危険な目には合わないだろうな。

アラルブラ『紅き翼』が現れるまで・・・後約130年後――

早く会いたいものだ。

その頃には俺も最強クラスになってるはず・・・

「・・・あれ？」

それから2、3日後。

ある酒屋で賞金首のリストを見ていたのだが……

「100000ドラクマ……？」

何故か俺が賞金首になっていたのだ。

誰も殺っていないはずだが……

賞金稼ぎや賞金首を倒したからか？

あ、雑魚の苦情もあるか。

でも、賞金首に関しては、大した額じゃない奴ぐらいしか倒してない筈……

雑魚はもう数え切れない程倒した。

※この時約2ヶ月程度が経過（この世界に来てから）

まあ、100000ドラクマ程度ならなんとかなるだろう、多分。

マギア・エレベア

『闇の魔法』の巻物がある場所として一番怪しい所は……熱帯地だな。

好んで来る場所じゃねえし、何よりも危険過ぎる。

長い考察の末、目指すはエラジウム大陸にある、ケラベラス大樹林。大体9000kmはあるが、キブレードにあるあの機能を使えば、結構速く着くだろう。

機能と言うのは、キブレードライドの事だ。

これはソラも習得していないため、独学で習得した。

ヴェントウスとかに頼めばいいのにだって？

まだ全部見れてないんだよ。

少なくとも最初のカードの中にヴェントウス達がいなかった事は確かだけどな。

全部見るだけの暇なんて、修行でほとんど潰れるわ。

ちなみに、ヴェントウス達はキブレードを投げてキブレードライドに変化させているが、俺の場合、虹の波動を雲の波動に特化させ、一時的に巨大化させている。

後は魔力を駆使し、浮かばせるだけである。

はつきり言って、無理矢理飛べるようにしたに過ぎない。

おまけに我流だから滅茶苦茶不安定。

いずれちゃんとした方法を習得するつもりだ。

「さて、飛ばすぜ！」

俺はXブレードをスピードの出る限り出力を出し、飛ばした。

モノホンのキーブレードライドには負けるだろうが、それでも全然早エ！

だけどまだコントロールしきれねん・・・

気を抜いたらバランスが崩れちまう。

「アッーーーーー！」

ガチでバランスを一回崩して落ちそうになった。
時速はおそらく400kmぐらい出たと思う。
よく立っていられたなと思った。

第四話 修行（後書き）

次の話も修正出来次第投稿します。

しかし、1年近く放置してたから、まだ書いてないところ書けるかどうかわからん・・・（汗）

読者様のためにも、気合を入れて修正&mp;執筆頑張ります。

※全体的に修正前にはなかった、または削っているシーンなどがあります。所謂、リメイクみたいなもんですね（笑）

第五話 『闇の魔法』の試練（前書き）

色々あって遅くなりました、サーセン。

あんまし人目に付くと恥ずかしくて人目がなくなった時にちよびちよび修正するハメになるんですねー（笑）

さて、これも肝心の試練の描写が少ないです（汗）

その代わりなんでしょうかね・・・

次章から、戦闘描写が多くなる事は確定的に明らかです（笑）

第五話 『闇の魔法』の試練

——修行を開始してから約半年が経過した訳だが、時間の経過が遅い気がする……

あれからまだ4ヶ月程度しか経ってねえし。

アレか、リアルタイムでだと遅いの、思い返すとめっさ時間が早く感じるアレか。

あれからか？

結局、コントロールがしづらかったから、浮遊術で対処してた。

それと、都市で何回も金稼ぎと滞在を繰り返してたな。

だって、居心地が良かったんだもの……雑魚が沸く以外はな。そんなこんなで、ついにケラベラス大樹林の端に到着。

「はあ、やっと着いた。

後は遺跡を片っ端から見えていくだけか。」

ケラベラス大樹林には、古代の遺跡がかなりあるらしく、その中に

『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物があるんじゃないだろうかと俺は踏んでいる。

仲間を呼び寄せるか。

テレパデイア
「念話。」

(ザ——……)

そういえば、この辺には天然の魔力妨害岩がかなりあるんだった。召喚距離に関しては異世界でも召喚可能なのに、この辺は改良してないのかよ……

「まあいい。

問答無用で召喚するから。」

ホルダーから仮契約カードを4枚程取り、召喚する。
一応、3手に別れて、探す計画の予定だ。

「召喚 シンの従者 バロン・アベル リュンメイ・ランカ カペ
ンシス イクシア・ジュン」

つか、元ネタ知ってる奴いるのか？

※コイツらは某人気オンラインゲームのアニメ版のキャラ達です。
戦力としては優れているからいいんだが。

これも一応原作プレイ&アニメ見た事あるが、多少矛盾が
あったところなあ・・・

あと、作画がもつと良かったらなあーとも思ったね。

ネタ的には結構面白かったけどさ。

「あれ？さっきまで酒場で飯を食ってたはずだったよな。」

「暑ッ！蒸し暑ッ！どこだよここ！？」

「熱帯森？なんでこんな所に？
さっきまで酒場にいたはずなのに。」

「一体どうなってるのー！？」

食事中に呼び出してしまったようだ。
しかも、全員事情を知らないパターン。
女神よ、一部じゃなくて全員に事情を説明しとくれよ・・・

「・・・な食事中に呼び出して悪かったな。
悪いが、全部話すのは面倒なんでな、簡潔に話すぜ。」

「ん？アンタ、誰だ？」

「お前達のマスター？と言えいいかな？」

「マスター？どういう事だ？
とにかく、今の状況を説明してくれ。
把握が来ん。」

「ああ、実はだな・・・」

俺は、4人は俺と仮契約している事、
『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物を探した
めに4人を呼び出した事を話した。
4人はあまり信じられない感じのようだ。
まあ、信じろって方が無理なんだろうが、この状況を見れば、ハセ
ヲの時と同じように納得するだろ。

「状況が状況だしな。
要するに手伝えばいいんだな？」

「まあ、面白そうだしいいんじゃない？
こんなスリル満点な所、滅多にないよ。」

「何呑気な事を言ってるのよ、カペンシス！」

「あたし達、元の世界に帰れるんでしょね・・・？」

「ああ、安心してくれ。」

巻物を手に入れ次第元の世界に戻す。」

ちゃんと戻れる事はハセヲとソラで実証済みだ。

ちなみに、帰還リリースの事に関しては言っていない。

言ったら誰か勝手に帰りかねないからな。

仮契約カードは各自ちゃんと所持していたので発動の仕方を教える事にした。

「とりあえずアデアット、と言ってくれ。」

そう言えば、そのカードが力を与えてくれる。」

「「「アデアット」「」」」

4人が発動させる。

そして、4人の手にはアーティファクトが握られていた。

「なんだこの剣・・・」

やけに手に馴染む・・・」

「おおこの銃、僕にはお似合いのアーティファクトじゃないかあ
♪」

「確かに馴染むわ・・・」

「この杖、かなりいいものだわ！
今ならどんな魔法でも簡単に出来そう！」

まあ、アーティファクトは、それぞれの特性を強化したり、それぞ
れに向いた優れた武器を手にする事が出来るからな。
コイツらの場合、それぞれかなりのレア・アーティファクトのよう
だ。

「とりあえず、さっき言った通り、俺の目的は『マギア・エレベア闇の魔法』つつー
魔法の巻物を見つける事だ。」

「それを手に入れるためにボク達をこの世界に連れて来たって事だ
ろ？」

「まあな。」

で、これから三手に別れて探索する。

巻物を見つけたらこの狼煙を上げてくれ。」

「「「OK!」」」」

ちなみに探索チームは以下の通りである。

第一チーム・シン

第二チーム・バロン・リユンメイ

第三チーム・カペンシス・イクシア

ちなみに第二チームにはバロン、第三チームにカペンシスに狼煙を
渡しておいた。

「準備は出来たか？」

「ああ。」

「それじゃあ、開始だ！
散れ！」

それぞれ三手に別れ、各々遺跡がある方向へ向かっていく。

さて、どの遺跡を探すかな。

移動中に何個かの遺跡を見つけたが、どれが怪しいか迷っている。
一個一個探してたら、何日も掛かっちゃう。

魔力の探知ならなんとかならんかな？

意識を周りに集中する。

・・・・禍々しい魔力っぽいのは感じないな。

次の遺跡行くか。

S I D E シン O U T
S I D E バロン I N

「リユンメイ、そっちはどうだい？」

「今の所は全然よ。」

そもそも広すぎて見つかるのかすらわからないわ。」

しかし何でこんな事になったんだ……
俺達が飯を食っている時、いきなり熱帯森に放り込まれて、しかもそこに全然知らない奴がいて……

アイツが言っていた『闇の魔法』^{マギア・エレベア}とか言う魔法の巻物を探さないと元の世界には戻れねえようだし……

早い所その巻物を見つけて、元の世界に帰らないとな……旅の続きができねえ。

「バロン！この辺には巻物は見当たらないわ。
他の場所に行きましょう。」

「わかった。

今行く。」

……しかし、本当に見つかるのか不安だ……

S I D E バロン O U T

S I D E リュンメイ I N

しかし厄介ね……

こんな広い熱帯森から巻物を探せなんて……

いくら仮契約とか言うものをしてるからってこんなの滅茶苦茶よ。

あたしは気とかで探って禍々しい気がないか調べてるけど、全然何も感じない。

おまけに見た事がないモンスターばかりで寒気が……

全部吹っ飛ばしたけど。

特にあの服を溶かすモンスター……

寒気を通り越して虫唾がしたわ。

はぁ・・・

早く元の世界に戻りたい・・・

SIDE リュンメイ OUT

SIDE カペンシス IN

「フフフフ・・・こんなスリルを待っていたんだ！」

いやー、飯を食った時にいきなりここに呼び出された時は流石にビビったね。

でも、よく考えたら異世界ってすごいじゃないか！

ボクの銃の腕前を最大限に使えるしね！

ま、危険極まりないのはゴメンだけどさ。

グワアアアアア！

・・・ん？

アレ・・・まさかドラゴン！？

「おいイクシア！逃げるぞ！」

「え！？ちょっと待ってよー！」

なんでここでフラグが立つんだ！

全速疾走で走るが、僕らとドラゴンの差は縮まるばかり。

このままだと食われる・・・！

「やむを得ないな・・・

イクシア！戦うぞ！」

「ええ〜!？」

あんなデカイドラゴン倒せない訳ないよ〜!」

「安心しろ!

こんな時こそ、アーティファクトがあるじゃないか!
イクシアは援護をしてくれ!」

「わかった!」

僕は空中へと舞う。

そして、銃を——構える。

ボク的美技を食らえ!

「スカッドジエノサイド!」

グガアアアアア・・・

四方八方、360度に乱射をする。

僕の放った弾はほぼ竜にキレイに当たる。

この銃・・・最高!

「精霊召喚 精霊王エチエベリア!

あのドラゴンを倒しなさい!」

ん、イクシアもハイレベルの精霊出したか。
勝負は決まったな。

「よし、決まったか。」

「あのドラゴンスゴい厄介だったね。
でもこの杖のおかげで倒せたね!」

「ああ。」

でも、巻物を見つけないければ、元の世界へ戻れない。
早い所見つけて、元の世界に帰ろうぜ。」

「うん!」

フ・・・

我ながらカッコいい台詞・・・
つか、さっき思った事取り消し。

こんなフラグ立ちまくりじゃ、命がいくつあっても足りないよ・・・
・・・

S I D E カペンシス O U T
S I D E イクシア I N

はあ・・・蒸し暑い・・・

さっきはドラゴンまで出て来るし・・・

もうー! 不安要素が多過ぎよー!

でもカペンシスあんなに強かったかな・・・?

あたしも強くなってる気もするけど・・・

この杖のおかげなんだろうな・・・
この世界にしかない魔法とかあったら覚えたいみたいなあ。

あたし達のマスター・・・
名前はシンだったかな？
今度シンに聞いてみようっと。

「おい、イクシア〜！
遺跡を見つけたぞ〜！
調べてみようぜ！」

「わかった！今行く〜！」

でも今は巻物を見つけて、元の世界に帰るのが最優先！
さあ、頑張って探すぞ〜！

S I D E イクシア O U T
S I D E シン I N

・・・見つかんねえ！
もう100を越える数の遺跡を見つけたが、未だに見つからん。
禍々しい魔力を感じる筈なんだが・・・
何故に禍々しい魔力Ⅱ『闇の魔法』^{マギア・エレベア}の巻物がある
という図式が俺の中に成り立ってるんだよ。

一応主人公補正& amp; ;ご都合主義とかで見つかる確率が上がる。
俺はそう思ってる。

主人公補正掛かってる訳ねーだろバーロー？
そういう事にくれよチクショー！（泣）

「!？」

これは・・・禍々しい感じの魔力!?

俺は急いで魔力の元に行く。

そして、遺跡の中には――

巻物があつた。

原作の巻物と比べても、寸分も違わぬ――――まさに本物。
よ・・・よ・・・

「よっしゃー!

主人公補正& a m p.;ご都合主義k t k r エエエエ!

俺は喜びながらも、遺跡から抜け、狼煙を上げる。

三手に分かれたメンバー達は、すぐにその狼煙に気づく。

視点・第二チーム

「見つけたのか!?

「急ぎましょう！」

視点・第三チーム

「見つけたようだな、行くぞ！」

「うん！」

・・・・巻物を見つけ、全員集合場所に集まる。
が、一つ重要な問題を忘れていた。

「で・・・巻物を見つけた訳だが。」

「じゃあ元の世界に戻してくれよ。
それともまだ何かあんのか？」

・・・・言いづらい。

すっげえ言いづらい。

ただと言わないと後々面倒になる。

あー、もう言っちゃおう！

「・・・いや、今更気付いたんだが、この巻物に精神を取り込まないといけない必要があって、誰か俺の体を守ってもらわないといけないんだわ。」

2人ぐらい残ってもらえないか？」

「「「……………ええー！？」」「」」」

なんか・・・ホント、サーセン。

1時間に及ぶ長い話の結果、バロンとカペンスに決まった。

なんか申し訳ないと思いますが、リユンメイとイクシアに帰還を
リリース

教え、元の世界に返す。

「あの2人は元の世界に戻しておいた。

これからお前らには、巻物と俺の体を守ってもらいたい。」

「「体？」」

「さっきも言ったと思うが、この巻物に一時的に精神を取り込む必要がある。

そうしないとこの魔法は習得出来ないんだ。」

「つまり、意識を失うって事か？」

「まあ、そんな所だ。

とりあえず、巻物と体さえ守ってくればいい。

後は、お前らで対処してくれ。」

「わかったよ。

つたく、これほど過酷なの初めてだぜ。」

巻物と俺の体を守ってくれる事に関してはなんとかあったけど、問題は
この試練で生き残れるかどうかと、コイツらがこのジャングルで生き延び
れるかなんだよね・・・

「それじゃ、今から巻物を開く。
開いたら、すぐに移動する準備を始めてくれ。」

「ああ、わかった。」

「僕は援護に回っとくよ。
体背負いながらじゃキツイし。」

「それじゃ、開けるぞ・・・」

よし、巻物を開けるか・・・
俺は巻物を開く。

開いた瞬間、巻物から魔方陣が展開される。
そして、エヴァの人造霊、もといコピーが出現した。

『貴様が巻物を開けた者か。』

「ああ。」

『貴様如きが簡単に闇を掌握できると思うな。
闇がそれ程容易くない事を教えてやろう。』

「フッ、望む所だ。」

闇どころか、光すらも掌握してやんよ！」

俺はエヴァの手を掴む。

直後、俺は意識を失った。

目を開けると、俺が転生した時と同じような、真っ白い空間。
そして、一人の人間。
ただ一つ、違うところは——女神じゃなく、エヴァだって事だ。
少なくとも、巻物の中に入ったようだな……
エヴァが口を開く。

『構えろ』

「……よう。」

漫画で何回も見たが、コピーとはいえ結構強いのがわかる。
確か、記憶が元で構成されている、言わば影に当たる存在だったっ
け？

俺はX^キブレードを出し、エヴァに向かって攻撃を仕掛ける。
まずは勝つ事が先だ！

「全力で……行かせてもらうぜ！」

S I D E シン O U T
S I D E バロン I N

「一体あの子供は何なんだ・・・？」

シンは子供の手を掴んだ途端に倒れるし・・・
あんな風になるなんて聞いてねえぞ！？

カペンシス！援護はきっちりしてくれよ！」

「わかってるよ！」

バロンもシンの体と巻物、ちゃんと守れよ！」

俺達は、意識を失ったシンの体と『マギア・エレベア闇の魔法』の巻物をなんとか安全な場所に置く場所を探していた。

シンが試練をクリアするまで安全が確認出来る場所であれば巻物と体を守りきれなかったらな。

今のところはまだモンスターは出現していないので何とかなりそう
だ。

「カペンシス！もっとスピードを上げるぞ！」

「ええ！？またさらに上げるの！？？」

僕もう今のスピードが精一杯だよ！」

「つべこべ言うな！」

しっかりついて来いよ！」

まったく、ガンナーってのはホント体力不足だな・・・

S I D E バ ロ ン O U T

S I D E カ ペ ン シ ス I N

はあ・・・ため息しか漏れないよ・・・
アーティファクトのおかげで身体能力が上がってるっぽいけど、ボ

クは天界人。

常人より体力はあるだろうけど、バロンみたい奴と比べたら、ボクはヘボ。

体力が壊滅的なんだよ……

しかも、重ね重ねにスピードを上げられたらついて行けないよ……

「やめて、僕のライフはとっくに0よ！」とでも言いたくなるくらい、い、。

あ、やべ、足釣りそ……

「バロン、少しは休憩しようぜ！。

足が釣りそうだ……」

「安全な場所を見つけるまで、我慢しろ！」

「もう結構走ってるぞ！？」

それに釣ったら走りようがないわ！」

しかし、ここまで約20kmは普通に來てるのに、何でバロンは疲れないんだ？

しかも、モンスターが全然襲って來ないな……

バロンの鬼手のおかげか？

ま、あの手を恐れて襲って來ないとかだろうな……

そういえば、『鬼化』されたバロン、「人間やめてる」って言うっちゃうくらい怖かったな！。

SIDE カペンシス OUT

SIDE シン IN

「くっ……」

『どうした？もう終わりか？』

つええ・・・俺の影であるだけあって、なかなかチャンスがない。おまけに、相手がエヴァなだけに、俺の持つてる魔力を利用されちまってる。

おわるせいかいとかホイホイ出してくるんだぜ・・・？

明らかにネギの時より厄介過ぎるし、「氷の女王」使用してるようにすら感じる。

術式兵装を使う条件は原作を読んでたおかげで把握している。だが、隙がほばなくて使えねえ。

『アルマティオーネ術式兵装を使わんのか？』

使いたくても隙がないからできねえんだよ！

体術はわずかししか使えないしな。

とにかく、使えさえすれば・・・

心の中でそう思った時————

『一回だけチャンスやる。

術式兵装をやってみろ。』

心でも読んだんですかい、アンタ

ま、向こうからチャンスをくれたのなら、このチャンスを・・・

無駄にはしない！

「OK、後悔すんなよ。」

あらかじめ両手に無詠唱で封じ込んだ千の雷を出す！
ディレイ・スベル
遅延呪文をどうやって覚えたって？

一応不安定だけど、例の如く一発習得っす。
相変わらずチートでした（笑）

シミストラ・エーミッサ・スタギネサザル・アストラペー
「左腕解放固定「千の雷」！」

デクストラ・エーミッサ・スタギネサザル・アストラペー
右腕解放固定「千の雷」！

ドゥプレクス・コンプレクシオー
双腕掌握！」

よし、二重掌握完了。

エヴァは別段驚いた様子はない。
むしろ、笑っている

『ほう……大したものだ。
だがこの魔力だ……出来ても不思議ではない。』

ま、あんなにハイレベルの魔法ホイホイ使えたら、俺の異常な魔力
容量に気づかない訳ないわな。

「ま、そりゃそうだろうな。
タストラガー・ラズル・ベガトデユナメネー
この兵装は雷天双壮って言うんだ。
さっきまでの俺と……同じだと思っなよ？」

これで勝機が見えてきた！
だが、エヴァも何か技を出そうとしている。

「フンッ！」

『ハッ!』

俺の拳とエヴァの拳がぶつかりあう。

———直後、地震並みの衝撃波が周りに走った。

S I D E シン O U T

S I D E バロン

安全そうな場所を見つけたので、巻物とシンの体をカペンシスに守るように言った。

今は食材がないか探している所である。

「全然ねえな……何か食えるものねえかな……」

あ、いつその事竜を捕まえて来ようか……竜の肉とか食った事ねえし。

このアーティファクトでなら俺でも倒せるだろう。

「さて、狩りに行くか……」

俺は、竜を狩るため、さらに奥へと進む。

S I D E バロン O U T

S I D E カペンシス I N

「まだ試練終わらないのか……
早く戻って来いよ……」

シンが試練を始めてから既に10時間が経過。
だが、未だ起きる傾向がない。

バロンは食材を探しに行ったし……
今現在1人……実質的には2人だけでも。

正直に言おう……超怖いっす。

だって夜のジャングルって……死亡フラグ満載じゃん。

……気を紛らわすしかない。

そうだ、重火器のメンテでもしよう。

僕はメンテを始める。

僕の持っている武器はロケットランチャーや火炎放射機など、重火器が主な武器だ。

その他にも、ロボットを作るための材料などもある。

まあ、どれもこれもこまめにメンテが必要だが、中でももっとも重要にメンテをしているのは、僕の愛用している銃だ。

長い間かなり一緒に戦って来た相棒でもある。

ん、ロケランとかパーツとかどこに収納してるかって……？

そこは企業秘密。

この方法はガンナー限定なんだ。
教えられる訳ないだろ？

「おい、食材取ってきたぞ」

「おおっ、マジ！？」

腹減ってたんだ！

で、何を取って来た？」

「アレだ。」

「……え？あれ竜じゃね？」

「ああ。」

「ああ、じゃねえよ！
竜なんか食えるのかよ！？」

王道漫画とかで竜の肉食う奴とかいるけど、今実践する気！？

「一回竜の肉食って見たかったから狩ってきた。」

「そういう問題じゃねーよ！」

バロンなんかキャラ変わってる気が……
大丈夫なのか……？

SIDE カペンシス OUT
SIDE シン IN

「ん……」

俺は目を開く。

「おおっ、やっと起きたか！」

ああ……確か『マギア・エレベア闇の魔法』の習得のために巻物の中に入ってた

んだった……

戻ってきてるって事は、試練に成功したって事だな。

「腹減ってるだろ、肉でも食うか？」

バロンが肉を差し出してくる。

俺は肉を受け取る。

一応精神のみが巻物に入っていたとはいえ、体の疲労感や空腹感が結構酷い。

「ああ。

ちなみに聞きたいんだが、これ何肉だ？

豚とか牛じゃないだろ？」

まあ予想はある程度付いてるんだが……

「「竜の肉」」

「やっぱり竜の肉かいイイイイ！」

王道漫画で、主人公などが竜の肉を食べたりしているのを見た事は一度くらいあると思うが、転生前の世界じゃ竜は空想の動物だった

から、味なんぞ想像できやしない。
正直、端から見ればうまそうでも、味が分からない以上、得体が知れない。

予想はしてたよ？ 予想はしてたけども！
なんか抵抗あるじゃないの・・・

「大丈夫だって、僕も始めはビックリしたけど意外とウマイよ。食えるものは食っときなあって！」

「そうか？」

ま、食わないのは勿体ないしな。

何より、空腹で死にそうだ……」

空腹と好奇心に負け、俺は肉にかぶり付く。

[illegible]

これは確かにうまい。

多分、牛とかの霜降り肉とかよりうまいんじゃないか？

「ん、おふあわあり（おかわり）！」

「うおっ、もう食ったのかよ！」

気づけば俺は、おかわりの要求をしていた。

後々、「王道漫画の主人公気取りなレベルの勢いで食ってたなあ」とシンは語る。

肉の大半を食いつくし、満腹になった所で、シンは聞く。

「結局のところ、俺何時間位意識を失ってた？」

「大体半日ぐらいだな。
途中、吐血した時はビックリしたな。」

ネギの時と違って大体同じぐらいの時間しか経過してないようだな・
・・・・

吐血・・・ああ、何回か、死んでたからだろうな。

吐血で済んだって事は、ネギ程シンクロしてなかった訳か。

それが不幸中の幸いだ。

俺は腕に魔力を集中させてみる。

すると、ネギと同じような紋様が浮かんで来た。

これで、試練は成功なのは確定的。

「試練は成功だ。

元の世界に帰ってもいいぜ。

今から方法を教える。」

「ホントか!？」

「やっと帰れる・・・・・

滅茶苦茶眠い・・・」

その後、俺は帰還リリースの事を教え、今回以外にも呼ぶ事があるだろうと伝える。

そして、二人は帰って行く――――

「帰ったな・・・」

さて・・・

まだまだ『アラルプ紅き翼』が出現するまで後100年以上はある・・・
巻物も手に入れたし、のんびり世界一周でもありますか……

第五話 『闇の魔法』の試練（後書き）

さて、次章についてなんですが、なんと、一つにコピペしていったら、2万越えしてるんですよ・・・・文字数が。

そういう訳なので、1万を目安に、前編後編に分ける感じにしようかと思っています。

しかし、クロスの話来ないかなー（笑）

文才はないけど、一生懸命書きたいとは思います。

名前は伏せますけど、犬娘の話の主人公とウチの主人公を絡ませたいですねー（笑）

俺、ああいうケモっ娘大好きなんですよww

初めて萌え死にそうになりました（笑）

っつーか、格が違いすぎて無理でしょうけどwwww

あ、ちなみにクロス基準ですが、時系列的に次章からの戦いの後から40年前の間の時代になります。

ま、プロットとしては、ネタバレになってしまうので、後々に発表します。

クロス、待ってまーす（笑）

第六話 死の恐怖と万死の鎌・前編（前書き）

前編、投稿つす。

こっから随分キンクリしてます。

第六話 死の恐怖と万死の鎌・前編

あれから早いもので、既に10年が経過。

魔法と体術は完全にマスター。

波動もコントロールできるようになり、仮契約カードパクティオーもある程度把握した。

で、今いる場所はと言うと、メガロメゼンブリア。
世界一周、完了である。

しかし、つい最近ある噂が流れているのを耳にした。

かつて伝説の賞金首が持っていたとされる神器。

それと同等クラスの強力な武器が世界各地に出現したらしいのだ。

俺としては神器と同等の武器なんてももの、喉から手が出るほど欲しい。

「その武器全部ゲットしなきゃ男が廃るってもんよ！
んじゃ、武器探しヘレッツラ・ゴー！」

すぐに目的決定。

武器を全てゲット。

今回は歩きで行く、全体的に。

名付けて「リアル縛りプレイ・改」だ。

今までの条件はそのままに、今回は武器にも制限を掛ける。

最初に行く場所はXキブレードなどの武器は滅多な事がない限り、使用を制限する。

まず一番に目指す場所は、ケラベラス溪谷。

あそこに行き、運良く生き残った奴らの一人が、鎌らしき武器を見つけたらしい。

俺としてはデスサイズじゃないかと思っている。

まあ、信憑性があるかないかと言えば、ほぼないと言ってもいい。
第一、あんな危険な所に行って、生き残る方が奇跡のようなものだ
し。

ナギですらかなりヤバい状況に陥った程。

ガゼの可能性も否定できない訳だ。

実際、かなり尾びれがついたりして、武器の場所に関する情報がガ
ゼばかりなのだ。

んじゃもういつその事、危険な所に行ってみようじゃないかと。

そう思って、まずは魔法世界で一番危険な場所、ケラベルス溪谷に
行く事になった。

「ま、あそこまでは遠いのが問題だな・・・

途中で異常に強そうな殺気を見つけた辺りも探して行くか。

もしかしたら大物が釣れるかもしれない。」

何故本当に魔法、体術をマスターできたかと思うだろう・・・

ま、俺だってそう思ったさ。

でも、俺の持っている十字架が刻まれた目のおかげで、かなり効率
よくホイホイ習得出来たんよ。

この目で本来習得不可能の『魔法無効化』マジックキャンセルを習得にも成功してるん
だ。

お前、前『魔法無効化』マジックキャンセル習得したら修行の意味ないじゃんとか言っ
てたじゃんとか思ってる奴。

少し弄って、ON、OFF切り替え出来るようにしたから大丈夫だ、
問題ない。

この目の名称だが、俺は『十字架ノ目』クロス・アイと名付けた。

ちなみに『魔法無効化』マジックキャンセルを習得したのにはある理由がある。

『魔法無効化』マジックキャンセルの能力さえあればケラベルス溪谷の魔法を使えない
と言うデメリットに対処できる。

これで勝つる！多分。

そんな事を考えながらの移動途中、虎竜に遭遇。

コイツで、竜種無双1000体目。

お祝い代わりと言っちゃあなんだが……これでも食らいな。

デクストラー・エーミッタム
「右腕解放。」

直後、虹の槍が虎竜を貫く。

実際、魔法、体術マスターしたのが5、6年目。

その後は自分の想像力を生かして、オリジナル魔法とか作ったりして雑魚とか軍とかの戦いを凌いで来たけど、その影響だろうねえ・

・懸賞金が1000000ドラクマにまで跳ね上がったよ。

このままじゃさすがに危険なんで、以下のような魔法を作った。

- ・種族詐称魔法
- ・性別詐称魔法

この魔法を作ってから様々な戦いを回避出来た。

種族は人間で、性別が女ならわかる訳ない。

気づきすらないだろうね。

勿論目も魔法で変えている。

金と銀のオッドアイなんてただでさえ珍しいからな。

金眼オンリーにしてる。

性別詐称魔法を初めて使用した時の感想？

本人でもビックリするような美人になってました。

本当にありがとうございました。

さて、それはさておき。

歩きと浮遊術での移動手段を使っているのだが……今のところそれほど強い殺気は感じない。

ま、雑魚の殺気を感じた場合でも駆けつけて大体は倒しとくし、女だったら武装解除を使った後手刀で気絶させて、逃走または詐欺魔法で警備に突き出すっつー方法でいってる。

当然目撃者も多く、ついた異名は

『虹を纏いし者』

『仮契約マスター』

『無殺者』

『十字架の目を持つ者』

『本当の姿どんなかわかんないんですけどマジで』

ほとんどの異名が、俺がそこそこ力を出して戦った時付けられたと思われるものばかり。

正直言うと……微妙かな。

もうちょいいい異名が欲しい所。

まあ個人的にこの中で一番いいとすれば、『無殺者』……かな？

何故に『不殺』ではなく『無殺』なのかはよくわからんが、俺が本

当に今まで一人も人を殺っていないから付けられたんだろうな……

・ 意味の違いがあるとすれば

『不殺』は、人を殺した事のある物が、二度と人を殺らないと誓った奴で、『無殺』は俺のように激しい戦いの中でも一人も殺した事のない奴の事を言うんじゃないんだろうか。

個人的見解でサーセン。

これは余談だが、俺が倒したほとんどの奴らは当然ながら、悪人率が9割を占めている。

そのせいかその際、一般人を成り行きで助けており、一部の民衆からは崇められていたり。

まあ残りの1割は言うまでもなく警備なんですけどねー。

まあ・・・いずれ『アラルブラ紅き翼』の奴らと一緒に戦えば遅かれ早かれ新たな異名が付くだろうな・・・

戦いに関してだが、今では浮遊術を完全に習得しているので、空中戦も可能。

10年前は不安定で、そこまで速く飛べなかったからなあ・・・
ただ、当然ながらXブレードよりスピードは遅い。

雷天大壮を使えば、話は別なんだがな。

現時点、浮遊術での移動途中。

引き続き、強い殺気がないが探して中だ。

「全然見つからん・・・

弱い殺気ばかりだな。」

弱い殺気に関しては、すぐに対処するとして、だ。

・・・それを除けば平和そのものだなあ。

『アラルブラ紅き翼』が活躍していた時代は、世界各地で紛争などが頻繁に起きていた。

ナギ達はそれによって負傷した怪我人を助けたりして各地を回っていた。

こんなに美しい世界がこの先酷いものになる事とは今の人々は思っていない事だろう。

そんな事は決してさせない。

「決して・・・な。」

俺は小さく、そう発した。

そして時間が経過し――

グラニクスで一端休憩する事に。

勿論種族と性別を変えてる。

変えなきゃ即捕まるレベルまで上がっちゃってるのよ。

しかし・・・胸が邪魔だ。

もしもの時に戦いにくい。

目測だが、これGかHはあるんじゃないか？

胸が大きいっていいな〜とか当時は男丸出しの下心があったけど、俺が初めて女になった時は

胸と尻がキツイ！後胸重いイイイイイ！

てな感じである。

あの時、初めて巨乳キャラの苦勞がわかったね。

で、現在の容姿なんだが、髪の色はそのまま、性別は男↓女、種族は竜族↓猫族になっており、体形は言うまでもなく、ボン・キュ・ボンだ。

服は多少露出の多い服を着ている。

当然ながら、そんな姿で歩いていると下心見え見えの男達が集まって来る訳で、その度に返り討ちにしてる。

こうなっているとナンパされる女の気持ちかわかる気がする・・・

うっとおしいって思うよね、うん。

そんな事を考えてると、また男がこっちに近づいてくる。

「なあ、姉ちゃん、俺と遊ばない？」

予想通りでした。

本当にありがとうございました。

これで何人目だよ・・・どいつもこいつも、心が籠ってねえんだっ
つーの！

さて、どんな方法で撃退するかな・・・

俺は、頭の中で木魚を叩きながら撃退法を考える。

ポク

ポク

ポク

チーン

おし、ガーデニング決定。

「いいですけど、その前に路地裏に来て下さい。
少し、言いたい事があるので。」

「OK♪」

ドカアアアアアン

「ガーデニングって、いいものですね（笑）」

その後、一般人の一人が気になって路地裏を見た所、下半身だけが
出ていた男の末路があったらしい。

男の時に比べて、馬鹿なら余裕で路地裏に誘いやすいな！。

ただ絡まれ、倒す、絡まれ、倒すのくり返し。

こういう面じゃ男の方が楽だわ。

さて、これからどうしようか。

確かこの近くにラカンがいた遺跡的場所があったはず……

この前の修行はまだ終わってないし。

あそこを、修行の場として使うか。

思い立ったら即行動。

それからしばらくして、街からかなり離れたのを確認し、魔法を解
除する。

ディスプレイサーティオー
「解除。」

ボンッ！

「ふうー、やっぱりこの姿が一番だな。」

元の性別の体の方が動きやすいってね。」

胸は重くないし、胸と尻もキツくないから楽だ。

ホント、女の時だと、男物の服でもパツパツなんだよ。

主に胸と尻が。

それ以外はむしろダボダボではあるが。

その後、遺跡に着いた俺は、修行の仕上げをする事にした。
ホルダーから、カードを4枚抜き取る。
もうこの工程慣れてきたよなあ……

「召喚 ヴェントウス ソラ 沢田綱吉 アレン・ウォーカー」

「で？俺を呼び出したって事は例の修行の仕上げ？」

「お、ヴェン、久しぶり！」

「ソラか！キープレードを変化させられるようになった？」

「おう、バッチリ！」

「イテテ……」

せめて念話で聞いてからにしてよ……
ゲームやってた途中だったんだから……

「皆さんお久しぶりです。

シン、イノセンスのコントロールの事ですか？」

「ああ。

一気に仕上げちまおうかと思ってな。」

1人を除けば、10年前に確認されていないキャラばかり。
それほど、カードの枚数が多いって事なんよ。

ちなみに4人にはそれぞれ別々の目的で来てもらった。

ヴェントウスは俺のXブレードをキ^キブレードライドに変化させる
事の仕上げ。

アレンは俺のイノセンスがどれだけ強力かを戦って検証する事、ツ
ナ、ソラには対戦相手として来てもらった。

「で、俺があげたの、持ってる？」

「ああ。」

これを肩に着けるんだったよな。」

肩にシヨルダーのような物を取り付ける。

「何だよ、まだ完成してなかったのか？」

「完成はしてるんだがな、完全と言えるかどうかはわからんからヴ
ェンに見てもらおう。」

そう。

習得が簡単に出来たりするこの目だが、物体の創造、変化はできな
い。

Xブレードもまたしかり。

技の習得もたまに失敗してしまう事も。

おまけに元の能力に、オリジナル設定を追加する事が出来るが、そ
の分習得に時間が掛かってしまう。

俺の完全オリジナル能力を作るとなると、さらに相当な時間を要す
る。

能力に気付いたのが大体5年前であるため、目のコントロールに苦
労するのだ。

色々欠点があるこの能力。

今はある程度普通にコントロール出来るが、まだ完全にコントロ
ールは出来ない。

一番苦労したのが『魔法無効化』^{マジックキャンセル}の習得の時だ。

何しろかなりのレアスキルの上に、任意でON、OFFをできるよ
うにしたから、習得に至るまで10日は掛かった。

「じゃあそれを叩いて。」

「OK。」

ヴェンが叩くように言う。

思考を中断し、俺は防具を叩いた。

すぐに俺の体は光に包まれ、その光は鎧に変化した。

「世界なんか移動しないだろうから鎧はあんまりいらなくとも思っ
たが……」

この鎧、我ながらカッコいいと思うんだが、どう思う？」

「……うん、いいんじゃないかな。」

俺の鎧はヴェンの鎧をベースにした、白黒の色の鎧だ。

つか、さっきの台詞の後、ヴェンに冷めた感じの目で見られたの
は言うまでもない。

すぐにまた普通の目に戻ったからいいけども。

「じゃあ、次にX^キブレードを投げて見て。」

「OK。」

せーのッ！」

空に向かって投げる。

Xブレードはブーメランのように回転し、遙か彼方まで飛ぶ。

一度、星になり、戻ってくる頃には船に変化していた。

まあ、この世界での場合だと、船って言うより飛行機みたいなものかな？

「よし、バッチリ！」

俺でも結構時間掛かったのに本当に習得するの早いな！

合格だよ。」

「よっし！それじゃこの修行は終わりだな。

アレン！イノセンスのテストするからこっちに来てくれないか？」

「あ、はい。わかりました。

今行きます。」

俺のイノセンスはまだ良くわからなく、何回かした使った事がない。

ほとんど雑魚だから使うまでもないって言うのもあるがな。

その分、アレンは同じイノセンスを持つ、エクソシスト。

エクソシスト同士の戦いこそ、イノセンスの真価がわかる。

そう思って、俺はアレンを選んだ。

「それじゃ、よろしくお願いします。」

アレンは爪の形態ではなく、退魔ノ剣を発動する。

・・・あくまでも、人は傷つけたくないって事か。

だが、それじゃあ意味がない。

不本意だろうが、アレンにはアレを使ってもらおう。

「アレン、アーティファクトを使って来い！」

「ええッ！いいんですか！？」

僕あんまりあなたを傷つけないんですよ！」

「構わねえ。

本気でやってくれた方が張り合いがある。

安心しろ、俺ア死にやしねえよ。」

退魔ノ剣は魔しか貫けない。

俺は2、3年前ぐらいに『マギア・エレベア闇の魔法』の進行が異常に進んじまって、

エヴァのコピーに頼んでネギと同じように修行をしたが……

初めは俺も自我がなくなったからな……

一応、闇を受け入れると言う方法で仮初の成功にはなったが。

退魔ノ剣にしてみれば、俺も魔だろう。

『マギア・エレベア闇の魔法』さえ使わなければなんとか話だと思うが。

「はぁ……不本意ですけど、わかりましたよ。

では、行きますよ！」

「さあ、来い！」

イノセンス発動！」

ゼロ・インフィニティー・デュアルソード
虚無ト無限ノ双剣！」

アデアット
「来たれ！」

アレンのアーティファクトは、退魔ノ剣での魔以外を斬る事が出来る能力だが、アレンはこれで人と戦うのを好まない。何故なら、アレンは人を傷つける事が嫌いだからだ。それ故に、アーティファクトは滅多に使わない。

アレンとは何回か対戦した事があるが、戸惑ったりして本気のバトルに中々発展しないのがほとんど。

まあ今回は半ば諦めてるのか、渋々使ってくれたが。さて、俺はイノセンスと魔法の併用をしてみるかね。

「ウエル・シエル・リ・ウエル・ウエラリオル 無限に重なりて走れよ雷神 神ノ雷 スタグネット 術式固定」

この10年の間に当然始動キーも作った。

まあこのままさらに強くなったら使う事は少なくなるかもしれないが、本気になる時くらいしか使わんかもなあ・・・とりあえず、固定完了。

よし、後は・・・だが、うまくいくかどうかなあ・・・まあ、やってみる価値は大いにある。

成功すれば、『マギア・エレベア闇の魔法』のバリエーションの幅が広がるからな。

ウニソネット
「術式統合」

俺はイノセンスに神ノ雷を取り込ませる。

双剣はバチバチと雷を帯びていく。

おし、成功。

「な・・・何ですかソレ・・・？」

「イノセンスと魔法の統合だ。」

実戦でやってみたのは初めてだったんだが……うまくいったよ
うだな。」

「そんな事が出来るなんて……あなた、チート過ぎますよ……」

うむ、俺にも出来たのが不思議なぐらい。

ちよいと『マギア・エレベア闇の魔法』を弄ってみただけなんだがねえ……普通の武器にも術式統合出来るようにしただけ。

やべえ……ちよっと弄っただけでこのチートって笑えてくるわ、
てか、もはや笑うしかない。

ま……まだ改良の余地はあるか……
ちなみに神ノ雷なんだが、俺の開発したオリジナル魔法だ。

千の雷ベースに、威力等を弄った結果、ネギが実践した千の雷が一つの巨大な岩を半壊してたのと比較すると……こっちの神ノ雷、それと同等の大きさの岩を、目視出来ただけで、約5個以上全壊でした。

もうその差は、千の雷（笑）に感じてくるくらい歴然なのよ。

それはとにかく、この双剣の状態の名前は虚無ト無限ノ双剣・雷でいいだろう。

俺は凄ましい雷を纏った剣をアレンに向ける。

「ま、戦いの続きでもしようぜ？」

「アーティファクト使っても倒せる自信がないですよ……わか
りました、行きます。」

やっぱエクソシストだけあってイノセンスの使い方がうまいな。
ほぼ余裕で勝ったけど。

俺は剣術に対しても、ある程度習得してるから、剣術で劣るアレ
ンが劣勢になるのかもしれない。
さすがに爪の形態の時は面倒な感じはあったがな。

「ったく……アレは反則過ぎですよ……」

「ま、文句なら後で聞いてやるよ。
一応まだやる事があるから。」

次はツナとソラだ。
2対1だと、尚更戦いがいがあるんだ。
さて、と。

「二人まとめて……かかって来な！」

戦い開始の合図。

それは、俺の挑発から始まる。

「よし、行くぜ、ツナ！」

「わかったよ、ソラ！」

「「来たれ（アデアット）！」」

2人は開始直後にアーティファクトを発動する。

コイツ等両方とも、今の実力を生かせる開放系のアーティファクトなんだよねえ・・・

でも、その方がやりがいがあるってもんよ！

「少しは楽しませろよ！」

そして、相手は二手に分かれる。

「ソラ、サポートを頼む。」

「OK！任せとけ！」

既に超モード^{ハイパー}を発動したツナ。

最低でもやっぱり超モード^{ハイパー}じゃないと相手にもならんからな。

「オペレーション・・・X^{イクス}。」

早速X BURNERを出す準備を始めるツナ。

いつもなら、出させないように攻撃するんだが、今回はソラがいる。行こうとしても、行けん。

「どうだ！」

すでにファイナルフォームを発動し、キープレードを操るソラ。いつも思うが、キープレード手も使わず操ってるんだぜ？

浮かせながらも綺麗な攻撃かますんだぜ？

ある意味反則過ぎんだろコレ。

だったら習得すればいいじゃんとかいうツツコミはなしで。

俺すでにいくつかの剣術習得してるし、今必要ないし。

っと、今はこんな事思ってる場合じゃないな。

「流石キープレードを使い慣れてるな。

だが……魔法じゃこっちの方が上だ！」

俺はX^キブレードに虹の炎を灯し、そして——詠唱を開始する。

「ウエル・シエル・リ・ウエル・ウエラリオル 神風なる疾風よ、
我に力を貸せ 風神ノ疾風」

一応さつき試して成功してるからな。

武器と魔法の術式統合。

で、次に術式固定をする、と。

スタグネット ウニソネット
「術式固定 術式統合」

おし、二度目成功。

もう二つ作って双腕掌握するかな。

「ウエル・シエル・リ・ウエル・ウエラリオル

シミストラエーミッサ・スタグネット
左腕術式固定「風神ノ疾風」

デクストラエーミッサ・スタグネット
右腕術式固定「風神ノ疾風」

ドゥプレクス・コンプレクシオー
双腕掌握！」

「プロ・アルマティオーネうしんはやて
術式兵装 風神疾風」

今の俺は、武器も体も完全に風の最上位精霊に近い状態だ。

言っとくが・・・近づいたら、切れるぜ？

とりあえず、準備はできた。

後は倒すだけだ。

「飛べ、かまいたち鎌鼬！」

体も武器も風に構成された俺には、かまいたち鎌鼬を出す事など造作もない。

しかも、普通の斬撃が軽く切れるくらい、切れ味が異常なんだ。

どれくらいかという、無防備だったら、上半身と下半身がサヨナラするくらい鋭いんだ。

もっとわかりやすく言うと、鋼鉄余裕で切れますなあ・・・

とにかく、防御かなんかしないと、死ぬぜ？

「ぐっ!？」

なんだこれ、キープレードに傷が!？」

何とかガードしきれたようだな。

さすがキープレード。

傷がつくくらいで済んだか・・・

「お前、どんだけ危なっかしいの飛ばしてくるんだ!

防御しなかったら人生卒業してたわ!

キープレードにも傷ついたし!」

あ、無防備だったらオワコンな事理解してたのね。

キーブレードに関しては、リロードすれば、綺麗さっぱりなくなるからいいだろうに。

「ま、防御する事はわかってたから鎌鼬出したんだよ。防御出来なかったら出来なかったで帰還すればいいじゃないの。」

「無茶言うなアアアアアア！」

時折、契約者達を弄るのが面白いと感じる時がある。

もしかして俺ってS？

って言うか、ん・・・・・・・・？

何か忘れてるような・・・・・・・・

『レフトバーナー炎圧上昇：90万：100万FV！

ゲージシンメトリー！

発射スタンバイOK！』

「うおおおおおおお！」

X BURNER！」

・・・・あ。

ツナがX BURNER出す準備してたのすっかり忘れてた。マズい、これはマズい。

いや、でもこれってチャンスじゃないか！？

アレを使えば逆にチャンスに成り代わるのでは？

でもなあ・・・・失敗は許されないからなあ。

いくら俺でもアレはキツイし。

ま、成功すればラッキー、失敗したら・・・黒焦げになるな。
でも・・・やってみる価値はある！

S I D E シン O U T
S I D E ツナ I N

シンに対戦してくれないかと言われたので、対戦をする事になった。
今回は対戦をするだけらしい。

まあ、いつもの内容と比べたら、いい方だよ。

過去にあったものでは、周りにめっちゃ怖い人達に囲まれて、しかも倒す手伝いをしろって言うんだもの。

結局、その時はオレは少しだけ倒した程度で、ほとんどシンが倒していた。

・・・オレ、必要だったの？と思った時でもあった。
で、今回の対戦方式だけど、2対1で戦うらしい。

オレと一緒に戦うのはソラ。

ソラとは何かと苦労を共にしてたから、チームワークはそれなりにあると思う

オレはソラと作戦を立てる事にした。

作戦はこうだ。

まず、ソラにシンの足止めをしてもらい、時間を稼ぐ。

その間に俺がX B U R N E Rのパワーを溜めて、発射する。

ソラはその後、ラグナロクを発射する、という作戦だ。

そして――

「アデアット」

サポートはソラに任せて、作戦通りオレはX B U R N E Rのエネ
ルギーを溜める。

ちなみに、アデアットした事によって、死ぬ気丸がなくとも超モ^{ハイパー}ードになれるようになってる。
仮契約カード・・・本当に便利だ。

「オペレーション・・・X^{イクス}。」

『了解シマシタ、ボス。』

X BURNER発射シークエンスヲ開始シマス。』

オペレーションX^{イクス}を発動する。

まず逆方向に炎を集中する。

よし、まだアイツはソラに足止めされてる。

『ライトバーナー柔ノ炎95万FVデ固定。』

レフトバーナー柔カラ剛ニ変換シツツ炎エネルギーヲグローブクリ
スタル内に充填。』

ここから前方に出す炎を少しずつ溜めて行く。

ソラに完全に目が行ってるからまだ大丈夫だな。

次はターゲットに対するロックオン。

シンにロックをするために視点をシンに向ける。

『ターゲットロック。』

ライトバーナー炎圧再上昇。

98万：99万：100万FV！』

ここまで来れば・・・！

『レフトバーナー炎圧上昇：90万：100万FV！
ゲージシンメトリー！』

発射スタンバイ!』

「うおおおおお!」

X BURNER!」

ここでやっとシンが気づいたが、もう遅い。

ちなみに出力は、本気レベル。

シンが不死であるから出来る事であって、普通はとても出せるレベルじゃない。

とにかく、当たれエエエエエ!

SIDE ツナ OUT

SIDE ソラ IN

対戦か。

10年前(俺が最初呼び出された時)、シンにキープブレードの修行を教えた以来だなあ……

あれから、シンの他の契約者ばかりと対戦していたからなあ。

ツナと共に考えた作戦で、俺はサポート、囃の役割をする事になる。

囃はツナがX BURNERを出すための炎エネルギーが溜まるまでの間。

その後は俺がラグナロクを発射する。

「アデアット」

さて、囃になりますか。

俺はシンへと近づく。

「ウエル・シエル・リ・ウエル・ウエラリオル 神風なる疾風よ

我に力を貸せ 風神ノ疾風」

ものすごい風が、と言うより嵐と言う形容の方が合っている魔法だ。

スタグネット ウニソネット
「術式固定 術式統合」

あの風の魔法が固まりになった！？

しかもXブレード^キに取り込ませただと！？
Xブレード^キに風が纏わり始める。

俺が呼ばれる時は大抵他の契約者との戦いだし、初めの修行の時はほとんど能力を持ってなかったから、シンの能力を見た事はなかったが、こんな能力を持っているなんて。

ん？また何かしようとしてる？

今度は何だ？

「ウエル・シエル・リ・ウエル・ウエラリオル

シミストラーエーミッサ・スタグネット
左腕術式固定「風神ノ疾風」

デクストラーエーミッサ・スタグネット
右腕術式固定「風神ノ疾風」

またあの魔法！？

しかも今度は2つ？

今度は何する気だ？

ドゥブレクス・コンプレクシオー
「双腕掌握！」

握り潰した！？

いや、取り込んだのか。

シンにも徐々に風が纏って、いや、シン自体が風になっていく。

プロ・アルマティオーネうしんはやて
「術式兵装 風神疾風」

なんだ・・・アレは。

アイツの体の周りにもの凄い風、というか嵐が起きている。
そしてシンは――

「飛べ、鎌鼬！」
かまいたち

Xブレードから斬撃を放つ。

・・・アレはやばい！

俺はとっさにキーブレードでガードする。

「ぐっ!？」

なんだこれ、キーブレードに傷が!？」

何とか耐えれたが・・・キーブレードに傷が付いた。

今まで傷付けられた試しがないのに・・・どんだけ鋭いんだあの斬撃!？」

てか、危ない！

「お前、どんだけ危なっかしいの飛ばしてくるんだ！

防御しなかったら人生卒業してたわ！

キーブレードにも傷ついたし！」

「ま、防御する事はわかってたから鎌鼬出したんだよ。

防御出来なかったら出来なかったで帰還すればいいじゃないの。」
リリース

おまっ、それが出来たらとうにやってるわ！

っつーか・・・

「無茶言うなアアアアアア！」

っていうか、こんなコントしてる場合じゃない！

ツナはどうなった！？

ツナの方を見ると、既にX BURNERのエネルギーがほぼ溜まっていた。

このままなら行ける！

そして、ツナが貯めたエネルギーが満タンになり——X BURNERを放った。

SIDE ソラ OUT

SIDE シン IN

実証、開始だ。

俺は今にも迫り来るX BURNERに向かって手をあげる。
そして——受け止めた。

「何！？

受け止めただと！？」

ツナは驚愕している。

渾身の力で発射したX BURNERを避けられるとは思ってたかもしれないが、まさか受け止めるとは思わないだろう。

だが、正直・・・キツイ。

早い所固定しねえと・・・

「術式固定」
スタグネット

しかし、これを太陰道タイインドウでやるのはキツイ。

魔法ならともかく、これは言わば死ぬ気の炎の固まり。
前例がないから出来るかどうかが問題なのだ。

ここら辺、弄ってないもの。

不安定でもいいから、成功すればいいって感じの勢いなんだよ。

とにかく、術式固定スタグネットには成功。

後は掌握コンプレクシオするだけだが……

ここでソラがラグナロクを撃ち出してくる。

ただでさえキツイが、仕方ねえ。

ラグナロクも掌握コンプレクシオするか。

俺はラグナロクも手で受け止め、術式固定スタグネットをする。

シミストラー・スタグネット
「左腕固定「死ぬ気の炎」

デクストラー・スタグネット
右腕固定「ラグナロク」

ドゥプレクス・コンプレクシオ
「双腕掌握」

俺の身体は徐々に死ぬ気の炎に包まれ、ソラの光の力を感じる。
多少不安定だが、少し時間があれば、完成させられるな。
つくづくチートだなー、俺って。

「死ぬ気の炎を取り込んだ！？
零地点突破と同じ原理なのか？」

「ラグナロクまで取り込んだぞ！？」

「ま、これも今しがたやってみたばかりなんだよ。
書いてさっきと違うとすれば、弄ってないから不安定なところかな。」

さて、そろそろ早いけどケリ付けるぜ・・・？」

驚かない方がおかしい。

ま、今はこの戦いを終わらせる。

あの後結局1分もしないで決着がついた。

結果は言うまでもないが俺の勝ち。

その気になれば瞬殺できたと思うくらい、力がみなぎってた。

——その日の修行は終了し、遺跡で4人と共に何日間か修行に励んだ。

場所が変わり、それから5日後。

俺はケラベラス溪谷の近くまで来ていた。

いくら俺が規格外チートだと言っても、流石に1人でこの魔獣の相手できついで、以下のメンバーも連れて行く事にした。

・ハセヲ

・ソラ

・ツナ

・アレン

この4人、主人公集団をメンバーに入れた。
大半が修行のメンバーであるのは効率がいいからである。
それと今回、魔法が使えないので、魔法を使用しなくても問題ない
強さを持つ者を選んだ。
戦闘民族達を出すのもアリだが、某雲の守護者を出そうものなら、
咬み殺されるかもしれないので、今回は主人公集団で行く事にした
訳だ。

「さて、ソラ。

お前だけが魔法を使えるわけだが・・・問題点がある。」

「なんだ？問題点って？」

「ここでは、魔法が使えないから気をつけろよ？」

「マジで!？」

メンバー内では、唯一ソラのみが魔法を使えるが、ここじゃ異世界
の魔法にも使用不可。

なんでソラを選んだかって？

キーブレードを使えるだけでも十分戦力になるからな。

大丈夫だ、問題ない（キリッ

「マジだ。

だが、魔法以外なら問題ない。

キーブレードは使える、はずだから大丈夫だ。」

「ホッ。

良かった、って使えるはずって何だアアアアア！」

この前と言い、弄るの楽しいや（笑）

さて、俺は『魔法無効化』^{マジックキャンセル}の能力で魔法は問題なく使える。

咸卦法^{かんかほう}を使つとくかな？

確か・・・左腕に魔力、右腕に気だったけ？

後はそれを合成する・・・っと。

直後、俺の周りに凄い風圧が走る。

俺の体は七色の気のようなものに包まれる。

ん、体が軽い、咸卦法^{かんかほう}成功だな。

正直しばらく使ってなかったから、上手くいくかどうかどうが心配だった。

「凄い風だったけど・・・

シン、キミ何やったの？」

ああ、やっぱりそうなるわな。

言うまでもないが、咸卦法^{かんかほう}はほとんど使わないので、極一部の契約者しか知らない。

まあ、究極技法^{アルテマ・アート}だけあって、以外とコツがいるんだよ。

マジックキャンセル魔法無効化程じゃねえが、2、3日は掛かった気がする。

「今のは咸卦法^{かんかほう}って言って総合能力を上げる高度な技だ。

もしかしたらお前も使えるかもしれないぜ？」

「へえ、結構便利だね。

それと同時に、シンのチートっぷりが改めてわかったよ・・・」

そんな他愛もないような話をしていると、ハセヲ、ソラ、アレンの三人が固まって、何かコソコソ喋っているようだ。

さて、聴覚を最大にして、そのコソコソ喋っている内容を、お送りしよう。

くコソコソ談義く

「オイオイ、今度は総合能力上げるとか、どんだけチートなんだよ。」

「気にするなよ、アイツがチートなのはいつもの事じゃないか。」

「まあ確かにいつもの事ですが・・・強すぎでしょう。」

下手したら、僕の世界にいる伯爵より強いですよ。」

「この10年で、確実にチートに磨きがかかってるよな・・・最近に至ってはもはや新技の実験台ばかりな感じが否めないぜ。」

「確かに、シンの本気、見られなくなったよな・・・10年前は、太刀筋が素人同然だったのに、今じゃいくつもの剣術を習得だぞ？」

しかも、いくつかはオリジナルの奴よりキレがあるし。」

「正直、一体どうやってここまで強くなるのか知りたいものですよ・・・」

く談義終了く

ここで俺が割り込む。

「オイ、普通に聞こえてんぞ。」

「「ハッ!?!」」

「全くお前ら、俺をチートチート言ってるが俺以上のチート野郎なんぞ、他の世界やパラレルワールドにゴロゴロいると思うぜ？」

「俺はアンタ以上のチート野郎いたら見たいもんだよ・・・」

いやいや、実際俺が転生する前、様々な転生小説を見てたが、様々なチート能力を駆使し、様々な人生を歩んでるのを見た。

中には、原作キャラに憑依したり、原作崩壊かます小説もあったなあ・・・まさか、俺が転生するとは思わなかったけど。

俺、この武器集めが終わったら・・・他の世界は行かないまでも、パラレルワールド行きたいと思ってるんだ・・・

え？死亡フラグ発言自重？

もう一回死んでるし、今俺不老不死だから大丈夫だ、問題ない。

さて脱線したが、コイツ等にはそれぞれ下にいる魔獣を倒してもらわないと。

まあ、この障害なんぞ超えられるだろう。

一人はネット世界を救った英雄（二代目）、一人は様々な世界を闇から救った勇者、更に一人はいずれ時を破壊するものと言われるエクソシスト、最後の一人は最強レベルのマフィアのボス。

様々な面から見たらコイツ等の方が最強じゃねえか？

あ、一つ警告し忘れてた。

「一つ言い忘れてたが、今度は全員に警告しとく。

食われるな、以上だ。」

「」「何だ（なの・ですか）その警告!？」」「」

魔獣がうごめきまくってるからね。

死んでもおかしくないもの。

今回はさすがに命がけだし。

「だから、命の危機が来たら元の世界に戻ってくれ。
今回ばかりは緊急時の帰還^{リリース}を認める。」

「わかりました。」

「ただ、ヤバイ場所なんですか・・・」

ナギですら危機に陥った場所っすな。

たった10代での能力スペックなんだぜ？

しかも危機に陥った時も、身体能力のみでの巣窟脱出してるんだぜ？

アイツこそ、純粋なチートだろjk。

とりあえず、コイツ等なら死なんだろう。

その後、渓谷に着いた俺達は魔獣をそれぞれ倒す場所を分担する事に。

結果

・俺

・ハセヲ・ソラチーム

・ツナ・アレンチーム

のようになった。

つか、俺のサポート回れる奴、ほとんどいなくね？

結果的に、俺一人パターン確立しちゃってるのよ。

「よし、お前等。」

戦う準備を始めとけ。」

「「「^{アデアット}来たれ」」」

4人とも、それぞれアーティファクトを発動する。
様々な世界の奴らがアーティファクトを発動させてる所ってのはさすがに壮観だね。

「さて、それじゃ行くぞ。」

俺達は崖の淵の近くまで行く。

俺は崖を覗き込む。

続いて4人が覗き込んだ。

あ、でもコイツ等って…………

「「「オエエエエエエ！」」」

ああ…………コイツ等耐性なかったんか…………
吐いとるよ…………

つつーか、コイツ等のゲ●、当然ながら崖の下へと投下されてるんだが、そのゲ●を魔獣達が食い合うというカオス。

この魔獣達どんだけ飢えてるんだよ…………悪食以前の問題だぞ。
ま、コイツ等の事だ。

後2、3分もすれば耐性が多少できるだろ。

「吐き終わったらコイツ等を倒してくれ。
俺は先に行く。」

コイツ等は置いといて、一足先に行くか。
俺は崖から飛び降り、Xブレードを出す。

「魔獣ども、今日がめえらの命日だぜ。」

そして、一匹の魔獣の首を切り落とす。
戦いの火蓋は、切って落とされた。

S I D E シン O U T
S I D E ハセヲ I N

やっと吐き気が治まったんだが・・・
率直に言うと、グロい。

何だここ？

魔獣が共食いしてるんだが・・・カオスにも程がある。

見慣れて来たから多分何とかなると思うが・・・

今はP Cの身体だけど、リアルではグロなんかと一切の関わりがない
一高校生だから、こんなのに耐性がないのが普通なんだよ。

アイツ、これわかっててやってないだろうな・・・？

「ウプッ」

ヤバイ。

気イ抜いたらまた吐きそうに・・・シンは見慣れてるのか？
よく吐かないな・・・

下から何か魔獣の絶叫が聞こえるんだが・・・シンが殺ってるの

か？

とりあえずソラを連れて魔獣を・・・そろそろ立ち直ってるは

「オエエエエ！」

「まだ吐いてんのかよ！」

しかもさっきより酷くなってやがる！

自分の吐いたゲ●でもらいゲ●をしてるぞ、これは。
とにかく、ソラを何とかしねえと。

「ハア・・・ハア・・・吐き過ぎて死ぬかと思った……」

「吐き過ぎで死ぬとか、どんだけかつこ悪い死に方・・・
それだけはやめてくれ、色んな意味で。」

ハア・・・先が思いやられる・・・

ソラに耐性付かせないと、完全に足引っ張られるぞ・・・

SIDE ハセヲ OUT

SIDE ソラ IN

ウッ・・・グロ過ぎる・・・

元の世界じゃハートレスやノーバディを倒したりしたが、グロさは縁のない世界だから・・・吐き気が・・・

「ハセヲ。」

「何だ？」

ある程度予想出来てるが、言ってみろ。」

「俺、帰っていい？」

このままじゃ俺が持たない、精神的な意味で・・・」

「俺もそうしたいんだが、そうしたら『アレ』が来るだろうからそれをやる気にならん・・・」

「ああ・・・アレか・・・」

『アレ』は肉体的な意味で逝くだろうなあ・・・」

『アレ』とは一体なんなのか？と思うだろう。

一から説明しよう。

昔、俺とハセヲともう一人が呼び出された時、今回程無茶苦茶な用件ではないが、かなり危険な用件を頼まれた事があった。

俺とハセヲはこれを承諾したのだが、最後の一人は無理と主張し、あぐくの果てに勝手に自分の世界に戻ってしまった。

俺とハセヲはその後シンと何とか用件を解決させた。

のだが、他の契約者の話によると俺達が帰還リリースした後、その一人が呼ばれて、シンの『神ノ雷』をモロに食らわせたらしい・・・

ちなみにその他の契約者は、生き証人的のにさせるために見させ

たらしい。

契約者達の間では、『アレ』『制裁』『なにそれ怖い』とか呼ばれてる。

最後の一つは完全にネタに走ってる気がする。

今言える事があるとすれば、勝手に元の世界に戻ろうものなら間違はなくシンの『アレ』が待っているであろう事だ。

「覚悟を決めろ。」

もうあの魔獣を別の物と考えながら逝けばいいんだよ……」

「ああ……つか最後の行くの字、間違ってるのか？」

縁起悪いからやめて、マジで。」

とりあえず、俺とハセヲはそれぞれ自分の固まりやすいイメージを暗示する。

「アレは魔獣の形をしたA I D Aだ、アレは魔獣の形をしたA I D Aだ、アレは魔獣の形をしたA I D Aだ……」

「アレはハートレスだ、アレはハートレスだ、アレはハートレスだ、アレはハートレスだ……」

よし……5分くらい暗示をしたらそんな気がしてきたぞ……

さて、そろそろ行こう。

リリース

死の危険が迫ったら帰還使っていいんから死ぬ事はほぼない。

それだけが救いだよ、マジで。

それじゃ、行くぞ！

S
I
D
E

ソ
ラ

O
U
T

第六話 死の恐怖と万死の鎌・前編（後書き）

後編、多分1週間内で修正出来ると思います、が。

確証はないので、大した期待しなくていいです、サーセン。

ちなみに主人公、転生前の記憶は鮮明に綺麗に覚えています。

転生前、転生小説腐る程読んで、いつか転生してみたいなーという厨二思考が頭の中で一杯になっていました。

主人公、表面に出さない隠れ厨二なんですよ、転生前は。

当然ながら、シンが目指してるのは、『最強の転生者』です。

それも、パラレルワールド、他の世界、全てで。

ま、この世界の話が終わったら、二つ目に行こうと思ってますが、プロットが壮大過ぎて、「これ一体何年掛かるんだ？」とも思えるレベルでした（笑）

正直、行かせたい世界が、多すぎるんですよwwww

モデル、性格モチーフなどは、後編のあとがきにでも書こうかと思っています。

第七話 死の恐怖と万死の鎌・中編（前書き）

修正前がカオス過ぎて修正したところ、文字数が倍になりました（笑）

よって、急遽中編・後編に分ける事にします。

できるだけ自然に分かれるようにはしましたが・・・

不自然だったでしょう・・・

では、中編です。

第七話 死の恐怖と万死の鎌・中編

SIDE ツナ IN

血もまだ見慣れてないけど、ちょっとこれはグロ過ぎ・・・
魔獣か・・・倒すしかないよね・・・
いくらなんでも害があり過ぎる。

「アレン君。」

「何？ツナ君。」

「キツイね・・・これは酷だよ。」

「・・・そうだね。」

でも倒さなきゃ、シンは先には進めないから・・・」

「うん、わかってる、わかってるけど・・・」

これはいくら何でもキツイ。

共食いの時点でムゴい・・・気絶させるだけにすれば・・・
オレはアーティファクトを発動する。

「オレは先に行く・・・アレンも準備が出来たら来てくれ。」

「うん、わかった。」

僕もすぐに行くよ。」

オレは谷の穴に入って行く。

早速魔獣の一匹がこちらに向かって来る。

「ギイイイイ！」

「フッ！」

魔獣に手刀を叩き込む。

魔獣はそのまま倒れ込む———と思ったが、倒れ込む前に他の魔獣に喰われ、バラバラになって行く。

「ウツ・・・グロい・・・」

シンはこんなものを見慣れているのか・・・・・・・・凄いな。」

気絶させるのが無理なら———

「死ぬ気の零地点突破・初代エディション」
ファースト

凍らせるまで。

何匹かの魔獣を零地点突破で凍りつかせる。

しかし凄い数の魔獣だな・・・全部を倒せと言う訳じゃないだろうが、それでもキツイ。

そろそろアレンも来るはずだが・・・

アレンが来るまでにここは持ちこたえられるかどうかだな・・・

オレは魔獣に更なる攻撃を仕掛ける

S I D E ツナ O U T

S I D E アレン I N

アレンはヤバイ・・・・・・レベル4の魂程の酷さではないが、かなり酷い。

最初に見た時、吐く程に酷い有様だ。

相手が人でない事には感謝するべきかもしれない。

さすがに命を絶つものには抵抗があるけど、人に害する存在ならば、魔として斬れる。

つまり、あの魔獣はAKUMAと同じだ。

自分でも滅茶苦茶な図式だけど、こうでも考えないとやってられなくて……シンとの修行の影響ですかね……

僕はツナ君の足跡を辿って、崖に入る。

「イノセンス発動！」

クラウン・クラウン
神ノ道化！

僕が谷に入ると、魔獣達が一齐に襲いかかって来た。

僕は神ノ道化を爪から退魔ノ剣に変化させる。

剣に力を溜め——

デス・ボール
「破壊咆哮！」

衝撃波を放つ。

襲いかかって来た魔獣達はある魔獣はバラバラになり、ある魔獣は倒れ、他の魔獣達に喰われて行く。

「哀れな魔獣達に魂の救済を……」

死んだ魔獣達に言葉を送る。

僕は神ノ道化を退魔ノ剣から爪に戻し、ツナ君を探しながら魔獣を倒していく。

今回、僕達がシンに呼ばれたのは、伝説の武器を探しに来たらしいが、一人では多少キツいらしいので、僕達を呼んだようだ。シン一人でも十分問題ないだろうと思ったのは別だが。

エッジ・エンド
「破滅ノ爪！」

魔獣を切り刻みながら進むが、刻んだ肉片が次々と他の魔獣が食べていく。

最初に見た時はさすがに吐いたが、今は少し気持ち悪い程度なのでなんとか問題ない。

それより、早いところツナ君を見つければ。

SIDE アレン OUT
SIDE シン IN

ドゥアーブス・エーミツサエ
「双腕解放」

デクストラー・スタグナンス
右腕固定「死ぬ気の炎」

シニストラー・スタグナレイタ・ボースピア
左腕固定「虹ノ投擲」

ウニソネット
術式統合」

Xin original spell

こうしんそう なながみころし
虹神槍『七神殺し』

「食らえエエエエエ！」

俺は魔獣目掛けて巨大な虹の槍を思いっ切り投げる。

魔獣どもはその槍をまともに食らい、食らった魔獣は消滅した。

この槍、結構威力あるんだが、最近作った魔法だから、少し不安定なんだよ。

だから、何発もホイホイ出せる状態じゃないんだ。

一掃したかったから使ったが、今ので20匹は消し飛んだな。

しかし……あの4人、命の危機に瀕してないとは言え、少し手こずってるな。

「流石に4人だけじゃキツいか。

アイツ等と呼んどこう。」

ホルダーから2枚取り出す。

取り出したのは、裏がそれぞれ漆黒、純白のカード。

コイツ等は少し特殊だ。

何しろ、原作には存在しなかった、『KINGDOM HEART

S』の世界の奴らなんだからな。

俺は2人を召喚する。

「召喚 ハリス ヘラ」

そして、黒の服を着た男と白の服を着た女が出て来る。

この二人は、一人は「始まりの闇」、ハリス。

もう一人は「深淵に導く光明」、ヘラ。

二人とも契約者の中では屈指の強者だ。

「ああ、シンか。

何か用件でもあんのか？」

「我に何の用だ。

くだらない用件なら、斬るぞ！」

「いや、今回は魔獣を倒して欲しいんだ。

出来たら全滅させてくれ。」

「OK♪

お安い御用さ。」

「仕方がないな・・・少し運動でもするか・・・」

ヘラ、アンタが戦うと運動どころじゃなくなりますぜ・・・（汗）

「ついでに言っておくけど、仲間が他に4人いるから、見つけたら合流してくれ。」

「わかった。

合流すればいいんだな？」

「我はもう行く。

見つけたらな。」

・・・しかしアイツ等、転生する前に見た小説の中で、ハリスが主人公の小説、見たことあるんだよなあ・・・ポジションで言えば、ハリスが主人公ポジで、ヘラは途中で出てくる敵の首謀者ポジ。

というかあの小説、サイトの不備で第3部の序盤以降見れなかったんだよ・・・

あの作者どうしてるかねえ・・・全く、10年経っても思い出

はいいものだな・・・

そんな転生前の思い出にふけていると

「シャアアアアア！」

「うおっと!？」

危ねえなオイ！」

一匹の魔獣が口を開いて突進してきやがりました。

まあ、来るとは思ってたよ、正直2人を召喚し、指示出してる間食われてた可能性も否定出来なかったし。

今まで襲ってこなかったのは、主人公補正掛かってるからですねわかります（笑）

とにかく、まだまだウジャウジャいるな。

一掃してやるぜ！

S I D E シン O U T

S I D E ハリス I N

さて、この魔獣達を倒せばいいんだよね？

シンの用件だから断れねえけど、正直すっげえめんどくせえ。だから、早いところ——終わらせる。

「出でよ、エンデ・デア・ダークネス！」

俺は漆黒の大剣、エンデ・デア・ダークネスを出す。

更に剣の形状が槍へ変化させる。

「閻槍よ 彼の者の因果の鎖を貫き通せ ネストスピア！」

漆黒の槍を魔獣目掛けて投げる。
槍はいとも簡単に魔獣を貫く。

更に――

「詠唱破棄 インディグニション。」

ガアアアア！！！！

詠唱破棄でインディグニションを発動する
ん？

俺が何故ここでも魔法が使えるかって？
あんまわかんねえけど、多分この世界で言う『魔法無効化』^{マジックキャンセル}の能力
を持つてるからだと思う。

シンの仮契約カードには稀に『魔法無効化』^{マジックキャンセル}のアドバンテージを持
った奴がいるんだ。

もちろん魔法を使えない奴にはあまり意味がないだろうが、それで
も相手の魔法を無効化する事が出来る。

まあ、俺はその稀な一人らしい。

ちなみに既にアーティファクトを発動させている。

俺は更なる追撃を掛ける。

「吹きすさべ 氷撃の嵐 我が命に従い彼の者を永遠の眠りに誘え
アブソリュート！」

俺を中心とした約半径50mに氷の粒手が混ざった吹雪が巻き起
こる。

魔獣達は次々へと凍りついていく。

「『魔法無効化』^{マジックキャンセル}はマジで便利だねえ。

こんなトコでもホイホイ魔法が使えるんだから♪
さて、ヘラはどうなってるかねえ？」

ま、アイツなら死ぬ事はないな。

あの属性なら問題なく魔法が出せるだろうし。

さて、魔獣狩りの続きを開始だアアアア！

S I D E ハリス O U T
S I D E ヘラ I N

さて、どうしたものか……。我は、シンが先に召喚したらしい4人を探していた。

2組に別れているらしいが、魔獣が邪魔であまり見えん。

「邪魔くさい獣だな……。食らえ！

全てを打ち砕く強大なる光よ その怒りの判決 彼の物達を消し去るために下したまえ ジャッジメント！」

魔獣どもは我が発動した無数の光によって消滅していく。

ここは魔法を使用出来なくするような作用があるが、我には何の問題もない。

ハリスとは違い、『魔法無効化』^{マジックキャンセル}なる力は持っていないが、光明の属性拒絶の力に我のアーティファクトの能力の一つ「拒絶・作用」を組み合わせることで、作用を拒絶する事に成功しているのである。

「来い 狭間。」

我は白いオリハルコンがはめられた太刀を出す。
そして、斬撃を——放つ。

「斬空迅！」

斬撃は魔獣の首を切り裂く。
ふん、とるに足らない獣だ。

魔獣の首は落ちる途中で他の魔獣に食われていき、地面につく前には肉片も残らなかった。

なんとも悪食な獣どもよ……ん？

呆れていると、割と近くに人の形をした影が……

どうやら2人いるようだが……シンの言っていた4人の内の1組はあの者達の事か……？

片方は2丁銃を持った白い服を着た男……もう片方は……
む、奴は……シンに見つけたら合流しろと言われているからな。
合流するでしょう。

S I D E ヘラ O U T

S I D E シン I N

ふう、ここらの魔獣はあらかた全滅したな。

そろそろ集合命令出しとくか。

俺は6人にテレバタイプ念話で話し掛ける。

（おい、お前等。

そっちはどうなってる？）

念話・ハセヲ

（こっちはヘラと合流した。

もう少しで全滅できそうだ。）

念話・ツナ

（こっちもハリスと合流した。
ハリスのおかげで何とかほぼ全滅出来たぞ。）

（そうか。

ハセヲ、ソラ。

魔獣はもういいから、今から俺がいる場所に集合してくれ。
今から頭の中に俺の位置を送る。）

魔獣は少し残しとかなないと、元老院が不審に思っちゃう。

そうでなくとも不審に思うだろうが、そこら辺はテンプレとかご都合主義でなんとかしてくれるはず！

え、ご都合主義とかに頼りすぎだって？

読者は知らないだろうが、この空白の10年色々あったんだぜ？

そんな中でこんなご都合主義、ごく稀にしかなかったんだぜ？

ほぼ予想だにしないカオスな状況ばっかし。

賞金稼ぎ約1000人を相手にしたり、この時代の『偉大な魔法使
マギ』に追われたり、巨大組織の構成員1万相手にしたりとか。

特に巨大組織の時なんか、そこから更に召喚魔ですからねー。

完全に無双ですよ、リアル無双。

あの組織、確実に『完全なる世界』コスモ・エンテレケイアの前身だろjk。

この時ほど、テンプレとかご都合主義が欲しかった事はないね、今
んところ。

これを聞いても、頼りすぎだと言えるだろうか？

おっと、話が脱線したようだ。

早いところ、位置を送り込まないと。

俺は仮契約カードバックテイオーを介し、それぞれの頭に位置情報を送り込む。
さて、これで来るだろ。

——約10分後

俺の目の前には全員集合していた。

なんかハリスとヘラがソラの事凝視してるんだが……多分、世界の違いが原因だろう。

ここで言っとくが、このソラはハリス、ヘラとの面識がない。

原作のソラだからだろう。

実際、ソラにハリスとヘラの事を聞くと「誰だ？それ」と一蹴。

そんな事があったので、今の今までソラと二人の同時召喚は控えていたり。

事実上、初めての面識である……ソラ限定だが。

・ 「あのー、さっきからあの二人、俺の事凝視してきてるんだけど……俺、何かしたかな？」

「ああ、アイツ等はお前の世界のパラレルワールドにいた奴らだからな。

その世界のソラと面識があったんだろう。」

まあ、これがきっかけでハリスとヘラの記憶が追加されればいいんだが……

追加というのは、白蘭を知っていればわかるが、わかりやすく例えを出そう。

ある世界があるとする。

その世界にはAとBに別れたパラレルワールドがあるとしよう。

ある1人、aがAに飛び、bという人物に遭遇する。

この時点では、bに何の変化も起きない。

だが、その後aがBへ飛び、そこで偶然、bに遭遇したとする。
aに遭遇した事でBの世界のbにAの世界の自分の記憶が追加されるのだ。

白蘭の場合、この工程のみでパラレルワールドの統一能力を手に入れたが、幸い、今現在この事例で白蘭のようになったやつはいない。ただ、記憶が追加されるだけなのだ、そのAの世界の記憶だけが。

「ん・・・少しづつ、あの二人の記憶が入ってきてるっぽい・・・」

「そうか、多分そんな時間は掛からないだろうから、すぐに思い出すだろう。」

こういう事例、10年間何回かあったからな。
もはや慣れた、と言いたいけど、白蘭のようにならないかが心配なんだよね、未だに。

さて、無駄思考はここまでにして。
コイツ等には^{リリース}帰還してもらうか。

「お前等おかげもあって、の魔獣はほぼ全滅した。
もう帰ってもいいぜ。」

ソラ、悪いけどハリスとヘラとの話はまた今度にしてくれ。」

「わかった。」

正直混乱してるし、むしろちようどいい。」

「終わったか・・・キツかった・・・精神的な意味で。」

「これで元の世界に帰れますね・・・」

正直疲れました……」

「今度は念話で話してから呼んでよ。
疲れたし、リボンや母さんになんて言われるか……」

「さくで、機関の奴らと何をしようかね
また弄って遊ぼうかな♪」

「それでは我は帰るぞ。」

そして、6人は帰って行く。

……とりあえず、伝説の武器を探さないとな。

魔獣はあらかた一掃したし、残ってもせいぜい3、40体程度だろう。

しかし、こんな危険な所からよく帰って来れたなく、ここの情報源の奴。

ま、本当かどうかは別なんけども。

さて、武器はどこにあんのかな？

俺は周りを見回す。

ちなみに約数百年前、伝説の賞金首も神器を求めてここに来ていたらしい。

その賞金首は俺と同じ異常なチート野郎である事は間違いない。
もしかしたら俺と同じ転生者だったりしてな！。

「どんな武器か楽しみだ♪
とにかく、探索探索。」

ちなみに返り血はべっとりついた。

もう全身万遍なくな。

少し口にも血が入っちまったし。

ま、魔法で綺麗にしたんですけどね。

こういう魔法は使えるから、覚えとくに越した事はない。

もちろん6人にも魔法で綺麗にしておいた。

あの6人も程度こそ違うものの、血でべっとりだった。

ソラなんか書かれてないが、あまりにも強い血の臭いでまた吐きそうになる有様。

……ソラには耐性、付けさせないとな。

……ん、あの割れ目、なんだ？

俺は崖底へ降りていく。

割れ目の近くへ行ってみると、洞窟の入り口らしき割れ目だった。

ここ、怪しいな……とにかく入ってみよう。

俺は割れ目の中に入った。

そして、割れ目に入った瞬間、異質な威圧感がひしひしと伝わってくるのを感じる。

「ほぼここで合ってるって事か……ついに武器のご対面だな。」

この威圧感……スゲエ。

異質なものもあるが、同時に何らかの禍々しい雰囲気も感じる。

俺は歩みを、異質な威圧感の源へと進む。

近付くにつれて異質な威圧感が、重く押し掛かってくる。

やがて、広いドーム状の空間に辿り着く。

何かの激闘の跡か、天井からいびつな光が差し込む。

ここであの賞金首も戦ったのか……？

そんな事を思いながらも、空間の周りを見る。

そして、俺は空間の真ん中にある台座の上に何かが刺さっているのを見つける。

あ、あれは……まさか……

『万死ヲ刻ム影』か！？

万死ヲ刻ム影。

それはハセヲが持っている特殊な武器。

これを使い、敵に攻撃すると敵の体力や魔力、つまり現実という命を吸収する事ができるチート武器だ。

まさに伝説の名にふさわしいような武器。

後はアレを抜くだけか。

俺が鎌を引き抜こうとした、その時だった。

『お前に問おう、ここに何の用だ？』

「ッ！？」

俺は声のした方を振り返る。

そこには、いるはずがない奴が存在していた。

「な……何でお前が……！？」

何故お前がここに……！？

ハセヲ！」

お前は確かに帰還^{リリース}していたはず！
何でこんな所にいる！？

しかも・・・雰囲気が随分違う！

俺の知ってるハセヲは、ここまで強い威圧を出せる奴じゃなかった！

『ハセヲ？

ああ、確か俺の本体の名前だったな。』

「本体？」

本体じゃない？

それじゃ、お前は・・・何だ？

俺の疑問に答えるかのように、ハセヲが口を開いた。

『俺はハセヲじゃねえ。

言わば思念の存在だ。』

「思念・・・だと？」

思念。

それは肉体を持たず、人格、記憶のみで構成された存在。
世界によっては実体化したりする事もある。

ハセヲの思念なら、実力はよくて同等。

だが、このハセヲは明らかに本物より実力が上。

これは一体どういう事だ？

「お前・・・思念なら何故今のハセヲより強い？
思念なら、せいぜい実力が拮抗する程度のはずだぞ！」

『俺は本体の未来に当たる存在の思念だからだ。
今の本体より格が上になるのは当たり前だろう？』

未来だと？

ハセヲは未来でこれだけ強くなったと言う事か？
確かに、未来のハセヲの思念と言うのは間違っではないかもしれない。

それを証明出来る証拠が、いくつもある。

まず、今のハセヲより、死の恐怖の形容が合う威圧感がある。
それに、容姿に激しい変化がある。

現在、ハセヲの仮契約カードはxthフォームの姿で表示されているのだが、このハセヲは服が白と黒で構成されており、B—stのような尾が腰に生えている。

平たく言えば、まるでB—stとxthが混ざったような姿だ。
このフォームを名付けるとするならば——B—st—xthフォーム。

B—stのパワーがありながら、xthのスピードを兼ね備えているであろう完全なフォーム。

今のハセヲから見れば、まさに理想の姿だ。
しかし・・・コイツは厄介だな。

『お前には選択肢が二つある。』

「へえ、何と何だ？」

どうせ、ロクな答えじゃないのはわかってる。けど、念のため聞いとかないとね。

『一つはこのまま逃げる。二つ目は——死だ。』

予想はしてたが、なんだこの理不尽な選択肢は。この時点で答えは決まってる。

『さあ、どちらを選ぶ？』

少なくとも前者なら、命だけは助かるぜ？』

「どっちもお断りだね。

選ぶとしたら——お前を倒して、武器も手に入れる。」

言うまでもねえよ。

何より不老不死の俺が死ぬかつつの。

『そうか・・・ならば、後悔しな。俺を、相手にした事を。』

そう言うのと、ハセヲは双銃を取り出し、こちらに乱射をして来る。動きが速いな。

瞬動、いや『剃』レベルの移動か。

確実にxthのハセヲより速い。

だが、弾に当たらなければいい話！

俺は弾を余裕に避け、反撃を仕掛ける。

「覚醒スキル、発動！」

10年間の間、魔法や体術以外の技術を他の契約者から習得したか
いがあったぜ！

俺は別次元の空間を開く。

「Let's ゲイボルクパンチ！」

直後、ハンパないデカさの機械の拳がハセヲに向かって降りかかる。
しかし、ハセヲは大剣・シラードでゲイボルクパンチを防ぐ。

よくゲイボルクパンチを防御できるな・・・ガンナー覚醒スキルの
一つだぞ・・・！？

覚醒スキルを大剣一本で防ぐとは・・・今のハセヲじゃとても出来
ねえ芸当だ。

ハセヲはそこからさらに武器を双剣・虚空ノ双牙に切り替え、こち
らに向かって攻撃を仕掛けて来る。

『食らえ。かまいたち 鎌鼬の舞。』

ハセヲは舞いながら鎌鼬を放つ。

俺がやった技の応用技か・・・かなり改良してやがる！

だが・・・未来のハセヲと言えども、俺は負ける気はねえ！

それに対して、俺は詠唱を始める。

ト・シュンボライオン ディアー・コネクター・港イテユラネ・フロゴスビゲネヲ由タネ・カタルセオラギネー・ロンファアイア
「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ浄火の炎 燃え盛る大剣
レウサントーン ビュール・カイ テイオン ハ・エペフレゴン・ソドヌマルトートウス
ほとばしれよソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵
ナトゥ ウーロニア・フロゴシス スタケネット コンプレクシオ
に 燃える天空！ 術式固定 掌握！

プロ・アルマテイオーをうえんてんそう
術式兵装 業炎天装」

体が炎を纏っていく。

燃える天空を掌握してみますた。

この兵装、攻撃特化型だから、かなり攻撃力が上がってるはず。はずって言うのは、何回かし使った事がないんだコレが。

『プロ・アルマティオーネ
術式兵装か。』

「これでテメエを倒せるとは思ってないけどな。」

正直、この兵装でケリを付けたいんだが、今アイツがどれくらいの力なのかによる。

最低でも5割くらいならなんとかなるんだが・・・

『兵装をしたところで、俺はまだ2割程しか力を出していねえ。もっと俺を楽しませろよ!』

2割・・・だと!?

予想以上に厄介だな・・・いくら俺がチートでも、2割はちとキツイぞ。

こいつ・・・できる!

だが――

「その余裕がいつまでも続くと思うなよ?

絶対にテメエを倒して、武器を手に入れてやんよ。」

現在、俺は約5割で戦っているのに対し、ハセヲは2割。

一見劣勢に思えるが、おそらくまだ俺の実力を把握してねえ。

少し飛ばせば、本気は行かなくても7割程でくるはずだ。

「行くぜ!」

作戦決行。

まずは、瞬動と虚空瞬動でハセヲの周りで移動する。

『何がしてえんだ………？』

「こうすん………のさっ！」

俺は移動したルートに炎で編んだ^{デコイ}罠を設置していく。
当然ながら、自律式にしている。

雷化してねえとは言え、音速レベルの瞬動をかましてるんだ。
目測できても、わずかにしか出来ねえはずだ。

炎の^{デコイ}罠は、次々とハセヲに攻撃を仕掛ける。

こんなアホな方法思いつくのも、俺の魔力が多いからだ。
普通の奴ならこんな方法は無駄にしかならんからな。

『ハッ、こんな^{デコイ}罠、銃だけでも消せるわ！』

ハセヲは魔法の射手を弾に込めた銃で^{デコイ}罠を破壊していく。
が、破壊の際、大した威力はないが爆発するように設定しており、
多少ダメージを受けているのがわかる。

が、障壁があるからそれで済んでるようなもの。
逆に言えば、障壁を破壊すれば^{デコイ}罠でも十分な威力になる。
さて、そろそろ俺も^{デコイ}罠に混じって本格的な攻撃に移るか。

俺が作り出した^{デコイ}罠は約1000体。

その中に俺を見つけるのは困難であるはず。

だが――――

『チッ、これではラチがあかねえ！』

こんなセコいマネしてねえで、出て来やがれ！』

「ああ、出て来るよ。」

「お前の懐にな！」

俺はあえてハセヲの懐に飛び込む。

ぶっちゃけ、裏をかくつもりでこのために^{デコイ}囷を作った訳だ。

^{デコイ}囷なしじゃ懐に行くのはさすがにキツイからな。

まあ、作りすぎたとは思うけど。

「^{しぐれそうえんりゅう}時雨蒼燕流 攻式八の型 篠突く雨！」

『な、何・・グッ！？』

攻撃は見事にハセヲの鳩尾に入り、ハセヲが多少ひるむ。

更に、邪魔な障壁を破壊するために、片手だけ侵食を深める。

「障壁破壊掌！」

侵食を深めた手で、障壁をガラスのように破壊する。

ネギのアレと大体原理は同じだが、技名ど忘れしちゃったんだ。
一応、こんな技名だったと思う。

『障壁を破壊する・・・だと！？』

「お前は俺をナメ過ぎなんだよ。
食らいな。」

俺は指をパチンと鳴らす。

それを聞いた^{デコイ}囷達は、ハセヲの懐へ飛び込み——爆発する。

第七話 死の恐怖と万死の鎌・中編（後書き）

さて、後編に書くはずだった主人公のモデル、性格のモチーフなんです、まさかの中編・後編に分ける事態になってしまったので、こっちも分けちゃいます（笑）

主人公のモデルなんです、大方ナギをベースにし、髪型、目などの設定を変えた感じですね。

髪型は一応違い出すために、ナギほどツンツンしてません。

まあ、NARUTOのミナトの髪型を白にした感じと思っというてく
ださいww

目は言うまでもなく、金と銀の十字架が刻まれたオッドアイですが、それ以外はナギに近い感じですかねww

服などは総合的にナギと全然違いますね、ちゃんとしたイメージがないから詳しくは書けないけどww

顔は、ナギに似てるけど微妙に似てない・・・そんな感じを想像してくださいww

ちょいいい加減でサーセンww

余談ですが、ハリスとヘラ、後この二人が唱えた詠唱についてなんです、モバ、エブリで書いてた時代に某サイトで小説書いてた人からお借りしました。

が、そのサイトが本文にも書いたように不備があつたため見れなくなり、その人が今も書いているのかどうかわかりません。

あの人が見つければ、ハリスとヘラを改めて借りさせてもらうんだけどなあ・・・

余談でした。

では、性格モチーフは後編のあとがきで書きます。

第八話 死の恐怖と万死の鎌・後編（前書き）

修正って疲れますよね・・・

ネトゲやってるんですが、放置気味ですよWWW

次章はいつかかる事やら・・・（笑）

第八話 死の恐怖と万死の鎌・後編

俺が指を鳴らせば、デコイターゲット 罠が標的に突っ込んで爆発するっていう仕組みだ。

ある意味自律式の時点でアレなのにこういう細工を入れたらやられる側はたまったもんじゃねえだろうなあ・・・

だが、これで終わると思えんな・・・いくらなんでもあっけなさ過ぎる・・・

その予感は的中した。

爆風が舞う中、ハセヲは――わずかな火傷を除けばその場に何もなかったかのように立っていた。

『・・・大したモンだ。

俺にダメージを負わせるとはな・・・』

「ハア・・・やっぱりな。

この程度でやられるとは思ってなかった。」

これでやられてたら、戦りがいが無さ過ぎる。

というか、それ以前にナメ過ぎだ。

しかし、所々目立ってないとは言え、少し火傷が見られる・・・多少ダメージを受けてるのは確実だな。

「いい加減少しは本気で来な。

2割で来るから、そんな怪我をするんだ。」

『ああ・・・少しお前をナメ過ぎたようだ。

お前を・・・潰す!』

潰すって。

怖ええなオイ。

まあ、俺としては7割ぐらいで来てくれれば十分だったんだが。どうやら本気で来るようだ。

さて、どんな手で来る！？

『見せてやる、百重千重と重なりて走れよ稲妻 千の雷』
ヘカトンタキス・カイ キーリアキス アストラブサドー
キーリブル・アストラベ

千の雷か。

そういえば、昔ハセヲに教えてたな。

だが、それだけか・・・？

俺のその疑問は、見事に裏切られる。

『術式固定』
スタグネット

——何？

『掌握！』
コンプレクシオー

何・・・だと？

『術式兵装 雷天大壮』
プロ・アルマティオーネー・アウトラター・ミガトズルナメネー

嘘だろ！？

これは予想外だ。

なんでコイツが『闇の魔法』
マギア・エレベアを使えるんだ！？

掌握した魔法自体は教えたものだが、『闇の魔法』
マギア・エレベアの巻物を渡した

覚えはねえ！

なのに、何故コイツが『闇の魔法』
マギア・エレベアを使える！？

まさか未来の俺が教えたのか？

「……なんでお前が『闇の魔法』マギア・エレベアを使える？
お前に教えた覚えはねえぞ？」

『お前と同じように試練を受けたからさ。
俺も力を使えるようになってんだよ。』

「何……？」

コイツが試練を受けただと……？
何故だ……？

やはり、未来の俺が教えたと考えるべきか……？

『ハッ、隙だらけだぜ！？』

「くっ……！」

マズい。

そんな事を考えてる間に、ハセヲは雷速瞬動で目の前に移動してくる。

今は考えるより、倒す事が先決だな。

俺は後ろに身を引き、Xブレードキを呼び出す。

「ラストアルカナム！」

Xブレードキで怒涛の攻撃を仕掛ける。

しかし、ハセヲはそれをことごとく双剣でガードしていく。

クソッ、未来の存在の思念だけあってかなり強ええ。

次はこの一撃に持ち込む！

「食らえ！ サギタ・マギカ 魔法の射手 コンウエルゲンネグエス 集束・火の二千矢 ばくれつほうけん 爆裂崩拳アアインド
オオ・・・二重の極み、アーーーーッ！」

『ふん。魔法の射手 サギタ・マギカ 集束・風の二千矢 コンウエルゲンティア 暴風崩拳& a m p; 無音拳！』

俺はもはやネタ技にも等しい技を併用し、ハセヲは無音拳を併用した技を繰り出す。

その互いの技が激突した瞬間、風により火はより勢いを増し、炎へと昇華する。

それによって、大爆発を引き起こした。

あまりの爆発の勢いに、俺とハセヲは吹き飛ばされる。

「ぐっ・・・」

『がっ・・・』

吹き飛ばされながらも、何とか体勢を立て直す。

しかし、ハセヲが魔法を使えるようになるどこまで強くなれるものなのか・・・？

千の雷を教えてた頃、得意な魔法属性を見たが、光、風、雷。

ほぼネギと得意属性が同じだった。

ただ一つ違う所は、闇の属性も得意な事だ。

だが、せいぜい覚えられて中級魔法が限界だろうと考え、千の雷を途中まで教え、後は独学でやらせてみた。

その時は無理だろうなと疑いなしに思ったものだ。

しかし、ハセヲがそれを独学で完成させた時は驚いた。

元々ハセヲは、戦いに関してはそれなりの素質があったのは確かだ。だが、最上級古代語魔法まで途中からとは言え独学で習得する程の

素質があるとは思わなかった。

つまり、『^{マジック・エレベーター}闇の魔法』まで使いこなすこの未来のハセヲの思念は、まぎれもない天才である事が伺える。

この世界ではない者（俺除く）で千の雷や『闇の魔法』まで使えるのは、さっきも言った通り素質があり、天才である事がわかるのだ。

『むむ・・・なかなかやるじゃねえか。』

「当たり前だ。俺を誰だと思って言っている？

お前のマスターであり、いずれこの世界に名を轟かせる（予定）存在だぜ？」

こんな事言ってますけど、天狗になってるわけじゃないからね？

・・・まあ、まだその時期じゃないけど。

第一、戦争前頃には額がヤバい事になってるだろうが。

『さて・・・俺もそろそろ本気を出すとするか。』

「やっと本気を見れる訳か。

OK、俺も実力の5割を出してやんよ。」

『ふん、まだ本気じゃなかったって訳か。』

「当たり前だ。

本気を出せばお前と言う思念は完全消滅させられる。

完全消滅したくなければ、俺を本気にさせねえ事だな。」

言っておくが、これはハツタリではない。

実力が5割のところ以外はな。

確かにこのハセヲの思念は強い。

だが、俺が本気を出せばそんなもの関係なしに思念を完全消滅に至らしめる事ができる。

だが、そんな事をするのはさすがに抵抗がある。

それに、出来ればこの思念を本体との同化をさせようと思っている。今のハセヲと思念のハセヲを同化させれば、多少なりともパワーアップ出来るだろうからだ。

『俺が持つてるこの力——お前に見せてやるよ……』

「力……アレか？」

『ああ——だがお前が思っているものとは思わねえ事だな。』

「んな事はわかってんだよ、さっさと見せな。」

大方予想は付いてる。

だが思念の容姿を見る限り、ある程度の変化はあるはずだ。

『ふ、言われずとも見せてやるぜ！』

さて、見せてもらおうか、B—s t—x t hの——

『憑神』スケイスの姿を。

『来い——』

『来いよ——』

『俺は、ここにいる！』

『スケエエエエエエエイス！』

そのハセヲの憑神^{アバター}は、俺の予想通り、変化を遂げていた。

通常時の思念のハセヲだ同じような、白と黒で構成されたスケイス。

「なかなかのもんだ。

xthの時より優れてるのがわかる。」

『ふ、褒め言葉として貰っとくぜ。』

見た目に関して簡単に言うと、3rdスケイス寄り。

ただ、一部が黒くなっていたり、B-stの禍々しい尾も憑神^{アバター}に構成されていたりと、B-stの要素もある程度入っていた。

・・・まあ、3rdより人型に近く、いや、もはや完全な人型になってるのは置いといて、まあ結構いい感じに今より進化してるな。アイツが本気で来てるんだ。

俺も少しだけ力を出さなきゃな。

「さて、俺もやるか。」

『闇の魔法』第二段階。――

マギア・エレベア
『闇の魔法』第二段階――

原作では暴走モードとして描かれていたこの力。

ネギはこれをコントロールするのにかなり時間がかかり、やっこの
思いで闇を一瞬だが制御した。

一瞬でもコントロール出来たのは闇に取り込まれたらそれはその時、
後は仲間に任せようと言う考え、所謂丸投げに至った。

そして、ネギが得た答えは――フェイトと友になりたいと言う答え
に至る。

そして俺も例外ではなく、自分の闇、光だけではなく、他人の闇、
光さえも受け入れる心。

俺が得た答え、それは――関わった全ての者の全てを受け入れる
事。

この答えを出したのは、ここ数日の間。

仮初の答えではなく、真の答えを見つけた俺に――恐れるものはな
い！

今のところは。

「お前はまだ『闇の魔法』の真髓を知らないな？」

『何を言い出すかと思えば。』

マギア・エレベア
まだ『闇の魔法』にはまだ先があるとでも言うのかよ？』

「どうやら未来の俺は教えてねえようだから、教えてやる。

知っての通り、『闇の魔法』は、使うたびに魂、肉体を蝕む言わば
禁忌の魔法だ。

そして、ある段階を越えると、闇が本格的に体を蝕んでいく。」

『それが真髓と何の関係があるってんだ？』

「話を最後まで聞きな。」

放置すればいずれ魔の者になり、自我がなくなっちまう。
それを回避するには、闇をコントロールする術を見つける必要がある。

そして、それがコントロール出来るようになった時に初めて新しい段階に入る事が出来る。

それこそが、真髓だ。」

『で、何を見せてくれるって言うんだ？』

「その真髓を見せてやるよ。
ハンデとしてここからは術式兵装と魔法以外は使わないでおいでやる。」

ハセヲを消滅させないで行くなら、それくらいが妥当だしな。

『大した自信じゃねえか。』

「・・・しかしテメエはこれだけ言っても冷静でいられるとは、大したもんだ。」

さっきはあんなにキレかけてたのにな。」

『俺は相手が手加減しているうちに倒す主義なんだよ。

それが一番、有利に行けるからな。』

ほゝ、なるほど。

つまり俺が手加減（油断）しているうちに倒せばラッキーって事か。

さっきまでキレてた奴とは思えないくらい冷静だねえゝ。

ま、フルボッコにしてやんよ。

俺は闇を解放し、『マギア・エレベア闇の魔法』第二段階に変化する。

ま、変化したって言うより、変貌だな。

見た目はネギとほぼ同じ。

ただ、紋様がネギやエヴァと違って、腕の甲に十字架が刻まれている。

最初からあった訳ではないのだが、第二段階を習得した時、紋様が変化して、こうなっていた。

と、まあこんな話は後にして、と。

ウエル・シエル・リ・ウエル・ウエラリオル

シニストラ・エーミッサ・スタダネリザル・アストラペー
左腕術式固定「千の雷」×3

デクストラ・エーミッサ・スタダネリザル・ア・フロゴシス
右腕術式固定「燃える天空」×3

『な・・・！？』

両腕にそれぞれ3つの固まりだと！？

そんな事が出来る訳が・・・！』

ま、『クロス・アイ十字架ノ目』の力を持てれば、可能な事だ。

『クロス・アイ十字架ノ目』の前にも少し話した通り、実際に見た物、記憶に残っている物の技、技術の習得をかなり助けてくれる眼である。

一発で習得できるものもあれば、習得に時間が掛かる物もある。

鮮明に記憶に残っている技、技術程習得し易い。

だが、例外もある。

マジックキャンセル魔法無効化など、比較的珍しい能力は習得まで時間がかかるし、場合によって習得不可だったりする。

だが、自らのオリジナル技などは、自らが生んだ技であるため、時間こそレア能力よりかかるものの、ほぼ習得可能なのだ。

この片手に3つの魔力を固まりを固定しているのは、掌握をベースにした、俺が考えたオリジナル技である。
名付けて、『六重掌握』。

「六重掌握！」

体の構成が雷と炎に変化する。

ちなみにさっきの燃える天空の掌握も入れて、千の雷×3、燃える天空×4だな。

実質、7つを掌握してるようなもんだ。

プロ・アルマティオー・あいえんしんそう
「術式兵装 雷炎神装。」

この兵装、ある意味チートじゃね？
個人的に。

攻撃＋速度Ⅱチートの図式が成り立ってるんだが、どう思う？

『く……、お前になんざ、負けてたまるか！
シ・デス・アビス・ラ・ゲヘナ・エ！

シニストラ・エーミッサ・スタグネット
左腕術式固定『光ノ深淵』

デクストラ・エーミッサ・スタグネット
右腕術式固定『闇の始まり』

ドゥプレクス・コンプレクシオー
双腕掌握！』

お、始動キー覚えてるのか。

『死の恐怖』の二つ名に似合う、いい始動キーだな。

プロ・アルマティオーネかいひかりとはじまるやみ
『術式兵装 光深闇始！』

テメエを今すぐ倒す！』

ほう、オリジナル魔法か。

しかも、最上級クラスときた。

まあ憑神時アバターに出来るとは思わなかったけども。
少しは・・・期待出来そうだな！

「オリジナルで術式兵装プロ・アルマティオーネか。

そこなくちな。」

『行くぜ、光速瞬動！』

直後、ハセヲが元居た場所から消え、後ろを見ようとした瞬間――
後ろから衝撃が走る。

「の。っ・・・・・・・・！？」

痛ッ・・・・・・・・！

そういえば、アイツ光属性の魔法を掌握してたな・・・

光速瞬動か・・・厄介だな。

これじゃ折角六重掌握したのが無意味になっちまう。

だが・・・雷速瞬動にも弱点があるように、大抵の技にも弱点はある。

光速瞬動・・・弱点は必ずあるはず・・・

・・・言うまでも無いことだが、ご都合主義が発動していないため、可能な限りのスピードでなんとかギリギリで、と言いたいのだが、現在進行形で――

「ごっ、がつ、あべしっ、ひでふっ！」

フルボッコにされてます。

・・・さっき自分がハセヲにフルボッコするって思っときながら、なんだこの体たらくは・・・

しかし、これではラチがあかん。

面倒だがもっかいアレ、使うか。

俺は手を地に置く。

え、なんで何事もなく置けたかって？

多分やっど都合主義発動したんだと思うよ（笑）

正直、発動しなかったらさすがにヤバイ所でした。

『何をする気か知らんが、やらせはしねえ！』

やべ、時間が・・・ッ！（この間約000・1秒くらい）

「二重の極み！」

地面に向けた二重の極みによって、洞窟全体に砂煙が舞う。

『ッ！？』

砂煙だと！？

クソ、見えねえ！』

なんとか二度目のフルボッコタイムは避けたが・・・一時的なものに過ぎねえ。

だが、これで少しは弱点がわかるはず・・・

目を可能な限りこらしてみる。

・・・ん？

わずかだが、白い軌道のようなのが・・・ハッ！

もしかしたら光速瞬動の弱点、わかったかもしれん……
視力を最大限に上げ、軌道を見ていく。
……見えた！

『そこか！』

どうやら俺を見つけたようだな。
ハセヲが迫って来てる。

だが、これで確定だ。

光速瞬動の弱点は———

「三重の極み！」

『なっ……！？』

ぐへっ！』

早過ぎるが故に、軌道が丸わかりだって事だ。

ただし、土煙とか、視界の妨げになるような状態でないと、見極められない程、軌道が見えづらいけどな。

ハセヲは三重の極みの影響で、体中にヒビが入る。

それと同時に、ハセヲから光の力が消える。

P Cの体だから、出血の代わりにヒビが入る訳か。

雷速と光速の速さは確かに歴然だ。

ストリーマー

だが、雷天大壮の雷速瞬動が先行放電によってカウンターし放題である事しかり、光はそれをさらに露骨に浮き彫りにさせる。

俺にとっての救いは、ハセヲが光ノ深淵を二つ掌握しなかった事。

双腕掌握されてたら、おそらく雷天双壮のように『常時光化』されて、勝ち目がなくなってたかもしれん。

そう思うと、ある意味恐ろしい。

だが、その心配はもういらねえ。

光の兵装が消え、闇の兵装のみになったアイツに、速度では負けはしない！

しかし何故に光だけ消えたんだ？

闇の兵装も消えてもおかしくないはず・・・
これらもご都合主義なのか？

『くっ・・・『光ノ深淵』の兵装が・・・
だがまだ俺には、コイツがある！』

ハセヲは突き刺さっていた鎌——万死ヲ刻ム鎌を抜き取る。
やっとなアレを使うか。

まあ、本気になってるんだったら、それくらい当然か。

ハセヲは俺に向かって突進してくる。

だが・・・『常時雷化』している俺には、大して脅威に感じないス
ピードだ。

さて、と。

飛ばしますか。

「雷速瞬動！」

『げっ・・・！』

雷速瞬動で懐に入り、そして——

「爆裂掌帝」
ばくれつしょうてい

腹に掌底を打ち込む。

そして、爆発する。

これ一撃で火の魔法の射手100本分に相当する。
そんな掌底を打ち込んだのだから、無事では済まない。

『あ。っ……。！』

なんとか体勢を立て直したハセヲ。
しかし、ハセヲの腹には更なるヒビが広がっていた。

『チッ……。もう魔力も体力もほとんどねえ……。
これで殺る！』

そう言うと、ハセヲは万死ヲ刻ム鎌を変化させていく。
その形は、禍々しく、そして鋭さを増していく。
っーかオイ。

殺る言うなし。

『食らえエエエエエ！』

魔神狩りイイイイ！』

確実に相当の破壊力を持っているであろうな衝撃波をこっちに向かって飛ばして来る。

うん、破壊力が半端ない。

それぐらい、普通にわかる。

でもさ……。オメーはマカか？

アレマカにしかできない必殺技のはずだよね。

まさかあの鎌って意志持ってるの？

しかもなんか、闇の力も混じってる気が……

ちとヤベエかも……。これは。

仕方ねえ。

疲れるからあんまりやりたくなかったんだが……。そうも言ったら

れんな！

ドゥアーブス・エーミツサエ
「双腕解放」

デクストラ・スタグナンス
右腕固定『死ぬ気の炎＋魔法の射手 連弾・虹の千矢』

左腕固定（シニストラ・スタグナンス）『虹ノ投擲』
レインボースピアー

ウニソネット
術式統合

X i n o r i g i n a l s p e l l

こうしんそう なながみころ
虹神槍『七神殺し』強化ver.」

俺は両腕からもしものために施した遅延呪文を解放する。
ディレイ・スベル

そして、術式統合し、虹神槍、『七神殺し』を作り出す。

それも、魔法の射手を付与した& amp; 『闇の魔法』のエフェク
マギア・エレベア
ト的なのが掛かった、強化版。

ちなみに魔法の射手と言っても、7つの属性を練りこんでるから、
1本だけでも十分な威力がある。

それが×1000、それを『七神殺し』に組み込んだのだから、そ
の威力は計り知れない。

後、『闇の魔法』のエフェクト的なのは、原作34巻見てく
マギア・エレベア
れ。

説明がめんどくなってきた。

そして、投擲の構えを取る。

「歯ア食いしばんな！

オラアアアア！」

俺は虹神槍を投げる。

魔神狩りと虹神槍は激突——

エーミッテンス

「解放 虹神槍 七虹招来！」

そして——虹竜七迎こうりゅうしちこう！！」

超がつく大爆発が起こる。

どれくらいの大爆発かつつと、ラカンVSネギの時、ラカンが力技を使った時以上の大爆発。

てか、アレ以上の破壊力なんて、核ぐらいじゃない気がする。

ただでさえ異常な威力なのに、七虹招来、その上に虹竜七迎……我ながらカオスな威力だわ……

あれだけ広がった空間は今の爆発により、もはやただの巨大な空洞と化していた。

『くっ……』

ハセヲの方を見ると、壁にめり込んでいた。

どうやらハセヲは今の爆発の風圧で壁に思い切り当たったようだ。

『七神殺し』こそ直撃しなかったものの、その影響で闇の兵装も解除されてしまっている。

まさか『七神殺し』強化版が直撃しなかったとはいえ……一撃でコレとはな……

強化版は一時封印だな。

さて……ハセヲの体も、そろそろ消滅の危機に瀕していてもおかしくねえな……

勝負はほぼ付いたも同然だな……正直後半はやり過ぎた気がする。

そう思った時。

『く・・・そっ！』

何故本気になっても勝てん・・・！？』

ハセヲが立ち上がる。

ヒビは全身に入り、一部に至っては表面が剥がれたような跡まである。

本来ならばとても立てる状態ではない。

「・・・お前は確かに強いが、時には運も戦いの内に入る。
もしお前が『常時光化』でもしてたら、負けてたかもな・・・」

ホントにされてたら打つ手がほとんどなかった。

ガチで本気で消滅にかからなかったら倒せなかっただろう。

幸い、魔力が尽きかけてたおかげで、再度の光の掌握は防げたが。

『・・・チツ。

最後に足掻くくらい、させやがれ！

データ・・・ドレイン！』

「！」

くっ、マズい！

最後の足掻きにデータドレインをして来たハセヲ。

データドレインは、思ってるよりも危険なんだ。

万が一データドレインされたら、俺の弱体化はもちろん、ハセヲが全快、強化されてしまう。

アイツ、動くのすらキツイはずなのにまさかデータドレイン撃ってくるとは！

「イタチの最後っ屁って奴か！
最後っ屁にしてはデカ・・・過ぎん・・・だろっ！」

雷速瞬動でとっさに回避したものの、次々とデータドレインを乱射している。

ただでさえ1発だけでも負担がかかるのに、このまま乱射したら、確実に消滅する！

悪いが、消滅させないためにも、これで決着を付けさせてもらうぜ！
俺はとっさに雷速瞬動でハセヲの目の前に移動し、トドメの一撃を放つ。

もちろん、普通の一撃だ。

構成が雷と炎だから、多少の火傷はすると思うが。

『ぐふっ……！』

トドメの一撃によって、ハセヲは地面へと落下していく。
そして、ハセヲが地面に着くと同時に、鎌も地面へと突き刺る。

『・・・お前の勝ちだ。』

この鎌、持って行きな。

俺の役目は・・・終わった・・・』

「ちょっと待った。

まだ消えようと思うなよ。

お前にはまだやってもらいたい事がある。」

『何・・・？』

「お前には本体のハセヲの力になって貰いたい。
これからのためにな。」

同化して貰わないと、こっちが困るんだよ。
戦力UPしたいからな。

『俺の・・・本体？』

「ああ、お前には力になって貰わなきゃ困るんだよ。
どうせなら消えるんじゃない、本体の力になってくれ。」

『・・・本体への回帰か・・・それも悪くないかもな・・・』

本体のハセヲとの同化。

それによってハセヲに新たな力が宿るだろう。

俺はハセヲの仮契約カード^{バックテイオー}を出し、同化の儀式を始める。

「春に誕生の歌声が響き、夏に成長の足音が近づく。

秋に最後の輝きが生まれ、冬に全てが死に絶える。

永劫を巡り、同じ性質持つ者の一つに！

禁魔術、ユニバース・リユニオン！」

思念はカードへと取り込まれ、一つとなった。

そして、カードの表記にも変化が表れた。

カードのハセヲの姿が、『B s t — x t h』へと――

俺は鎌を地面から抜き取り、その場を後にした。

まだまだ異世界の武器は世界各地にある。

すべての武器を見つけ、すべての武器に宿る思念と本体との同化――

――それらを目的とし、次の武器を探す――

ま、格好つけて言ってるけど、実際は強い奴と戦う事と戦力UPと
武器が目的って事だ。

俺は手にした鎌を見つめる。

「これからよろしく頼むぜ？
万死ヲ刻ム影。」

そう言った後、鎌がそれに反応するかのように光った気がした――

第八話 死の恐怖と万死の鎌・後編（後書き）

こちらでは性格モチーフをぶっちゃけますww

ここだけの話、性格モチーフにしているの、大体俺ですwww

イケメンとか長身とか一部の性格除けば、ほぼ俺ですね（笑）

もうね、自分が転生したらこうなるんじゃないかなーってノリですよww

性格モチーフが俺だからか、結構感情移入しちゃうんですよww

ちなみに俺のリアルはシンに似ても似つかないバーローですよww

え？俺のリアルなんか聞いてない？サーセンwww

ちなみに最後のあの詠唱なんです、アレもハリス達を貸してくれた人からお借りしました。

で、次回なんです、下手したら前みたいの前中後編になるかもしれません。

携帯で書いてたものなんです、その日その日に1枚1枚投稿したもので・・・酷いと言わざるをえませんww

ホント、修正前にはなかったシーンとか入れまくりですからww

そんなのが原因で、倍になっちゃったんですよー（笑）

それではまた次回（キリッ）

第九話 妖精の女王と換装自在の鎧と剣・前編（前書き）

前回の投稿から一週間以上経過しちゃいました。
サーセン。

修正が予想以上に手間取ったもので・・・

修正前より倍ってほどじゃないですが、結構文字数が増えました。
それでは、前編スタートです。

第九話 妖精の女王と換装自在の鎧と剣・前編

ハセヲの思念との戦いから約半年が経過した。

あれから、本体のハセヲは同化した事によって新たな力を得た事に疑問を思っている。

思念がハセヲだった事を言っていないのだから、当然と言えば当然なのだが。

思念が使っていた能力も不完全だが、受け継いでいた。

だが、第一段階の能力もまだ使えるようで、段階の切り替えが出来るようになった。

どうやら、最初からあった力が第一段階、思念と同化して手に入れた力が第二段階として構成されているらしい。

第一段階のみしか持っていない場合、当然その段階の能力しか使えないが、第二段階では第一段階の能力を含めて、両方の能力を使えるようだ。

――で、現在いる場所は、オリンポス山のふもと近くの村。

ドが付く田舎のために、俺が賞金首になっている事を村人は知らないらしい。

俺としては、知られていないのは幸いとも言える。

村人もいい人ばかりだしな。

ちなみになんでそんなド田舎に来たのかと言うのと、異世界の武器の一つがここにあるという情報が入って来たので、その場所の近くのこの村にやってきたのだ。

とにかく、あの後情報を片っ端から調べて行ってたのだが、全部ガゼばかり。

まあ、そう簡単にご都合主義が発動しないものだ。

今回の情報元は、かなり優れた情報屋からのものなので、少しは信

用できると思っている。

「旅人よ、ここは世間の情報が入ってこない故、世間話でもしてくれんかのう？」

「別にいいが、泊まる所提供してくれないか？
疲れてるんだ。」

「いいじやろう。」

ワシの家で良ければ、泊まっていきなさい。」

村長に交渉した結果、村長の家に泊まる事に。

別に今すぐ目的地に向かってもいいんだが、付いたのが夕方。
今から行くとなると、極寒地獄を覚悟しなければならない。

何より眠い。

あの情報を見て、雷天大壮まで使って飛んできたのだ。

疲労が溜まるのは当然だ。

情報を見た他の奴らも早くても後2、3日掛かるだろうしな。

「さて、今日はここで一泊して明日に備えますか。」

その後だが、特に目立った事はなかったので、省略する事にする。

——翌日。

俺は村長に別れを告げ、村を出る。

そして、現在。

俺はオリンポス山のふもとにいる。

「山登り、開始だぜ。」

ま、山登りって言っても、浮遊術で行くんだけどね。

スタミナがなくなってきたらXブレード^キを変化させればジェット機の如く行けるし。

さすがにこの山の高さはデタラメだし、Xブレード使っているよね？
だって、約25000mだぜ？

エベレストが約7000mくらいだろ？
その3倍以上だぜ？

浮遊だけでも行けるだろうけど、途中で凍え死ぬ、確実に。

それでも夜よりはマシだろうけども、雲を突き抜ければ夜も昼もねえ。

雲突き抜けたら、咸卦法使わないとな・・・

ちなみに伝説の、ってか、今も生きてるらしいんだが、生ける伝説の賞金首は、何でも垂直になっている山の壁をチ●クラで登ったとか。なんとか。

こんな話を聞いた瞬間、確信した。

絶対俺と同じ世界の出身、それもほぼ同じ時代の奴だな・・・と。
後絶対ソイツNA●UTO好きだろ・・・と思った。

ちなみに10年以上前、エヴァと行動を共にしている奴がいると言ったが、それがこの伝説の賞金首らしい。

俺以外にもこの世界で転生者がいる事は予想できたが、まさか原作から600年も前に転生してるとは・・・

ちなみにこの情報は、女神からの情報ではなく、全て俺が集めた情報だ。

文献を調べれば、大方把握できるしな。

んで、現在登山の途中。

浮遊術で順調に上がっているものの、約25000mあるだけあって、全然頂上が見えない。

それから約2時間、浮遊術で上昇をしていると中間地点らしき場所を発見した。

地味に疲労が蓄積され、少しタルくなってきたので、俺はそこで一端休憩する事にした。
もし思念との戦いになったら、万全の体勢で望まないといけないからな。

「はぁ、疲れた」。
25000mって予想以上に長過ぎだわ……」

約25000mというクソ長い山を浮遊術のみで登っている上に、一回も休んでいない。
疲れるのも当然だ。

雷天大壮を使えばいいのだろうが、無駄な魔力を使いたくないし、調整を間違えると確実に宇宙に行っちゃうので、使う気にならない。とりあえず、体力が回復するまで、暇つぶしに念話で話でもする事にした。
俺はホルダーからランダムでカードを引っ張り出し、片っ端から念話を繋げる。

（ようおまいら、元気してるか？）

やっべえ。

約3時間も話をしてしまった件について。

しかも、途中から完全に雑談になってたし。

最終的に20人以上の契約者と各世界にて話をしていました。

複数の世界を超えての念話故、色々なカオスがあった。

朝倉は他の世界の契約者をスクープネタにしようとするし（つかスクープにできるのか?）、ラビもラビでブックマンとして、契約者の事を詳しく調べようとするし、ティーダはキング・オブ・KYなだけに爆弾発言するし。

挙げ句の果てにこっちの世界に来てバトル（喧嘩）を始めるわけで、何だかんだでカオス過ぎました。

でも、それを除けば普通の話だった。

例えると、ネットでチャットをしているようなもの。

まだ契約者はたくさんいるんだけど、無愛想な奴や、向こうの世界で戦ったり、イベントが起きてたりするので、中には2、3回ぐらいしか召喚出来てない契約者もいる。

だが、そういう召喚出来てない奴程強かったりするもので———そのうちの一人に竜種と戦わせてみたら、5分後には細切れにした。

その時は何コイツ怖い、って普通に思ったね。

某雲の守護者に至っては、魔族をフルボッコにする程強かった。

早い話、戦闘民族なんだよ。

ま、某雲の守護者には一回だけ俺が相手をした事がある。

結果は言うまでもなく俺の勝ち。

が、無駄にチートな能力で圧倒したのはいいんだが、召喚する度に戦いを挑まれるようになった訳で……

そういうのがあるため、召喚する時は防御の構えを取るのがお約束

になつてゐる。

つか、いい加減上に行かないとな。

高き的に、そろそろXブレード使ってもいいレベルだな。

さて、と。

やりますか。

俺はXブレード^キを出す。

「行きな！」

そして、思い切りブーメランのように投げる。

すぐにXブレードは俺の元に戻り、戻ってきたXブレードは船に変化していた。

前にも言ったが、この世界じゃ船ではなく飛行物体のようなモンだけどな。

船と化したXブレード^キに乗り、ジェット機の如く――

ではなく、浮遊術で飛んでた時と同じぐらいのスピードで頂上へと移動中。

一応、飛ばしてもいんだが、さっきも言った通り、無駄な体力使いたくねえのよ。

んゝ、あの情報屋の情報の通り、確かに垂直になつてんなあゝ。

これは最低でも浮遊術覚えてないとキツいな。

・・・ん、何だこれ？

垂直になつており、もはや断崖絶壁のような状態になつてゐるこの

山だが、よく見てみると・・・

そこには――――

人の足跡が残ってた。

しかも、一つ一つの足跡が滅茶苦茶深くめり込んでいる。

ちと我流が入ってるからか、踏み込みが雑だな。

てか・・・やっぱしチ●クラで登ったのかよ、あの賞金首。

俺も賞金首だけでも。

さらに1時間後。

現在、既に雲を抜け咸卦法も使用している状態。

その足跡を辿っていったのだが、途中広い平地があり、そこで足跡は途絶え、代わりに激しい戦闘があったと思わせる、戦闘の痕跡があった。

ここがああ賞金首が神と戦ったとされてる場所か・・・

何その神との戦いって？と思った奴が少なからずいると思うが、それは後々話す事にしよう。

やがて――――

「ん？

アレが頂上か？」

肉眼で見ても、山が途切れているのがわかった。

俺は少しだけXブレードのスピードを上げる。

「よし、到着だな。」

そして、頂上に到着した。

さて、ガゼじゃなければこの辺に武器が刺さっているはずなんだが・
・・・見当たらない。

おかしいな・・・やっぱりガゼか？

いやいやいや・・・

そんな訳ない。

ここまで来て何もない訳がない。

だが、もしなかったら、あの情報屋の反応次第でフルボッコにして
やんよ。

今までガゼを掴ませた奴には、心から謝ってる奴には何もしなかった
が、あからさまにバカにした奴や、心が籠ってない奴は、死なな
い程度の一撃をかましてる。

今回は期待値も高い故、後者だった場合、3分の2・5殺しレベル
でフルボッコにする。

ちなみに、後者の情報屋に対する一撃攻撃が噂になり、新たに『情
報屋殺し』の異名がついた。
バラツチキラー

正直言えば、夕映の『世界絵図』で探せば万事解決、だと始めは思
ってたのだが、何故か異世界の武器と思念に関する情報を引っ張り
出せないのだ。

理由としては、異世界の物質や情報には干渉できないのでは、と俺
は考える。

そんな事を考えながらも頂上のあちこちを見渡して見るが――あつ
た。

と言うか、武器ではなく、何故か搭がそびえ立っていた。

これ・・・楽園の搭じゃねえか・・・

『楽園の搭』。

正式名称は『Rシステム』。

それはFAIRY TAILで登場する搭であり、膨大な魔力と一

人の人間を生贄として使い一人を生き返らせる生死に反したものと
言えるものだ。

転生した俺が言える事ではないだろうがな。

しかし、何故樂園の搭がここにあるんだ……？

「あ、そういう事か。

そう考えれば合点がいくな。」

結論から言うと、搭の頂上に武器があるんじゃないのか？
と言う考えに至った。

まあ実際結論に至るまでそんなに時間は掛からなかったのだが。

樂園の搭があると言う事は今回はやっぱりFAIRY TAIL関
連のキャラか？

とにかく、このまま突っ立ってるのもアレだし、中に入るか。

「ふーん、中は結構広いんだな。

正直天井が見えないわー。」

入って早々、かなり広々とした空間。

ここに何か出るフラグが立ってる気がするのは気のせい？

そう思っていると

「浸入者だ！

急いで兵を集めろ！」

一人の雑兵に見つかりました。

気のせいじゃなかったよ。

フラグが立ったよ。

今までもこんな状況で「出るなよく出るなよく」って思った時に限
ってフラグ立ちまくって、フラグ回避が稀にしか出来なかったんだ

よねえ・・・

時には詐称魔法使ってるはずなのにフラグが立って、追われたり喧嘩売られたり。

うん、つまり何が言いたいかと言うと

こういうご都合主義いらねエエエエ！

ガチでこんなフラグ立てるご都合主義& a m p;主人公補正いらないから！

まあ、そんな事愚痴っても仕方ない。

体力温存すんのももうめんどいし、『マギア・エレベア闇の魔法』使いますか。

スタグネット 「術式固定 掌握！」
コンプレクシオー

プロ・アルマティオーネギリタース・フルミニス 術式兵装 疾風迅雷。」

雷天大壮程スピードは速くねえが、それでも雑兵レベルにはほぼ見えんだろう。

つまり、この兵装で十分行ける。

更なる援軍を呼ばれる前に、雑兵へ次々に拳を鳩尾に入れる。

でも雑兵避けながら行くのもアレだしなー・・・

もう面倒くさいから、頂上までの雑兵、全部倒しとくか。

んじゃ、少し省略。

カット。

（10分後）

「オラオラオラア！」

「ヒイヒイヒイ！」

コイツ強過ぎrゲエツフ！」

疾風迅雷のスピードで見つけた雑魚を片っ端から鳩尾に拳を入れ、気絶させていく。

もう階数にして40階、人数にしたら600人くらいは気絶させたんじゃないかな。

ちなみに全部って言ったが、あくまで俺の視界に入った奴限定だ。いちいち部屋の一つ一つなんざ回れるかよ。

そんなんだから当然下からも雑兵の残りが上がってくる訳よ。

「覚悟オオオ！」

「またかよ・・・オラよっと。」

雑兵がまた下から来たため、股間を蹴る。

え、なんで股間を蹴ったかって？

正直鳩尾より股間の方が気絶させるのにはちょうどいいんだよ。まあ下手したら機能しなくなるけども（笑）

「ゲボア！」

雑兵は股間を押さえながら気絶した。

しかし、雑兵とはいえ弱過ぎるだろ。

少しは骨のある奴出て来いや。

思念との戦いのウォーミングアップにすらならん。

とりあえず、これ以上雑兵との戦いは時間の無駄なので、また省略。カット。

（5分後）

「・・・・・・オイオイオイオイオイ。」

俺は今、ある状況に陥っている。

いや、思念のところにたどり着いた訳じゃない。

じゃあ、何故ここからかというところ・・・何でジェネシス・コピー
いるんだよオオオオ！

ここFAIRY TAIL関連しかないんじゃないんじやなかったのオオオ
オオ！？

まあ、何の関係もないジェネシス・コピーが何故かいる訳なのだが・
・

これはヤバイ。

ちなみにジェネシス・コピーのタイプは、ザックスの髪を食ってモ
ンスターと化した時のジェネシス・コピー。

これ危険過ぎだろ・・・今は物理障壁でやり過ごしてるが・・・

・

当然一体だけじゃないんだよね・・・

え、2、30体ぐらい大丈夫だって？

いやいやいや

1000体くらいいるよ。

1体でもザックスが苦戦してたんだぞ・・・

1000体とか俺を殺す気か……
もう千の雷でやっちまうか。
範囲は当然……全体だ！

「食らえ、千の雷！」
キリブル・アストラベ

「ギャアアアアアアアアアアアアア！」

うん、あっさり全滅したわ。

よくよく考えたら、ザックスサンダガとか使えても、千の雷とか純粹な魔法は使えない、というよりサンダガとかマテリアを介してじゃないと使えないタイプだったはずなんだよなー。

大剣といくつかのマテリアだけなら苦戦したのもうなづけるか。

つか千の雷一発で倒せるんなら障壁なんか使わないで初っ端から千の雷使っとけば良かった……

まあ、そんな事考えてる間にも次々へと雑魚が湧いて来てますがな。

「吹っ飛べ、雷の暴風！」
ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス

雑魚を蹴散らしてはまたまた雑魚が湧き、また蹴散らしては更なる雑魚が来る。

正直キリねー。

一応これで3000人は行ってるはずんだけどなー。

階数も一応70階突破してるんだが、さっきのジュネシス・コピー程ではないとはいえ、ちらほらと別タイプも雑兵の中に混じってる。

ハッキリ言って、一番厄介なのはオリジナルとほぼ違いはないけど、銃とか使ってくるタイプ。

原作プレイしてるが、飛んで攻撃するなんて少しはあったかもしれないけど、俺の周りを飛びながらライフとかロケランぶっぱとか原作になかったはずなんですけど。

さっきのように物理障壁してるから多少軽減されてるが、なんか弾全部魔法弾で出来てて、地味に痛いんですけど。

「あー、うざってえ。

それでも食らっとけや！
雷華崩拳！^{らいかほうけん}」

「かばすっ!？」

あらかじめ装填しといった魔法の射手を解放して、雷華崩拳を股間にぶちかます。

イケメンの股間攻撃するのって滅多にできない事だよね（笑）

イケメンが股間押さえながら気絶してるのも滅多に見れないよね（爆）

ぶっちゃけ、現在腹…3股間…7の割合で気絶させてる。

股間に関しては悶絶してるだけのものもあるが、それでもしばらくは立てないのが確定的に明らかである。

勿論雑魚はほぼ全員気絶してるけど。

が……

「…………長ェ！そろそろ頂上に着いてもいいんじゃないか!？」

現在85階くらいまで上がったが、まだまだ最上階に至らない。
一応最上階は100階くらいだと思うのだが、ここまで来ると少し
疲れて来た・・・

もちろん思念との戦いに支障が出ない程度だが。

ちとめんどくせえな・・・魔力容量チートにして良かった・・・
んじゃ、3回目だが省略。

更にカットする者達(爆)

～15分後～

度重なるカット、本当にサーセン。

現地点で95階。

もう少しで100階に着くから、目処がつきやすいように思念登場
のところからにするつもりだったんだが・・・今度はアンジ
ル・コピーが出てきたんだよね・・・

っ！か、これ何てクライシスコア？

何故にアンジール・コピーまで・・・何コレ？

混じったの？

混じっちゃってんの？

決して交じらない筈の2つの話が・・・何故混ざる？

どう考えても全然関係ないだろうがアアアア！

「面倒くせえ！逝けやアアアアアア！」

神ノ雷!」

ジェネシス・コピー程ではなかったが、約500体のアンジール・コピーを神ノ雷で一掃しました。

いやー、出力調整すんの忘れたから、消し飛んでもおかしくないね、うん。

ちなみに勘違いしないで欲しいのは、「無殺者」の異名は全ての存在を殺していないから「無殺者」ではなく、「人」を一人も殺していないから「無殺者」って呼ばれてんだ。

個人的には、アンジール・コピー人型じゃないのしかないし、人外と考えてもいいよね?

さすがに全てを殺さないっていうのは、チート野郎になればなるほど無理な話っすわー。

とにかくスッキリした。

さて、と。

もう少しで武器がある場所に着くんだろうが……一体誰の思念なんだろうな……

ナツ?

いやいや、ないな。

ドラゴンスレイヤー

第一、滅竜魔導士が武器なんて持つてる訳ないし。

じゃあ、グレイ?

いや、コイツもないな。

ナツと同じように武器持つてねえし。

ルーシイか?

でも、星霊の鍵ぐらいしか思い当たらないなあ……アレはアレで結構使えるかもな。

うーん……後は……エルザかな?

アイツの鎧や武器はかなり強力だし。

だが……

もしエルザの思念だとして倒すのはいいんだが、武器はともかく・・・鎧だな。

アレ女用の鎧だしな。

いや、男用に換装とか出来るのかもしれない・・・

ま、とにかく最上階に見に行けばわかるか。

よし、行くか！

く2、3分後く

やっと最上階に辿り着いた。

96く99階に敵は一切いなかったので、問題なく上がった。

俺が今いる所は、原作でジェラルが傍観していた場所。

原作ではジェラルはここで楽園の搭を支配下に置いていた。

それをナツ達がジェラルの企みを阻止するために、ナツがジェラルと戦った最終決戦の場所でもある（詳細は原作10く12巻辺りを読むべし）。

正直、ジェラルの『流星』^{ミレーティア}ってチートじゃね？

『流星』まだ習得してないんだよなあ・・・今度習得してみるか。

あ、脱線サーセン。

奥を見てみると、思念らしき者が座っていた。

緋色のような赤い髪、妖精の尻尾のマークが付いた鎧、そして――
――凛々しい顔。

「やっぱりお前だったか・・・」

『下が騒がしいかと思えば、やはり貴様だったのだな、シン。』

思念が言葉を発する。

つか、やっぱり下に配置された雑兵とジェネシス・コピー、アン

ジールコピーはお前の仕業か。

まあ、普通にいたらありえないけども。

「ああ。」

で、お前が思念っつー事は、お前のソレが武器だな？」

『ふ……その通りだ。』

私に勝てたら、私が持つ鎧と剣、全て貴様に明け渡そう。』

全てですかい。

気前がいいですね姉御。

ただし、原作見て思ったが、『誘惑の鎧』とかなんつーモン買っただアンタ。

まあ、ほとんどが実戦で使えるような鎧だからいいだろうけども。

『誘惑の鎧』とか、女になった時しか使えんだろうが。

「さて、お手柔らかに頼むぜ

エルザ。」

エルザ・スカーレット。

『妖精の尻尾』最強の女と言われている。
ザ・ナイト

騎士による換装で、様々な鎧や武器に変化させる事が出来る。今でこそ活発な性格だが、かつて楽園の搭を建てるための奴隷として働かせられていた頃は、内向的な性格で、その時に受けた拷問により、片目を失明すると言う酷なエピソードがある。

その後、エルザが革命を起こした事によって奴隷のほとんどは自由になったんだが・・・ジェラルルによって、エルザだけが楽園の塔から流されて脱出できた（描写的に誤解を生みかねないんで、11、12巻辺りを参照）。で、原作に至るわけだ。

思念のエルザに関してだが、あのエルザはハセヲの時と同じように、後の姿から具現化された存在である筈。一体どんな力を持っている・・・？

『それでは始めようか。』

「ああ。」

『換装　天輪の鎧。』

・・・換装しただけである程度把握出来た。
今のエルザよりは間違いなく強い。

天輪の鎧の周りの剣が今のエルザより多い。

約10倍はあるな・・・おまけに、全部の剣に魔力が通ってる。
まるで魔法剣みたいな感じになってんな。

つかコイツの剣、魔力を鋭くする事で鋭さが増してやがる・・・
これ俺を殺す気満々だろ・・・
そう思っていると

『天輪・繚乱の剣』

いつの間にか後ろにエルザが移動していた。
チッ、マズい！

レインボーバリア
「虹楯！」

とっさに出した虹楯で、ほとんどの攻撃を無効化したが、少し食ら
っちまった。

しかも、更なる追撃が容赦なく襲って来る。

『斬岩剣！』

「ぐはっ！？」

俺は追撃を不意に受けてしまう。
しかしこの斬岩剣・・・何故コイツが神鳴流の技を使える！？
てかなんで神鳴流を知ってる！？

『ふふ、驚いたか。』

だがまだまだここからだ。

換装 雷帝の鎧。』

まだ何かあんのかよ。

原作でも充分強いレベルなのに、更に強くなんのかよ。
さすがに少しは真面目にやらないとヤベエかもな・・・

スタグネットコンプレクシオ
「千の雷 固定 掌握」

雷速瞬動で間合いを詰めようとした、その時。

『甘いな！』

その程度の兵装で私を捉えられると思っているのか？』

エルザが分身をして来た。

おまけに分身の密度はオリジナルと寸分違わない高度な分身。

そのクオリティで30体以上も作ってやがる・・・

ナギでもせいぜい15体くらいが限界だったのに、随分レベルが高
けえな。

この時点でナギクラスを超えてるのは確定的に明らか。

『縛鎖爆炎陣！』

かなりデカイ手裏剣に札が着いた鎖を付けて投げつけて来る。

しかも分身を更に増やして100人位になってるもんだから、その
攻撃が100倍来る訳で・・・

え、分身の攻撃は計算してるの？と思った奴。

分身の攻撃でも食らう可能性はあんだよ。

そして、大量の鎖で周りを完全に囲まれる。

やっべえ・・・隙間が見えん・・・

初っ端から雷天大壮の弱点を突かれたか・・・

雷天大壮の弱点は2つある。

1つは先行放電ストリーマーによるカウンターを受けやすい事。

もう1つは――――

『ナウマク・サマンダ・ヴァジュラ・ダン・カーン』

思考速度のスピードが速まらない事。
エルザが梵字を使った呪文のような言葉を発した後、周りが大爆発する。

「ぐわあああああ！」

いくら雷化していると言っても、これに対するダメージはハンパない。

先制攻撃の応酬で、多少だがダメージを負ってる。

くっ・・・まさか楓の技まで使えるとは・・・

厄介極まりないな。

ハセヲを見て薄々気付いていたが、エルザを見て確信に変わった。

間違いなく思念達、否、未来の本体達は、ネギまに関する技や魔法を習得していると。

おそらく未来の俺が教えたのだろう。

厄介な事をしてくれるぜ、未来の俺。

ま、それは置いといて、だ。

雷天大壮のままだと厄介だな。

ハセヲの時みたいにフルボッコにされかねん。

スタグネットコンプレクシオン

「千の雷 固定 掌握」

プロ・アルマティオン・ネストラ・ライラ・ホル・スル・デユナメナー

術式兵装 雷天双壮」

これなら常時雷化・思考速度も速くなるアドバンテージが追加され、弱点はほぼなくなる。

何で雷天大壮とかばかり使うかって？

使い勝手がいいからさ。

『雷天双壮か。』

換装 金剛の鎧。』

「超防御力を誇る鎧か。
そこなくちな。」

俺は雷速瞬動で近接戦闘を仕掛ける。

ラカンばりの拳でエルザを殴りつけるも、見る限り効いている様子はない。

固過ぎんだろ。

ラカンばりのパンチを雷の如く叩きつけてるのに、それでこれって固過ぎだろ。

『夕風、来い!』

夕風!?

アレは刹那の武器の筈だろ!?

元々詠春の武器でもあるし、反則度高っ!

『斬魔剣 弐の太刀!』

やっべえ!

だが・・・大丈夫だ、問題ない。

俺は一時的に斬撃が来るであろう部分を切り離す。

雷化は身体構成が雷と化しているから、慣れれば身体の一部を体から離す事も可能なんだ。

さらに、俺は手だけ雷速瞬動を使い、エルザの胸倉を掴む。

そして、残りの身体を再び手とくっつけ――

「ゼロ距離 雷の暴風!」
ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス

ゼロ距離で雷の暴風を発動する。
こっそり装填したのが効いたか・・・

『くっ・・・』

エルザは吹っ飛ぶ。

が、さっきのゼロ距離攻撃がすんでの所で芯をズラされ、ダメージが軽減されてしまってる。

しかし、なかなかやるな・・・さすがエルザの思念。

『ふん、大したものだな・・・』

吹っ飛ばされるとは思ってもいなかったぞ。』

「芯をズラしておきながらよく言うぜ。

エルザよ。

ま、既に一人の思念と戦ってるから、予想は付いてたんだがな。」

芯ズラし出来る時点でチートレベルだね、うん。

普通AAAクラスでも芯ズラしムズいんだぞ？

実際検証した事あるし。

そんな時、実験台にした奴が死の淵に立ちかけたんだよねえ。

勿論助けましたよ？

治療で。

『ふ、アレはギリギリで回避したに過ぎん。

正直、危ないところだった。』

いやいやいや、結構余裕あるように見えたんですけど。

・・・少しは追い込んだって事でいいのかな？

『さすがに貴様相手でこの鎧では不利だな。

それなりの鎧で戦わせてもらおう。

換装 煉獄の鎧。』

オイオイ、早くも煉獄の鎧か・・・

確か原作中でエルザの持つ鎧の中で一番強力な鎧だったはずだろ・・・？

それなりって事は、まだ煉獄の鎧より強力な鎧を持ってるって事か？
しかも夕凧を別の武器に変えない所を見ると、まだ何かあってもおかしくねえ。

・・・ん？

さらに何か武器を出すようだ。
夕凧以外に何を出す気だ？

『来だよ！エクスカリバー！』

出て来たのは――

エクスカリバーだった。

え、何のエクスカリバーだって？

エクスカリバー！今や種類が豊富だからねえ。

今回の奴は魂喰^{ソウルイーター}ver. だね。

うん、アレだ。

数あるエクスカリバーの中で、一番タチが悪いんだよねえ・・・

原作を読んではわかるだろうが、原作を読んだ事のない奴に説明しよう。

ソウルイーターのエクスカリバーは、数あるエクスカリバーの中でもキチンとした自我がある武器だ。

誰との魂の波長でも合い、一般人でも使える程魂の波長が合う（魂の波長に関しては、原作の最初ら辺を読むべし）。

それだけなら、誰でも自分の物にしようとするであろう。

だが、自我がある故に問題がある。

「人としての波長が合わない」事だ。

まず容姿。

剣としての形態は至って普通。

だが、もう一つの姿は、何とも言えない。

普通ソウルイーターの世界では、武器と人の二つの姿を持っているのが普通なのだが、エクスカリバーのもう一つの姿は、初対面なら誰もが「シヨボ。」と言ってしまいうほどのイマイちな姿なのだ。

性格に関してだが、第一印象は「ウザい」。

物凄くウザく、余りのウザさにブラック★スター、キッドが物凄いい顔になり、あのシュタインですら解体を躊躇する程である（その辺は原作参照）。

大きな理由の一つに、そのバカは、自分を使うに当たって、1000の項目をクリアする事で自分を使わせてやるというもので、何様かと思うだろうが、それでも項目が普通だったらまだマシだったのだ。

が、1000の項目全てがムカつく物なのだ。

例えば、項目の一つ「自分についての講演を5時間」と言うものなど、ウザさ極まりない物ばかりで、そのくせ人の話は聞かないで、尚且つこっちが話そうとすれば「ヴァカめ」などと遮り、もうウザい、怒りを通り越して、殺意を覚えるレベルなのだ。

今まで俺の知る限り、コイツのウザさに耐え、1000の項目を難なくこなしたのは、ヒーロと言うへっぽこ職人のみ。

だが、くしゃみが何回も繰り返す所が気に入らなかったらしく、結局元の場所に戻した。

しかし何故にくしゃみを何回も繰り返すだけで戻したのか・・・皆

目検討もつかん。

エクスカリバーがどれだけウザいかについての説明長くなり過ぎた。これもどれだけウザいを理解してもらうためだ。

正直、俺もソウルイーター見てた時、自分に言われてる訳じゃないのに何故か殺意が沸いたんだよなあ・・・

つかエルザは一体どうやってあのバカを使ってたんだ？

絶対一回は殺意を覚えてるはずだが・・・

「オイエルザ、お前どうやってそれ使いこなしてるんだ？

ソイツ黙らせるには、何かしないと無理なはずだ。」

絶対なんかしないとそのバカを黙らすのは不可能だ。

何使ってるんだ・・・？

『ん？ そうだな、一応ガムも「ヴァカめ！」・・・・・・そんなに死にたいか・・・』

約束を忘れたのか・・・？』

「あ、ついついもののクセで・・・すんませえええん！」

『そうか、それならいい。』

ところでシン、話の続きだが、一応戦闘時にはずっとガムテープを貼って喋らせないようにしてる。

が、今回は付け忘れた故こうなった「そ、その者よ！

私を助けてくr『またもや遮るとは・・・やはり死にたいらしいな・・・』

「い、いえ！

別にそう言うわけでh・・・ギャアアアアアア！」

・・・うん。

ある程度把握した。

これ、調k・・・教育してるな。

それでも学習しないエクスカリバーさんパネエっす。

おお、うぜえうぜえ。

つか、何かエルザ黒いんですけど・・・

でもなく・・・そんな事を抜きにしても、エクスカリバーを手に入
れてるって事は、かなりヤバいな・・・

エクスカリバーを持つ者は、光の翼を纏い、瞬間移動すら可能にし、
一振りで空間を切り裂く事が出来るんだ・・・ソウルイーター最
強の武器と言っても過言ではない。

エクスカリバーの制裁も終わったのか、既に光の翼が生えてやがる
し・・・

こりゃ少し飛ばさないとマズいかもしんないな・・・

『はああ！』

考えてる間にもエルザは剣を思い切り振る。

振った事で、斬撃が当然飛んでくる訳だが・・・

あの斬撃、周りの空間が歪んでる気がするんだが大丈夫か？

全然大丈夫じゃない、大問題だ。

何自問自答してんだ俺。

さすがにアレ食らったらヤバイよなあ・・・

エンシス・エクセクエンス スタグネット

「断罪の剣×3 固定 三重掌握

プロ・アルマティオーたんざいらいてい

術式兵装 断罪雷帝」

自分自身に断罪の剣を取り込み、腕を振り斬撃を放つ。

そして、ぶつかり合う———と思ったが

「くっ、斬撃を吸収しただと!？」

なんと、ぶつかり合った瞬間、こちらの斬撃が吸収されたのだ。
夕風も反則だが、コレは完全にドがつく反則だアアアア!
とにかく、雷速瞬動で回避をする———が

『甘いな、シン。』

エクスカリバーの能力を忘れたのか?』

しまった、ヤベエ。

エクスカリバーには瞬間移動が出来るんだ。

どれだけ瞬間移動が厄介か説明しよう。

俺は現在雷化しているので、雷速で行ける。

雷速だと早くても秒速約150km。

だが、瞬間移動はそんなのに関係なくどんな遠くの場所でもすぐに移動出来るテラチート能力。

雷のスピードも瞬間移動の前では、ほぼ対抗の策がないのだ。

ハセヲの時は光の弱点を見つけたから何とかだったが・・・コレはキツ過ぎる。

普通なら万策尽きたと言わざるをえないだろう。

だが、俺には・・・『アレ』がある!

「よし・・・とおきを使うか。」

『とおっておきだと?』

貴様、何をする気だ?』

「俺にはまだまだ腐る程手はある。」

そのうちの一つを使うだけさ。」

手はたくさんあるのだが、瞬間移動に対抗するには『アレ』ぐらいしか思いつかない。

瞬間移動習得には時間が掛かるのは明らかだしな。

『アレ』さえ見つければ、瞬間移動に対応出来る！

「さて、どこに入れてたかな？」

確か、ボックス匣にしまってたはずなんだよな・・・」

『アレ』を探している途中だが、どこに入れたかを忘れたため、攻撃をよけながら探している途中だ。

反撃しようにも、あのアホ（エクスカリバー）の攻撃により、攻撃しても吸収されてしまう。

近距離に持ち込めば何とかなるだろうが、煉獄の鎧越しに拳を叩きつけても威力が軽減されてしまう。

あー、マジで『アレ』どこにしまったっけ？

早いところ見つけないと、マジで詰む。

しかしエルザは容赦なく瞬間移動をしてくるから、探すのに時間を割きすぎるのも問題だ。

仕方ねえ、右でエルザの相手、左で『アレ』を探すしかねえ。

部分的になら雷速で早く探せるはずだ。

「万死を刻みつける鎌よ、今その姿を現せ 万死ヲ刻ム影！」

俺は万死ヲ刻ム影を右手に持ち、エルザの攻撃に対応する。

因みに上の詠唱は別に言う必要はない。

言っただけである。

だってかっこのいい詠唱って憧れるじゃん。

『ふ、アイツの鎌か。』

「ああ、かなり強かったがな。」

前に言った通り、本気を出せば完全消滅させる事が出来る。

だが、そんな事はしないし、する気もならん。

クソ、まだ『アレ』が見つからない・・・

速く見つけないとさすがに俺でもヤバイ。

並の技じゃ吸収されちまう。

・・・これならどうだ！？

「魔神狩り！」

魔神狩りを発動させる。

しかし、エルザに当たりそうなところで、その場から消えた。

否——

『生憎だが、私には瞬間移動がある。

そんなものは効かない。』

移動したのだ。

あっさり避けてくれるな・・・本当に瞬間移動は反則過ぎる。

クソ・・・まだ見つからないのか・・・

『アレ』がないとマジで詰む！

・・・ん？

こ・・・これは・・・来た！

遂に見つけた！

『コレ』さえあれば、瞬間移動など怖くねえ！

「よし・・・これで瞬間移動に対抗出来るぜ。」

エルザ、今までの借り、ここで返してやんよ！」

『何?』

「待たせたな、これが策だ！」

直後、俺はエルザの後ろに回りこむ。

『!?!』

おーおー、ビックリしてんな。

ま、当然か。

瞬間移動できるとは思えないよな。

あいにく、俺の策は瞬間移動じゃねえよ。

『くっ』

また瞬間移動したか。

だが・・・俺もやり方こそ違えど、出来るんだよ。

まぐれとかじゃないってとこ、見せてやんぜ。

そして、俺の背後に回ったエルザのさらに背後に移動する。

さらにまたエルザが瞬間移動を使おうとするが・・・させんよ!

肘を叩き込み、蹴り上げる。

そして――

「覇王浙江!」
はおうせいこう

『く、換そ・・・かはあああ!』

拳をエルザに叩き込む。

異常なスピードで吹き飛び、壁に叩つけられる。

やはり中国拳法はマジで使える。

で、瞬間移動に対抗する手段、それは『時間』である。

ただ、流石に今の俺自身でも時間移動は出来ない。

俺『自身』・・・はな。

この『カシオペア ver. 完全版』があれば、自由自在に時間移動が可能になる。

時間移動により、瞬間移動の対策が出来たようになった訳だ。

ちなみに、このカシオペアは超鈴音の情報を元に自作したものだ。
チャオ リンシエン

これで『赤き翼』アラブルの時代、原作の時代にもひとつ飛びできるが、そんな事をしたら、つまらん。

武器集めもあるし、何より———刺激があるからこそ人生は楽しめるってものだ。

知らない時代を歩むのも悪くないのさ。

『・・・一体何が起きた?』

エルザが壁から抜け出す。

まあ、普通はそうなるわな。

時間移動は瞬間移動とほぼ似たようなもの。

おそらくこいつには、瞬間移動したかのようにしか見えていないだろう。

はつきり言うと、時間移動>瞬間移動って事だ。

しかしエルザは壁に叩きつけられたダメージをもとめせず構えを取り、夕風とエクスカリバーを振り上げる。

『斬魔剣 ざんまけん 参の太刀!』

参の太刀!?

そんなの聞いた事ねえぞ？

退魔だけではなくエクスカリバーの斬撃も混ざってるから、ちとヤバイな……

ここは……世界の鍵をこじ開ける、この剣で行くか！

「Xブレードよ、来い！」

Xブレードを出し、俺も構えを取る。

そして、これに対抗する技を――

「時雨蒼燕流しぐれそうえんりゅう 総集奥義そうしゅうおうぎ――

――時雨之化。じうのか」

出す。

第九話 妖精の女王と換装自在の鎧と剣・前編（後書き）

中途半端な切り方でサーセン。

まだまだ未熟なもので・・・

後編は、前みたいにならな中編、後編に分ける可能性があります。
文字数次第で。

つか、フラグになるかも・・・

中編、後編に分けた場合、前回のようになら一気に上げるのではなく、
1日間隔を空けて投稿させてもらいます。

正直、その方が読者の数も増え（ry

ひとまず、お気に入り登録するなら、根気よく待つ事をおすすめ
します。

作者はこのとおり、修正に時間がかかるタイプなので・・・（笑）

第十話 妖精の女王と換装自在の鎧と剣・中編（前書き）

前回の投稿から約2週間・・・お待たせしました。

修正に思ったより時間が掛かり、まともな形にするのに時間が掛かりました。

結果的に、修正前の文字数の倍以上になりました・・・（笑）

そのため、予告通り中編、後編に分ける事にします。

それでは、どうぞ。

第十話 妖精の女王と換装自在の鎧と剣・中編

『な．．．．に．．．？』

驚くのも無理はないだろう。

俺の時雨之化じうのかが斬魔劍ざんまけん 参の太刀とぶつかり合った瞬間、斬撃がほとんど止まっているのだから。

だが、その動揺もすぐになくなり、すぐさま瞬間移動でこちらに来る。

俺もすぐさまカシオペアで時間移動をし、背後へ回る。

「魔法の射手 集束・氷の900矢 凍結崩拳とうけつほうけん！」

『がっ．．．はあっ！』

霸王浙江はおうせいじうでかなりダメージを負ったはずだからだろうな．．．

反応するのが遅れたらしい。

ちなみに、あの凍結崩拳はただの技じゃない。

『うっ．．．何！？』

何故凍りつき始めている！？』

あの凍結崩拳とうけつほうけんは、打ち込む瞬間に晴の炎を注入しておいた特製型だ。

活性している故に、凍り付かせる効果が追加されてるんだ。

俺は更に反撃を連発する。

アタック・デイ・スクアール

「鯨衝撃！」

『はっ！？』

夕風を持つ方の手にXブレード^キを叩きつける。
その影響で、エルザの片腕は使いものにならなくなる。
体は凍りつきかけてる上に片腕はほぼ使い物にならない。
後は、エクスカリバーを封じればほぼ勝ったも同然だ。

『く……あの鎧を使いたくなかったが……』

あの鎧？

煉獄の鎧より強力な鎧を持ってるのか？

もし持ってるならそれだけでも厄介だぞ……

確か妖精の鎧とかあったはずだが、それじゃなく、別の鎧を使うだ
と？

一体今度で何で来る……？

『換装 闘神の鎧。』

予想はしてたが、見た事のない鎧へと換装する。

今までとは桁違いの鎧なのがよくわかる。

そして、エクスカリバーを頭の上に構えた。

『エクスカリバーよ、俺と一つになれ。』

そう言うのと、エクスカリバーは手に介して鎧と一つになっていき、

瞬く間に鎧の形状も変化する。

まさかの同化ですかい。

地味に厄介やでえ……これじゃエクスカリバーを叩き落せない
じゃないか。

ただでさえテラチートだったのにあの鎧と同化するなんて……得
体が知れんものになり過ぎだろjk。

『魔法の射手 集束・狭間の千五百矢』
サギタ・マギカ コンゲルゲンディア

狭間？

聞いた事ない属性の魔法の射手だな。

それを集束し、剣の形に変化していくわけだが……
何冷静に説明してるんだ俺。

つか、アレはやベエ！

『狭間崩剣！』
はざまほうけん

完全に油断した。

エルザの剣が俺の腹を貫く。

「ぐはっ……！？」

俺は吐血する。

ヤバいのはわかっていたが、予想以上の威力だ。
もうちょい横だったら急所に入ってたな……

「いってえ……治癒。」
クーラ

『なんだ、狭間崩剣程度もかわせないのか。』
はざまほうけん

俺を使うくらいだからかなりの強者かと思えば、この程度か……

』

ん？

口調が変化してやがる。

俺の気のせいかもしれないが……

まさかエルザ、人格が変わってる……？

「まさかとは思うが、お前、人格が変化してるのか？」

『・・・ああ。』

俺はこの鎧に潜む人格だが、それがどうかしたか？

あいにく、弱い奴に興味はなくてな・・・すぐに終わらせてやるよ。
』

うわー、めんどくせー。

激しくめんどくせー。

とにかくこれを見る限り、間違いなく人格が変化してる。

エルザがああ鎧を使い渋った理由はコレか。

この鎧は、使う者の人格に代わって、鎧の人格が対象とした相手を倒すっつー物なんだろう。

つまり、一言で言うところ、いわく付きの鎧ってところだな。

一応俺ならああ鎧を使いこなす自信はある。

とりあえず、使っている奴を倒せば、ああ鎧の人格から解放されるだろう。

「面倒だけど・・・」

7割くらいで行ってみますか。」

『・・・死にな！』

鎧の人格がそう言った瞬間、こちらに瞬間移動をし、攻撃を仕掛けてくる。

すかさずそれをかわす。

「えーと、ボッポックス匣、つと。」

鎧の人格の猛攻を凌ぎながら、腰に付いた匣ボックスの一つを取り出す。ふう、今度は早く見つかって良かった！。さすがにカシオペアの時ほど時間が割けなかったからな。

「開匣かいこう」

ドシュ

取り出した匣ボックスから、虹に輝く幻獣——不死鳥を出す。

「フエニケ・デイ・アルコバレノ
「虹不死鳥！」」

うろ覚えのイタリア語だが、読み方合ってるだろうか・・・？
一応冒頭に出てたアニマル匣ボックスがコレだ。

白蘭の白龍と同じように、俺の一点物だ。

「よし、サポート頼むぜ！」

「・・・了解。」

ん、何で喋れるかって？

どうやらそこら辺も特殊らしくて、多分あの女神がやったんだと思う。

転生前、人型の匣兵器ボックスや、念話で話をするアニマル匣ボックスが出てる小説は見たことあるが、正直ちゃんと喋れるアニマル匣ボックスは聞いた事がない。

俺の見た中でありそうでなかったんだよねあゝ、そういう小説。ちなみに、コイツの名前はアビスである。

深淵を意味する言葉で、厨二がそそれやすい名前だと思うが、どう思う？

『ハッ、そんな鳥出したところで、俺に勝てると思ってるのか？
笑わせる。』

まずはその鳥から倒させてもらおうとするか。』

対象が俺からアビスに変更される。

ちっ、狭間崩剣はざまほうけんが俺を貫いたからってナメ過ぎじゃねえか？

「あなた 私 勝利 皆無。」

アビスはそう発する。

えー、何て言ってるかというところ「あなたが私に勝つ事は出来ない」
的な事を言ってる。

アビスどこぞの風神みたいに最低限の言葉しか発しないんだよ。

おまけに、他のアニマルボックスとは違って、感情表現も乏しい。

ネギまのキャラに例えれば、初期の茶々丸みたいなもんだ。

まあ、何年もいるからこそ、一応意志の疎通はできるんだけどな。

『ナメた事を言ってくれるじゃねえか・・・夕風。』

鎧は俺が叩き落した夕風を自分の手に寄せ付け、持ち直す。

しかもさっき俺が鯨衝撃アタック・デイ・スクアアローを食らわせた方の腕で。

いくら何でも人格が変化したとは言え、痛みはなくならない、
なくなるはずがない。

スクアアローアタック・デイ・スクアアローの鯨衝撃がバットで殴られるより強いぐらいなら、俺の
鯨衝撃アタック・デイ・スクアアローは、車にぶつかる衝撃より強い。

普通の状態であれば、例えエルザであっても間違いなく手首などが
粉碎骨折をする位の威力。

煉獄の鎧を着けてたから、ある程度ダメージを軽減してるだろうが、

それでもスクアーロ以上の威力があるはずだ。
今でも腕が激痛に見舞われているだろう。

だが、それにも関わらず平然としている。

やはりあの鎧の人格か・・・あの鎧がエルザの人格を潜め、体を無理矢理動かしている。

鎧の人格が痛がらないのを見る限り、痛覚の類はなさそうだな。

そして鎧の人格はさらに――

『来な！』

アルテマウエポン！』

アルテマウエポンを空いている片手から引っ張り出した。

しかし・・・何故かアルテマウエポンが釘バットに見えるのは俺の気のせいかな・・・？

絶対気のせいだな。

つか、幻聴も聞こえる気が・・・何か「片翼の天使」的な・・・アレだよ、アレ。

空耳とかで「セフィロス」の所を何故か「田代」とかに変換されちゃったりする、アレだよ。

10年以上経ってもこういうのは鮮明過ぎるほど思い出しやすいな
ー（笑）

後、耳元で「絶望を送ろうか？（状況的な意味で）」とかの明らかにセフィロスが横にいた気をさせる幻聴が・・・何なんだろうか、コレは。

俺が元ニコ厨だからなのか？

久しぶりだぞ、こんなアホみたいな幻聴聞こえんの。

俺ってばとんでもないシリアスブレイクね（爆）

てかヤベ。

また話が大きく逸れたよバーロー。
全く、すぐにネタに走ってしまうわ、ホント。

『思ったよりもこの鳥・・・厄介だな。
奴のところへ行けん・・・!』

「私 マスター 守護」

現在の状況だが、アビスとエルザが激しい戦いをしている途中である。

アビスの言葉を翻訳すると「私はマスターを守る」的な発言をしているっぽい。

ちなみに釘バットに見えたアルテマウエポンは、至って普通のアルテマウエポンだった。

どうやら本当に幻覚や幻聴を聞いてたようだ。
んじゃ、アレをやりますか。

「アビス!アレをやるぞ!」

「・・・了解。」

『何をする気か知らんが、やらせん!』

当然何かするとなると、止めに入るのがお約束。

だが、なんだかんだでその邪魔をくぐり、成功に至るのもまたお約束。

ちよいと普通の魔法使いじゃ出来ん芸当をやらせてもらいますか。

「エームツタム解放 射抜け!

ヨウイス・テンベスター・セウリクリエンス
雷の暴風 連弾・3矢!」

ついさっき装填したばかりの雷の暴風を解放する。
が、それだけではなく、魔法の射手のように3つの雷の暴風を発射する。

『雷の暴風か。』

その程度、いくらでも――』

「残念だが、それだけじゃねえよ。」

『何?』

「こういう事さ。」

コンゲルゲンティア
集束!」

遠隔操作による雷の暴風の集束。

これを使えるようにしたのは、遠隔操作は操気弾の応用、連弾、集束は魔法の射手を元に行っている。

ホントこの目にはめっちゃ助けてもらってるわー。

『なるほど・・・その目で通常なら不可能であろう方法を使えるわけか・・・だが、忘れたか?』

俺には瞬間移動がある事を。』

「・・・お前、さっきまでの戦い見てねえから知らねえんだろ? その対抗策がある事を。」

『どういう策かは知らんが、ハツタリならほどほど』

ここでカシオペアの能力の一つを発動する。

もうコイツと話すんのタルいわ。

今発動した能力は『擬似時間停止』。

擬似的に時間を止める力だ。

擬似的にとは言え、世界の構成滅茶苦茶になりかねない力だよなあ・

・・・コレ。

瞬間移動に対抗する術がこれしかねえから仕方ねえけど。

・・・んじゃ、集束した雷の暴風を、鎧の近くに移動させますか。
俺は集束した雷の暴風を、手で掴む。

え、何故触れられるんだって？

時間が停止しているから、岩の固まりみたいに触ったりする事が出来るのよ。

『擬似時間停止』だが、原作では2秒程度しか持たなかったのだが、完全版は魔力の持つ限り継続出来る。

が、時間移動は秒単位でしか使わない分、『擬似時間停止』は長い間止めるため、かなり魔力を食う。

ナギレベルでも3〜5分が限界だろう。

そして俺も、支障をきたさないレベルとなると、約10分が限界だ。魔力容量もこの10年で2倍程度に増えたから、それくらい持つんだがな。

とりま、更に追加攻撃作つとくか。

ヨウイス・テンペスターズ・フルダグネン
「雷の暴風×9 固定 連弾化。」

ヨウイス・テンペスターズ・ウルグリエンス
雷の暴風 連弾・9矢。

『限定擬似時間停止』発動。

ヨウイス・テンペスターズ・ウルグリエンス コンゲルゲンティア
対象・雷の暴風 連弾・9矢 集束×3。」

連弾化し、集束させた雷の暴風を『限定擬似時間停止』を発動し、時を止めた。

これは完全なオリジナル能力。

作ってる途中に追加しておいたモンだ。

10年の年月で、ある程度オツムが良くなったから作れたんだがな。

「さて、これも手で掴んで・・・っと。

うつ・・・さすがに重い・・・」

先程集束したのと合わせて約4つ。

一つ辺りkg単位で表すと約100kg。

合計400kgを持っている計算になる。
かんかほう

咸卦法を発動しているとは言え、地味に重いっす。

集束した雷の暴風を鎧の人格の周りに配置する。

時間が止まっているため、どこに置いても落下する事はない。

よし、こんな感じでいいかな。

デイスブルサーティオー
「解除。」

俺は『疑似時間停止』を解除する。

『・・・にしとおk・・・ごはっ!』

直後、四方に配置した雷の暴風が鎧の人格に直撃する。

いい具合に直撃したなあ・・・

話の途中で止めてたから、避けられないのはほぼ確定的なのよね。

ちなみに鎧だが、直撃した時に煙が舞ったので、あんまりどうなっ
たかが見えない。

下に落ちてないのは確かなんだが・・・正直本人格じゃない状態で
倒すのは気が進まねえ。

『・・・ちっ、瞬間移動する間もなく攻撃が当たるとは・・・

テメエ、何かしやがったな・・・」

「見ればわかるだろ？」

瞬間移動を超えるのは一つしかない。」

『時間移動か・・・！』

「ご名答。」

自我を持つてゐる鎧だけに、理解するのも早いな。

さっきも言ったが基本、スピードの優劣はこうなっている。

音速<雷速<光速《《《《《《《《《《《《《《《《瞬間移動<時間移動

細かいのがいくつか入るだろうが、要約すればこうなる。

んな事より、そろそろアレやっとなかないとな。

「アビス、来い！」

「了解。」

直後、アビスが塊に変化し、俺の元へと近付く。

そしてそれを――

コンプレクショ―
「掌握！」

取り込む。

俺の背中には翼が生え、体は虹に包まれる。

プロ・アルマティオーネ
ななしきしなず
「術式兵装――――七色不死。」

おし、ご都合主義発動してる、ラッキー。

これを思いついたのは約1年ぐらい前。

試しにやってみたところ、見事成功に至る。

アニマル匣ボックスの場合、炎で動いているため、言わば死ぬ気の炎の固まりなのだ。

これにより、太陰道タイインドウによる死ぬ気の炎の吸収する方法を思いついた。2度目の実践が出来たのは、あのソラ& amp; ツナとのバトルの時だったけどな。

「嵐特化」

虹の炎を嵐属性に特化し、拳を握る。
そして、力を溜める。

『力が上がったからって、俺に勝てると思ってるのか？
魔法サギタ・マギセリウスの射手 連弾・狭間の三千矢！
これを避けられるモンなら避けてみな！』

アビスを掌握した事によって、対象を再び俺に変え、攻撃を仕掛けてくる。

鎧の人格が先程の倍ある魔法の射手を集束するわけでもなく、四方八方に展開させる。

フェイトとの最終決戦のネギが発する魔法の射手が大魔法と大差がなかったように、この鎧の人格が発した魔法の射手は、周りの壁にドドドドと穴を開けていく。

おまけに当然ネギより強い故に威力が厄介極まりないものになっている。

一矢一矢が狭間崩剣より異常な魔力を煉られているため、並レベルの魔法使いが当たれば即死するレベルだ。

俺は次々へと来る魔法の射手を避けていく。

時間移動は使わないのかと思うだろうが、さっきほどホイホイ使うのは珍しい事なのだ。

たまたま今回瞬間移動という厄介な思念が相手だったからであって、相当危険な状況、相手でなければ使用する気は一切ないと言ってもいい。

なんだかんだで真っ向勝負にこだわっている俺がいるんだよ、簡潔に言うとな。

時間移動なんて、真っ向勝負には邪魔なだけだ。

しかし、いい加減天狗っ鼻をへし折ってやりたい所だな・・・正直、未だに余裕こいてそうな感じが腹立つんだよ。

俺は全身に雷属性に特化。

雷速瞬動はもちろん、雷属性の特性も追加されている。

雷の特性は「硬化」。

たとえば、瞬間移動で殴りつけられようが、剣を付きたてようが、滅多な打撃でない限り俺の体は「硬化」によってダメージは軽減される。

魔法の射手を避けている間にも、俺の手は嵐属性に特化されていく。

・・・よし、そろそろ頃合だな。

雷速瞬動で鎧の人格の懐へと潜り込む。

『なっ・・・!?!?』

想定外だったのか、鎧の人格は面食らっていた。

いつまでも慢心してっからそうなんだよ。

これで少しは俺の認識を改めて欲しい・・・ねっ！

「爆せろ。

ヴォルカニック・ブレイク！」

嵐属性が極限にまでに特化された拳を鎧に叩き込む。

REBORNを見てる奴なら知っての通り、嵐の特性は「分解」。
それを極限に特化した拳を叩き込んだのだから、とても無事では済まない。

当然、特性が作用し、鎧のヒビが少しづつではあるが広がる。

一応、この技はツナのバーニングアクセルと要領は同じだ。

・・・パターンは違うけど、ハセヲに爆裂掌帝を食らわせた時と
なんか似てるな。

こんな偶然ってあるのか？

鎧の人格は多少吹き飛ばされかけるものの、壁にぶつかる寸前に瞬間移動を使用し、難を逃れる。

あの至近距離だ、確実にダメージは与えてるはず。

『・・・・・・・・っ』

鎧の人格を見ると、叩き込んだ場所を中心に、全体にヒビが先程より広い範囲に至っている。

エルザの体自体はそれほどダメージは受けてないようだが、ふらついているのは本体である鎧は半壊しかけているからだろう。

よし、確実に鎧だけだがダメージを受けてるな。

追撃、開始だ。

はつきり言って、この能力実戦で使うのは初めてだな・・・

ま、不定期だが一応実践は怠ってないから問題ないだろう。

すでに同化しているアビスに指示を出す。

「アビス カンピオ・フォルマ 形態変化 モード・アタック 攻撃モード」

そう発すると、それまで纏っていた炎が更なる変化を遂げる。
纏う炎はさらに燃え盛り、翼をも炎に変換される。
爛々と燃え盛るその炎。

その姿は——まさに幻想そのもの。

「『浄化の炎』」

浄化の炎。

それはすべてを浄化する聖なる炎。

使用者の判断によって、浄化するものも変化する。

とは言っても、虹属性を持ってなければ使用不可なんだけどな。
とりあえず、この炎であの鎧の支配からエルザを引き剥がす。

あの鎧の人格といつまでも戦う訳にもいかんしな。

『なんだアレは・・・マズい!』

流石にこれには危険と察したか。

だが、もう遅せえ!

俺は浄化の炎を手を集めていく。

浄化の炎はやがて、剣の形を取る。

「『浄化の炎』ver. 剣」

『チッ、マズい!』

俺でもアレは対処しきれん!

こうなったら『枷』を外すしか・・・!』

ご都合主義なのかテンプレなのか、随分いい情報を暴露するね、お前さん。

聞く限り、リミッターでも外そうとしてるのは言うまでもなさそう

だ。

てか・・・んな事させるか！

「浄化 大空特化——MODE Cielo dell'armonia（調和の大空）。」

浄化の炎を大空に特化させる。

浄化の炎に関してだが、通常の特化とこの特化は随分違いがある。

言うまでもないが、純度、レベルが桁違いに上がっているのだ。

その純度はもはや、目視がしにくい半透明のレベル。

半透明でありながら、爛々と幻想的な炎を常時放てる俺はすでに極みに近い状態だろう。

ちなみにイタリア語に関してだが、REBORN好きが高じて、グーグル先生とかでggつてた。

イタリア語って、なんかカッコイイよね！的な厨二思考が当時の頭にあったためである。

おお、「脱線乙」という声が聞こえてきそうだわー。

浄化の炎で構成した剣に更なる炎を注ぎ込む。

初めは日本刀のような形状だったが、だんだん変化していき、やがて大剣の形状になる。

それを片腕でぶんぶん振り回す俺。

身体強化してるとはいえ、ついに俺もクラウドみたいにブンブン振り回せるようになったかー・・・

すごく・・・嬉しいです、ガチで。

そんな事は置いといて。

俺は鎧の人格に攻撃を仕掛ける。

「七色斬々！」
ななしきざんざん

『God wall（神壁）！』

斬撃を連発して放つ。

しかし、かなり強力そうな物理障壁だな。

だが・・・例え物理障壁を出したとしても、無駄だ！

俺が放った斬撃は物理障壁をいとも簡単に貫く。

そして、鎧の人格に斬撃が当たりそうになった、その時――

『The wrath of the death（死の逆鱗）』

鎧の人格が広範囲に渡る黒煙を放ったのだ。

マズっ・・・！

届かない範囲に避けようとしたが――

『残念だが、それは想定内だ！』

俺の後ろに瞬間移動してくる鎧の人格。

直後、後ろに衝撃が走る。

その衝撃で、黒煙の中へと入り込んでしまう。

チッ・・・まともに食らってしまった！

く・・・苦しい・・・！

ヤバイ・・・逝きそうだ・・・

必死に抵抗をするが、次第に抵抗力を失っていき、俺は意識を失う

――何故……だ……

俺は……死んだ筈じゃ……ない……の……か？

いや……アレを食らって死なない訳がない。

ならば何故……まだ痛みがある？

痛みがあると言う事はまだ生きている……と言う事……

……
そんなのは不死でない限り……有り得な……ん？

『The wrath of the death (死の逆鱗) が
直撃したんだ……復活はしないだろう。』

「おい……待てよ……」

ああ……忘れてたよ……

なんで忘れてたんだろうなあ……

『なんだと！？』

あの技は死に至らしめる技！

それを食らって、何故生きている！？』

俺が……不老不死だって事を。

ついさっきまで覚えてたはずなのに、何故か忘れてるとは……
戦いや脱線ばかりの思考だったから忘れてたのか、意味不明のテン

ブレなのか・・・よくわからないね。

しかし、俺が不老不死だって事を知らないのはおかしいな・・・
長年思念と共にいたから記憶が磨耗したか、それとも鎧が未来の俺
に直面した事がないのか・・・

いずれにせよ、わかっていないのは確かだ。

さあて、反撃———開始だ。

第十話 妖精の女王と換装自在の鎧と剣・中編（後書き）

・・・正直、駄文な感じが否めない。

出来るだけ追加描写を加えましたが、満足行くものかというところ、そうは言いがたいですね。

修正前と修正後で鎧の性格違いますし（笑）

こんな駄文でも楽しく読んで頂ければ嬉しいです。

予告通り、後編に関しては明日投稿するつもりです。

早いところ3人目の修正にとりかからないとなーww

ところで、これを見た読者の方々に質問です。

1. もし自分が転生するなら、どの世界、能力、容姿がいいですか？
 2. シンや他のキャラクター達の技の一覧を書いた方がいいですか？
- 2については書いた方がいいなら○、必要ないなら×でおねがいします。

自分ならやっぱりシンみたいになりたいですねーww

この小説のようにうまく行くかはともかく、ねww

それでは、また次回（明日）お会いしましょうーww

第十一話 妖精の女王と換装自在の剣と鎧・後編（前書き）

予告通り、投稿します。

中編投稿したらまさかの4500PV、400ユニーク越え・・・

（汗）

投稿前とは天と地ほどの差です・・・

ただ、ユニークのちゃんとした数をさっき見てみたら444だったんですよ。

縁起悪過ぎやん・・・

俺は毎日投稿できる人が羨ましい・・・

下地を早く積み重ねられないから、閲覧やクロスが来ないんですよ・・・（泣）

誰か俺に文才をください（切実）

第十一話 妖精の女王と換装自在の剣と鎧・後編

「浄化 雲 霧特化 MODE Nebbia el a nub
e dell'aumento di costruzione（
増殖構築の霧雲）」

雲と霧を特化させる。

フフフ・・・この組み合わせはある意味凶悪だぜ・・・？

なんか悪役みたいなんですけどっていう疑問はなしでお願いします、
ハイ。

『フ・・・『枷』の解除が完了した・・・』

リミッターの解除が完了してしまったようだな・・・

どうやら、俺がああ技を食らって倒れている間にも、解除は進んで
いたらしい。

ちと、めんどくさくなりそうだ・・・鎧のヒビもほぼ修復されち
まっているし。

『どうやらナメ過ぎたようだ・・・お前に本当の死をくれてやるぜ・
・・・』

うん、ぶっちゃけ本当の死をもらうのは無理っすな。

不老不死を死なせるなら、消滅くらいしかないっしょ。

まあ、不老不死キャラで消滅に至った奴を見たことがないのでなん
とも言えんが。

「フフツ・・・お前、俺を死なせる以前に俺は不老不死だぞ？
死ぬ訳ないだろう。」

テメエには構築と増殖のコンボを見せてやんよ。」

『ほう、なら見せてみるよ。
俺もそれに答えてやろう。』

鎧の人格が構えを取る。

後悔しても知らんぞ？

俺はイメージを高め、自らの有幻覚を作り出す。

更に有幻覚を雲の性質「増殖」で有幻覚を増殖する。

『ふん、全て叩き潰してやる。

魔法の射手 サギタ・マギカングルゲンティア 集束・勝利の二千矢 A heroic fist（
英雄の拳）！』

先程までの魔法の射手とは打って変わって、光輝く魔法の射手を集束させる鎧の人格。

そして、鎧の人格は俺の有幻覚全てに拳を叩き出す。

数打ちや当たる、とでも考えてるんだろう。

が・・・甘いな、甘過ぎる。

「残念だな。

全部・・・幻覚だぜ。」

全ての有幻覚を幻覚に切り替えておいたのさ。
んで、また有幻覚に切り替えれば完璧だ。

「フフフフ・・・実態のつかめぬ幻影。

無いものを在るものとし、在るものを無いものとすることで敵を惑わし、実態をつかませないまやかしの幻影。

これが霧。

何者にもとらわれず我が道をいく浮雲。

何ものにもとらわれることなく、独自の立場から守護する孤高の浮雲。

それが雲。

性質的に混じる事がほばないであろう雲と霧。

さて、この二つが混ざったらどうなると思う？」

『霧による構築で有幻覚を作り、雲による増殖でそれをさらに増やす……』

厄介過ぎる組み合わせだ……』

そりゃ当然だろう。

原作じゃ雲と霧を両方持ってた奴なんか見た事ないからな。

もしそんな奴いたら俺から見ても厄介極まりないな。

自分で使っというてんな事言うなやって思ってる人。

全くもってその通りっす、サーセン

さっきの台詞だが、一応ボンゴレの守護者の使命の一部を取っただけ。

一回言ってみたかったのもあるが、大半引用してますね、うん。

「「「「お前は、このコンボに耐えられるか？」」「」」」

本体（俺）を含む有幻覚が一斉に言葉を発する。

自分の声が重なるって、なんか不気味だな。

現時点では俺を含めてまだ5人しかないが、増殖をコントロールすれば、5倍は軽く増やせる。

それを知ったら、確実に絶望の淵に立たされる事が出来るだろう。

『くっ、ナメるな！』

魔法の射手 連弾・勝利の二千五百矢 Spear rain of the victory (勝利の槍雨)！』

連弾にすることで、槍の雨のように魔法の射手が降ってくる技か。

俺以外有幻覚とは言え幻覚に変化すれば問題ないんだが……問題は俺だ。

避けたら普通に本物だと断定されるし、かといって避けなければ直撃余裕。

んー……ちとめんどいが、有幻覚の俺全員を自律させるか。

「有幻覚自律式 ver1.01」

相手に悟られない程度の声で、それぞれの有幻覚の俺にそれぞれ違う自律設定を施す。

よし、これで後はそれぞれ避ける反応をさせれば、俺も安心して避けられる。

「「「「ふん、こんな楽勝で避けられるッ!?」」」」

避けきったと思った矢先、またもや後ろから衝撃が走る。

『お前達が避ける事は想定内だ！』

本体がわからぬなら、本体ごと叩くまで！』

予想はしてただけだなー。

まさか本当に瞬間移動で後ろから膝蹴りしてくるとは・・・よく見ると、有幻覚全員が攻撃を食らってる。

なんつーゴリ押し戦法だよ。

この場合、だんだん追い詰めてくテンプレだと思ったら、そうじゃなかった件。

やっぱり元の世界ほどではないが、テンプレとかご都合主義がたまにしか発動しねえ。

とにかく、このままだとまた面倒な事になりそうだし、ちと早いがシメと行った方がいいな。

さっきみたいに戦闘不能寸前にでもなったらかなわん。

「いい加減お前に攻撃されるのもタルくなってきたんでな、そろそろケリ、付けさせてもらうぜ。

むげんげんえい
無幻幻影。」

直後、有幻覚が増殖していく。

次から次へと増殖を繰り返し、やがて——1000体ほどの有幻覚が出来る。

しかも、わずか2、30秒足らずで、鎧の人格のわずかな妨害もありながらでこの数だ。

『くっ、なんだ・・・？』

急に攻撃が効かなくなった・・・！？』

「むげんげんえい無幻幻影を発動した事によって、お前が攻撃すれば幻覚に、俺達が攻撃すれば有幻覚へと変わる。

つまり簡単に言うのだな——お前の攻撃は、もう効かねえ。」

無幻幻影の恐ろしいところはそこだけではない。

わずかな霧から「構築」を使用し、幻覚の霧を形成。

雲の「増殖」によって、霧が増殖し、やがて人の形を成す。

そのスピードもかなりのもので、10分あれば万単位など余裕で越す。

もちろんその調整は発動した俺自身にしかできないし、正直万単位に増えた自分なんて見たくもない。

が、一応まだ増殖中ではある。

最終的には5000体くらいにする予定だ。

もちろん本体である俺は一人。

残りの4999体は幻覚で作り出した俺の有幻覚だ。

・・・なんか自分で言うのもなんだが、影分身に似てる気がする・違いがあるとすれば、解除しても経験値は増えない事くらいか。ついでに言うと、この技、強力過ぎて封印した技の一つである。

作成当時、有幻覚自律式 ver1.00と当時に作り出したのだが、その時は自律のプログラムがイマイチだったせいか、増殖の歯止めが効かなくなり、暴走状態に陥った事があった。

その後、現在の ver1.01を作成し、完成したのはいいが今度 は強力過ぎて、使用した相手を瀕死に追い込む程の危険な技になってしまったのだ。

それによって、ver1.01でこの技を封印し、その後しばらく使用していなかった。

しかし、今現在においてはそんな事を言ってられるはずもなく、封印技のうち一つを一時的に解禁する事にしたのだ。

ちとやり過ぎかもしれないが、テンプレなどに頼れない今にとっては、テンプレもクソもない。

・・・まあ、ここだけの話、「いいぞもつとやれ」という俺と「正々堂々戦うってのはどうした!」という俺が俺の中でせめぎあっているのは秘密だ。

『チツ・・・！
魔法の射手 サギタ・マギカ 集束・勝利の四千矢 コンゲルゲンティア A heroic double fist (英雄の双拳) ツ！』

鎧の人格は両手に魔法の射手を巻き付け、無音拳レベルのスピード、パワーで俺の有幻覚を消しにかかる。

だが、俺の有幻覚は霧に戻るだけで、少しすると何事もなかったかのように元に戻る。

ハッキリ言って、コレは破るのは無理だろうな。

エルザ本人なら、目から対する幻覚は効かないから、異世界の幻覚とはいえ簡単に破られる可能性はあるが、今は鎧の人格によって動いているからな。

さっきも言ったが、アイツが攻撃にかかれば、幻覚に変化。

かといって幻覚が攻撃にかかれば、有幻覚に変化しちまうからな。

それ程高度な幻術なんだよ。

さすがにD・スピードには負けるかもしれないが。
デイモン

『く・・・クソッ、本物はどこだ！？』

どこを攻撃しても攻撃が通じん・・・！』

「さくで、俺はどこでしょうか？」

5分程待ってやるから、それまでに俺を見つけてみな。」

俺はよくあるような挑発を送る。

その言葉が、フラグを立たせると知らずに――――

SIDE シン OUT

SIDE 闘神の鎧 人格 IN

少し、話をしよう。

俺は、かつては至って普通の魔法使いだった。

どこにでもいるような、一般の魔法使いの一族に生まれた。

だが、一つだけ普通の魔法使いとは違うところがあった。

俺は魔法の射手を初めとする、初歩的な魔法しか使えなかったのだ。所謂世間で言う、落ちこぼれだ。

当然俺は魔法学校を中退、家も出て、魔法世界に飛び込んだ。

俺が魔法世界に飛び込んだ当時、世界は大戦中の真っ只中。

現在よりも、遙か昔の事だ。

そうだな・・・魔法世界でいう、旧世界人が入ってきたばかりの頃だな。

まあ、今の歴史書には書かれてないだろうから、わからないだろう。

俺は雇われ兵士として、大戦に参加した。

初めはもちろん人を殺すのには躊躇したし、程ほどに戦えばいいと思ったさ。

だが、俺と同じ雇われ兵士や正規兵が横で死んでいくのを見て、俺は思った。

「殺らなければ、殺られる」。

5つの戦場を越えたところには、既に人を殺す事の躊躇はなかった。

戦場を生き抜くために、俺はわずかに使える魔法の鍛錬を始めた。

可能な限り、魔法の射手を、障壁を、そして自分でも使えるオリジナル魔法を。

それぞれの魔法を出来るだけ向上させる事を絶え間なく毎日やった。

やがて、魔法の射手は新たな特異な属性『勝利』を帯び、障壁は神性を帯びたかのような輝きに变化した。

The wrath of the death（死の逆鱗）も完成し、いつの間にか俺は大戦で常に最前線に立つ存在にまでなっ

いた。

大戦によって皮肉にも、強くなっていった訳だ。それから何年かが経過した後、大戦は停戦という形でなんとも言えない形で終わりを告げる。

大戦が終わった後、俺は旧世界に帰る気にもならず、世界を放浪した。

それからはよくあるベタな話だ。

賞金稼ぎになって、行く先々でクエストを遂行したり、ある村で婚約を前提にしたお付き合いをしたり、子供に魔法を教えたり。

色々波乱はあったものの、それなりに充実した生活だったと思う。

そして、長い年月が経過し、周りにたくさんの子供に囲まれて人生を終えた———と思った。

次に目覚めたのは、とあるギルド。

ここはどこだ？ と思いながらも体を動かしてみたが、動くたびにガシャンがシャンと音が鳴る。

・・・ガシャン？

不思議に思いながら、鏡を覗き込むと———顔が、ない。

否、空洞になっているのだ。

当然、俺は慌てるが、俺の周りからの視線も驚愕に染まっていた。それはそうだ。

人が入っていないのに動いてる鎧なんか、不気味以外の何者でもない。

しかし、何故鎧になってしまったのか。

それがわからない。

いくつか疑問があるとすれば

1. 俺が鎧になっている事
2. ここはどこか
3. どういう状況か

4. そもそも何故ここにいいのか
という事だ。

しかし、その疑問を考えているうちに、こちらに一人の女がやってくる。

女は俺の目の前まで近付き、予想だにしない言葉を発する。

「これがシンが送ってきた新しい鎧か。

今度の鎧は自分で動くとは、素晴らしいな。」

・・・あ？

この時、思考が一時停止したのは言うまでもなかった。

どうやらシンとやらの手違いで、何故か鎧に俺の魂が定着してしまった事が後にわかった。

そして、それがエルザの出会いだった。

『く・・・本物はどこだ!？

どこを攻撃しても攻撃が通じん・・・!』

クソ・・・!

アイツはどこだ!？

有幻覚を殴れば、幻覚へと変化し、幻覚がこちらに攻撃してくれば、有幻覚に変化する。

そう言う法則なのはわかったが・・・手応えは多少あるものの、有幻覚故に本体と手応えがまるで同じ。

マズいな・・・当時の経験からみても、これ程の幻術使いは見た事がない・・・!

シンという存在はエルザの話で知っていたが、この時代の地点での強さとは・・・異常だ!

Spear rain of the victory (勝利の槍雨)やA heroic double fist (英雄の双拳)を使っても一時的に形が崩れるが、すぐに復活してしまう。しかも、一人一人の実力が本体より多少劣るものの、レベルが高い。どうすれば本体を見つけられる・・・!?」

「さうて、俺はどこでしょうか？
5分程待ってやるから、俺を見つけてみな。」

無茶過ぎる。

とても5分程度で見つかる訳がない。
もはや絶望的・・・だが、このままでは負ける・・・
2分、3分と時間だけが過ぎていく・・・一体どうすればいい・・・
!?

『おい、私と替われ。
そうすれば、幻術などすぐに破れる。』

頭の中からエルザの声が響いた。
・・・そういえば、コイツ片目が義眼だったな・・・
俺の場合、無意識に義眼の方を心眼で対処するからな・・・あの
技の対処は不可能だ。

『エルザか。
それは本当なのか?』

『ああ、私は目に掛かる類の幻術は効かん。
だから私を交代しろ。
お前の魔力もほとんど尽きてきてるだろう?
無理をするな。』

・・・よく見てるな。

さすがは一時的にはいえパートナーになっただけある。

『・・・わかった。

お言葉に甘えさせてもらう。

その代わりと言っちゃなんだが、俺の力、受け取りな！』

S I D E 闘神の鎧 人格 O U T
S I D E シン I N

・・・さて、そろそろ5分が経過するか。

そろそろトドメを差しに行き・・・ん？

『魔法の射手 サギタ・マギカンゲルゲンティア 集束・勝利の三千矢 しょうりほうけん 勝利崩剣！』

な・・・何！？

有幻覚を次から次へと貫いてこっちに来ている・・・！？

鎧の人格は本体である俺とはかけ離れた場所で全然関係ない有幻覚の俺を倒していた筈・・・

何故だ？

「何故有幻覚が効かない？
何をしたんだ？」

『目から来る幻術は効かん。
闘神の鎧と主権を交代した。』

・・・その喋り方、間違いなくエルザだな。
んで、義眼で対処したって訳か。

しかし、鎧の人格は何故エルザの体で戦ってたのに幻術にかかったんだか・・・
気にすんなって事ですね、わかります。

「主権を交代した・・・か。
交代した要因でもあるのか？」

『あの鎧は魔力がほぼなりなりかけてたし、幻術によって詰みかけてたからな。』

なるほど。

4桁の魔法の射手をあれだけ連続で出していれば、魔力容量があっても空になるわな。

その上、無幻幻影を食らったんだ。

詰むのは当然か。

『だが私も闘神の鎧程ではないが、魔力がなくなりかけてるし、奴に借りた『勝利』を使った代償が出てきてるんだ・・・そういう事だから———拳の一撃で決着を着けよう。』

「……わかった。
拳で決着を着けてやんよ。」

「……やはりあの『勝利』の属性は、鎧の人格以外が使うとリバウンドがくるようだ。」

『勝利』の属性魔法を一つ使っただけで握っていた手が焦げかけてやがる……

しかも『勝利』の魔法の射手を作っただけでエルザの魔力がガクンと落ちた。

おそらくこの一撃で本当に決着を付ける気だ。

だったら、俺も本気で臨むまで！

俺は無幻幻影を解除し、魔力をありったけ煉りこむ。

そして、無詠唱で魔法の射手を作り出していく。

『行くぞ！』

「来い！魔法の射手 サギタ・マギカ 集束・虹の六千矢 コンゲルゲンティア 七色崩拳！ なないろほうけん」

『魔法の射手 サギタ・マギカ 集束・勝利の五千矢 The fist of the hero コンゲルゲンティア（英雄の拳）！』

虹に輝く拳と、光り輝く拳が激突し合う。

お互いの拳から元に、大爆発を引き起こす。

そこから更に空間が裂け、歪んでいく。

だが、それはわずか数秒程度で、空間は急激に閉じ——激しい衝撃波を生み出す。

この大爆発、衝撃波によって、辺り一面に煙が舞う。

濃い煙が晴れ、そこに立っていたのは——シンだった。

「……俺の勝ちだな……お前の鎧と剣、もらって行くぜ？」

『ああ・・・私は負けた。
好きにしろ。』

ただ、一つだけ言っておきたい事がある。』

「何だ？」

ある程度予想は付いてるが・・・

『闘神の鎧を、よろしく頼む。』

奴はお前の助けになるはずだ・・・』

「ああ、わかった。

ところで、俺からも一つ、頼みがある――」

その後、俺はエルザの仮契約カードを取り出し、同化の魔術を使用する。

そのカードには、闘神の鎧を着たエルザが描かれていた。

「さて・・・二つ目の武器、手に入れたぜ！

次はどんな思念と武器に巡り会えるかな・・・」

一体残りの思念、何人いるんだろうな。

2人目の時点で7割くらいの実力を出させるレベルとは・・・俺ももっと強くないとな・・・

俺はその場を後にし、楽園の塔を降りようとした、が・・・

フッ

「それはともかく・・・危なかった。」

不老不死だからってあの高さから落ちたらシャレにならないで。」

不老不死とはいえ、頭から落ちる勢いだったからガチで危なかった。状況を打開するために雷化したのに解除するのも勿体ないし、このまま雷速瞬動で次の武器がある場所を探しますか。

うーん、綺麗な夜空だねえ。

だけどさー、なんか色んな物体が空の妨げになって邪魔なんだよねー。

俺が何が言いたいかと言うとだな・・・何だこの状況。

雷速瞬動で順調に移動をしようとしたら、偶然アリアドネーの軍団に見つかって、囲まれました。

・・・何故にこんな所にアリアドネーの軍団がいるし。

管轄外じゃないの？

「賞金首 シンに次ぐ！
今すぐ投降しろ！」

スピーカーばい所から声が響く。

「……確かに『無殺者』とか色々な異名はあるし、1000000ドラクマの賞金首になってるが、俺は悪人すら殺した事がない。かかって来たのは大抵雑魚ばっかだったし。

悪人は悪人で突き出してるし、むしろ感謝されそうな事やってるはずなんだがな！。

「で？」

理由は？

俺は悪事を起こした覚えはないが？」

「とぼけるな！

名のある賞金稼ぎ達を重傷を負わせ、『マギステル・マギ偉大な魔法使い』を返り討ちにした奴が、よくそんな事を言えるな！」

だーかーらー。

確かにそんな事あったが……全部正当防衛で対処したに過ぎない。

それをそっちの都合で捕まらないといけない必要があるか？

つか、全員死んでねえならそれで良いと思うんだが？

ま、言っても無駄なんだろうがな。

「悪いけど、俺は捕まるつもりはねえよ。

色々やる事があるしな……」

「ふざけるのも大概にしろ！

既に貴様の周りは包囲されつつある！」

マジか。

とりま、探知してみるか。

……マジ？

前に文献で調べた時、伝説の賞金首は、一回俺と同じようにアリアドネーの軍団に包囲された記録が残っていた。

その時でも千人位だったらしいのに……これ万単位いるじゃねえか……

しかも艦艇なんて当たり前にいるし、その艦艇のうちの一つは最大級クラス。

偶然見つけたとはいえ、過剰戦力過ぎやしないか？

この状況……面倒くせえ上にほぼ詰んでる。

一難去ってまた一難とはまさにこの事だな。

仕方ねえ……カシオペアを使うか。

詰みかけてる状況だから、使用しても問題ないと思うんだ。

まあ、そんな事を考えてる間にも敵は待ってくれず

「撃てえ！」

すでに魔法の射手を初めとする魔法弾が一斉に放たれてんだよ……

・ま、いい。

少し魔力を使うか……

レインボーバリア

「虹楯」

滅多な事じゃ虹楯なんか使わないんだが、緊急事態だし、んな事は言ってられんか。

俺が発動した虹楯によって全ての魔法弾を防ぐ。

さて、全部の弾も回避したし、あとはボタンを押すだけだ。

「なっ・・・!?!」

「んじゃ、俺はとんずらさせてもらうぜ?」

「はっ・・・逃がすなあ!

総員ひっ捕らえろ!」

スピーカーらしき物から響く声と同時に、部隊が一斉にこちらに動き出す。

残念だが、俺を捕まえるのは無理なのよね。

俺はカシオペアを取り出し、ボタンを押す。

そして、俺は

「あばよ。

捕まえたかったら俺より強い奴でも連れてくるんだな。」

そう捨て台詞を残した。

「ふー。

移動完了、っと。」

現在はさっきと同じ場所の約半日後。

ま、これではしばらくは逃げられるだろ。

正当防衛しかしてないのに、賞金を掛けられるってのも今更だが理不尽に感じてくるな・・・

つか、どこの○ル・バスターだよ。

あ、元ネタ知ってる奴いんのかな?

・・・脱線はもはや恒例として受け取っていただきたい。
行き先についてだが・・・オスティアに行ってみようかと思う。

オスティアを選んだのには勿論理由はある。

伝説の賞金首がオスティアで神器の一つを手に入れたとされているからだ。

信憑性は高いと考えてもいい。

実際、ケラベラス溪谷、オリンポス山はかつての賞金首と神々との戦いがあつた場所として文献に記されていた。

まあ、確かに武器を置く場所としてはうってつけだろうが・・・めんどくさいと言わざるを得ない。

常人じゃ行けないのは確定的だが、危なっかしい場所ばかりなんだよ。

よくあの賞金首突破できたな・・・

とりあえず俺は、オスティアを目指す事にした。

しかし、アリアドネーの一件が原因か、この後俺の賞金首としての額が5倍に跳ね上がる。

1000000↓5000000ドラクマ

5倍にも跳ね上がった要因は、艦艇の魔法弾すら効かず、さらにそこから忽然と消えた事が原因かと思われる。

雷速瞬動みたいに僅かに軌道がわかればともかく、何の予兆もなければ不思議に思うだろう。

未知数って意味も含めて、上がったんだろう。

後々に冷静に考えた結果、そういう答えに至った、が――
見た直後の時の心境は

オイオイオイ、これ上がりすぎだろjk!?

という心境だった。

第十一話 妖精の女王と換装自在の剣と鎧・後編（後書き）

・・・少し矛盾がある気がするのには気にしないでくれたらありがたいです。

修正前、鎧の生い立ちとかはなかったんですが、こんな存在ならあっても問題ないよな〜って思ってた書きました。

ちなみに、修正前の鎧は、アビスと同じような最低限の言葉しか発せず、『枷』を外して初めてまともに喋れる設定でした。

まあそれじゃアビスと被るって事とこの性格は微妙だな〜って理由で今回の性格に変更しました。

モバ・エブリ時代から知ってる人が見たらどう思うか・・・（笑）

それでは感想、レビューお待ちしております。

それでは、また次回〜 W W W

第十二話 Xを冠する男と炎を宿す拳？（前書き）

前回投稿から約一カ月近く・・・

色々やっててめっちゃくちや遅れました、ホントサーセン。

・・・謝ってばかりだな、俺（笑）

それと、今回は活動報告にも書いた通り、前編を二分割したうちの一つを投稿します。

後書きには、ゲストとして、シンとのお話をお送りします。

第十二話 Xを冠する男と炎を宿す拳？

ふう、オスティア到着つと。

ここまで種族、性別詐称魔法を使ってかいくぐって来て、なんとか到着できた。

あれからまだ数日しか経っていないのだが、オスティアに入るのにはマジで苦労した・・・

運が悪い事に、この時期はお祭り期間らしく、通常よりも多くの人 が世界各地からオスティアに集まってきていた。

当然警備の目は厳しく、その警備をかいくぐらなければならんし、検問で指紋まで調べられるハメに。

高度な阻害魔法使ってなかったらヤバかったところだよ。

つーか明日菜達とはともかく、よくネギ達入国できたな・・・

やっと検問が終わった俺が真っ先に向かったところは、大浴場。

ロッカーに服、仮契約カードなどを入れ、そこに雷系の魔法を封じ込める。

これでピッキング等をしようものなら確実に感電して気絶するだろう。

例によって物質に魔法を封じ込める魔法は自作だ。

ちなみに俺の容姿だが、さすがにそのままの姿だとマズいので、黒髪十人間化の状態に変化している。

そして、大浴場に入る。

おー、祭り期間なだけあっていつもよりスゲェ人がいるな。

人、亜人、魔族、精霊問わず沢山の人（一部人外いるけども）が至るところにいる。

この時代じゃまだ確執的な所が残ってるけど、こういう所に意外な共存関係があるよねー。

さすがオスティアで「温泉は聖地」と言われるだけある。

しかし・・・一部分、なんかおかしい声が聞こえる場所が・・・
なんか「やらないか」とか「アッー!」とか聞こえてくるんだが、
ここハッテン場じゃねえよな？

・・・とりあえず、幻聴と信じたい。

そんな事がありながら、大浴場の中でもかなり奥の方まで進む。

「おし、ここまで奥なら気にも止まらんだろ。
ディスフルサーティオー
解除。」

ボンッ！

そこで俺は元の姿に戻る。

そして、俺は体と頭を洗い、風呂に浸かる。

「はぁ、気持ちいい。」

久しぶりの風呂は最高だな！」

一応この10年間、世界一周の際に何度かオスティアに来た事があり、その度に風呂に入る事が恒例になっている。

なんともめんどくさい事にこの魔法世界、オスティア以外じゃ風呂ある所ほぼ皆無なんだよね。

この時代じゃほとんどシャワー的なモンばかりで、ゆっくり癒すのがムズい。

一応桃源などの方にもあるにはあるが、今回の大きな目的は武器の入手と思念と本体の同化。

だからオスティアの風呂に入ってる訳だ、って言わなくてもわかるか。

まったく、転生する前はホイホイ風呂入ってたから、気にもしてなかったが、転生してからはホント風呂が恋しくなってくる。

・・・少しジジイ化でもしてんのかねー、精神が。
って言っても、俺まだ精神年齢でも20代後半なのに、なんか悲しくなるわ。

しかし、全然風呂以前にシャワーすら入るチャンスがなかったのよね、ここ最近は。

だから、俺が作り出した消臭の魔法などを使って、異臭が出るのを防いでたんだ。

とはいえ、異臭が出るのを防いでも、汗等が流れなくなる訳ではなく、おかげで風呂に入る直前には体中がまるで果物の果汁が乾いたようにベットベトになっていて動きづらかった。

最後にシャワーに入ったのは、エルザとの戦いの前だったかなー・

そんな事はさておき。

本ツ当に極楽だわぁ〜。

いくら不老不死と言えども疲労は溜まるし、汚れたりもする。

思念との戦いが一番大きいが、オスティアに入る時に精神を多少磨り減ったのもあって、現時点で既に疲労はピークに近い状態。

そんな状態で風呂なんか入れば本当の極楽に行く勢いで癒される訳である。

不老不死なのに天に行きそうなくらいの勢いですよ、ガチで。

いつその事魔法球に温泉作ってみようかなあ・・・

そんな力も抜ける程の至福の時間を過ごしていると・・・

「グヒヒヒヒヒ、ええ眺めじゃのお。」

・ ・ ・ ・ ・ 今物凄く腹立つ不快な声が聞こえた気がするんだが・ ・ ・ ・ ・

気のせいk「おお、あの娘ええ乳しとるのお。」 ・ ・ ・ ・ ・ 気のせいじゃなかったな。

こりゃあ完全に覗きですね、わかります。

・・・ぶっ飛ばすか。

俺の至福の時を邪魔したのと、覗きをした罰を下してやろう！

「即刻見つけて叩き潰すか。」

まったく、覗きなんてものはな・・修学旅行とかでしかやっちゃいけないモンなんだぜ・・・？

え、そういう問題じゃない？

3人に1人はやってる気がするんだが、漫画とかでも恒例行事だし。若者は若気の至りで許す！が、老人が覗きなどする事は断じて許さ
ん！

法則が滅茶苦茶だって？

気にスナナ。

とりあえず、覗きをしてるジジイを魔力探知で探し始める。

この世界じゃ大抵の奴は魔力を持ってるからな。

探すのは簡単だ。

50 m・・・

100 m・・・

150 m・・・

ん、ジジイ発見！

フフフ・・・どうやって料理してやろうか・・・

で、何故に150 mも離れてる奴の声が聞こえたんだって？

魔法で聴覚強化して地獄耳の状態になっている俺には、風呂全体のありとあらゆる声、音が聞こえるのさ！

うん、テンプレ&mp;ご都合主義だね。

別にこんな時に発動しなくても・・・とこっそり思っていたりする。

「よし、発見！」

さて、行くとしますか……殴りに。」

一応魔力探知で方向はわかっているんで、あえて時間を掛けて近付いて行く。

この時点での俺の脳内BGMはまさにセフィロスのテーマになっていた。

もうね、これはさすがに空耳じゃなく、素の状態で脳内BGMになっ
てる。

絶望を贈ろうか、ジジイ？

「ウヒヒヒヒヒヒ」

相変わらず覗き野郎は不快極まりない声を出す。

俺はぶん殴る準備をする。

もちろん罰は与えるが、死なない程度にだ。

本気の出力でやったら、即死どころか木っ端微塵になる。

ギャグ補正かかれれば別だけでも、今のところギャグ補正かった試しがないしな。

セフテントリーギンタ スピーリトウス・ルカキマシテース サギテント・イニミクム
「光の精霊 37柱……集い来りて 敵を射て……」

今度は詠唱をしていく。

出力調整はするが、詠唱唱えた方が絶望を感じやすいだろうから詠唱してる。

実際、俺の周りには少なからず人がいるのだが、ソイツ等の顔が絶望に染まっていた。

あ、一応阻害魔法はかけてるぞ？

「魔法の射手 連弾・風の20矢 装填。」
サギタ・マギカ セリウス ルーキス スプレイメントウム

そして距離を詰めに詰め、ついに覗きをしているジジイのそばまで来た。

ジジイ・・・今こそ罰を受ける時だ！

俺は肩を優しく、半端なく優しく叩く。

「ブヒヒヒヒヒ・・・ん？」

もうその不快な声を聞かせんじやねエエエエエ！

お前の罪を数えろオオオオオオオオ！

「一編死んで来い♪この糞ジジイが♪
エーミッター おうかほうけん
解放 桜華崩拳！」

ドゴッ！

俺の放つ桜華崩拳おうかほうけんがジジイの鳩尾にクリティカルヒット（手加減）する。

「アガナバダヤナアアアア！？」

滅茶苦茶キモい声を上げながらぶっ飛んで行くジジイ。

ふ、絶望を送ってやったぜ。

でもね・・・問題が一つある。

あのジジイのぶっ飛んだ場所が女湯なんだよ・・・

気絶してるから危害を与える事はないと思うが・・・

女湯の方から

「死ね、頼むから死ねエエエエ！」

「輪廻の輪から外れなさい！」

「・・・覗きは死に値するです。」

こんな声が聞こえてるんよ。

つまり、女が危害を与える訳だ・・・

ジジイの自業自得もあるが、俺も正直やりすぎたと思っている。

それからだが、その後は誰にも邪魔される事なく、すっきりするまで風呂を堪能した。

目撃者がいたから、覗きしてるバカがいなくなったしな。

「しかし、どこに武器があるのかねえ。」

時間が飛んで、約2、3時間後。

風呂上がりに買ったコーラを飲みながら、探索していた。

オスティアのありとあらゆる場所を探したが、なかなか見つからん。

これは余談だが、あのジジイの名前はオツパ・ツウと言うらしく、

常習犯らしい、というかさつきは気付かなかったが、既に何度か撃退した経験がある。

先祖から受け継いだ半永久的無料温泉パスを使って覗きを繰り返すバカの極みなのだ。

もはや少しは学習しろよと突っ込みたくなるレベルだ。

つーかよく立入禁止にならねえな・・・あのジジイ。

・・・確か文献で調べた時、かなり昔の資料に過去に行われた大拳闘大会でオパイ・ツウとか言う奴がああ賞金首と組んで優勝した記録が記されてたな・・・ちなみに準優勝したペアは後に名を馳せた奴らのようだ。

決勝に関してだが、その時1VS2、賞金首VS準優勝ペアでほぼ圧勝だったから、その時点で賞金首の異常な強さがうかがえる。

で、その時の優勝賞品がさっき言ったパスと100000000ドラクマだったらしい。

そして、ツウ家を家系図にするとこんなんだな。

オパイ・ツウ

←

オツパ・ツウ

←

パイオ・ツウ

てな感じになってるのがわかる。

ホント、コイツらの家系は完全に変態揃いだな。

後、なんか気のせいかデジャヴを感じた。

てか、さっきの文献は何故か滅茶苦茶詳しく書かれていて、リングネームまで記されていた。

二人のリングネームは

「パイ仙人」↑オパイ・ツウ

「滝川クリステル」↑賞金首

これを見た瞬間、賞金首のあまりのネーミングセンスのなさに俺は大爆笑。

というか、何故にこの名前を思いついたし。
さて、もはや恒例の脱線はともかく。

「ここにもねえとすると、後はあそこしかねーかな？」

俺が思った場所はオスティア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」。

ナギ達『^{アララブラ}赤き翼』の最終決戦となった場所だ。

そこ以外のめばしい場所を探したが、見つかんねえし・・・

原作の時代じゃごくわずかししか浮いてないけど、この時代じゃまだあの事件がなかったために数百の浮遊島が全て健在。

そのため、探す対象になる場所も倍増どころの騒ぎじゃないくらい多い。

それが原因で2・3時間も掛かったのだ。

そんな消去法で虱潰しに探し、武器がある可能性の高い最後の場所が「墓守り人の宮殿」。

広いし、武器を潜ませる場所にはかなり最適だろう。

ただ、問題がある。

監視の目だ。

原作の時代ではすでにほとんどが地上に落ちた浮遊島が健在であるように、当然「墓守り人の宮殿」も健在で、かなりの警備がいる。
それも当然。

あそこにはオスティア初代女王、アマテルの墓を始めとする、歴代の女王達の墓場。

警備もそうだが、おそろくなんらかの精鋭部隊もいるはずだ。

つまり、ヘタをしたら詰む。

自分でチートとは自覚してるし、詰みそうになっても逃げれる。

が、正直もう賞金の額を上げたくない。

物騒な事態にもできればしたくない。

「……やはり今回も何人か連れて行くか？

最悪、共犯者がいれば少しは……」

何人か連れて行けば、一応詰みの可能性はほぼ無くなるし、この方法がベストに近いと言ってもいいだろう。

さっきも言った通り、共犯者がいれば少しはマシに……ハッ！

おー危ない危ない。

なんつー黒い事考えてるんだ俺。

S成分が発見されてからというものの、某ドS王子ばりの黒さがたまに出ちまうぜ……

とにかく、今回のメンバーは強い部類に入る奴と戦闘民族から選出しよう。

俺はホルダーから全ての仮契約カードバックティオーを引っ張り出し、選抜メンバーを選ぶ。

……全部引っ張り出したのはいいが、下手したら3000枚はありそうなので、選別シーンはカットの方向で。

（1時間後）

ふう……やっと選別が終了した……

あの女神、確かに異世界の住人の仮契約カードは希望したが……多過ぎて完全な把握ができません！

この前、俺はほぼ把握したと言ったが、アレは間違いだ。

あの時はほぼ把握できてた、と言うのが正しいだろう。

俺がこの世界に来た当初は、せいぜい150枚くらい（それでも多いのだが）だったのだが、ある日、何故かカードの枚数が増える事に気づいた。

後々わかった事だが、女神はなんと、不定期ながらも追加の仮契約カードを送って来ていたのだ。

おまけにここ半年の間にまたカードが追加されており……もう収拾がつかなくなりそうで少し困る。

最近マイナーな漫画の出ながらも強い能力を持った契約者（ジオ・フリードなど）や俺が知らない漫画やアニメのキャラまで追加されてる。

この3000枚近くもある契約者の中で、唯一の共通項がある。

それは———純粋な悪人、つまり純粋な敵キャラの類がない事。REBORNの六道骸や、るろうに剣心の斉藤一のようなダークヒーローこそいるものの、完全悪のような奴はいないのだ。

女神はなんだかんだでちゃん選別してるらしい。

……多過ぎるけどな。

一体最終的に何枚になるんだが……

とりあえず、早いところ召喚しとかないと。

「召喚 雲雀恭弥 クラウド・ストライフ 神田ユウ 朝倉和美
ティーダ ロクサス」

今回は6人。

「墓守り人の宮殿」は見ての通り、かなり広いので、それなりに人数はいた方がいい。

ちなみに選別理由はこうだ。

雲雀…戦闘民族筆頭（咬み殺す的な意味で）の上、魔法無効化持ちなので、効率良く事が進むから。

クラウド…戦闘民族などの戦闘狂ではないが、単に強いので選出。

神田…性格的な問題を除けば、クラウドと同じく、単に強いために選出（決して中の人繋がりで行った訳ではない）。

朝倉…偵察に長けているアーティファクトを持っているため。

ティード…軽快な動きで素早く敵を倒せるため。

ロクサス…総合能力が優れているために選出。

とりあえず、以上の理由で選出している。

『魔法無効化』マジックキャンセル能力を持つてる奴今んとこまだ5人程度しかないものの、全員契約者の中でも強者の部類に入る奴ばかり。

……『魔法無効化』マジックキャンセルの希少価値はいずこへ？

原作じゃ明日菜しか持っていないのに、そこにコイツ等投下したら原作崩壊どころの騒ぎじゃねえぞ……

最悪、原作剥離するわ！

俺が介入しても、原作知識が通用する程度に済んでくれればいいんだがなあ……

一応この6人が見つかった時点で選別を終了した。

さすがに全部はちよつと無理。

（2、3分後）

……全員召喚成功したのはいい……が。

俺、今現在進行形で雲雀に攻撃されてます。

「ちょ、だから止めろって！
頼むから俺の話を聞けェ！」

予想はしてたけども。

防御の構えも取ったけども！

召喚直後からいきなりV^{ボンゴレギア}Gで攻撃仕掛けてくるとかどんだけ俺を咬み殺したいんだよ！

俺以外のメンバーはとぼちりを食らわないように離れた場所にいるし・・・裏切り者オオオオ！

「別にいいよ・・・あなたを咬み殺させてくれるならね！」

「結局咬み殺すんじゃないか！

お前らアアアア！

避難してねえぞコイツ止めるの手伝えやアアアアア！」

俺の悲痛な叫びは、オスティアに響いたとか響かなかったとか・・・

（10分後）

ホント何回カットすればいいのやら・・・

あの後、手伝わなかったら全員に『アレ』かますぞ！って言ったら

手のひら返したように手伝ってくれた。

「……………言っとくが、親睦結構深めてるからな？」

少し恐れられてるのは軽く凹むが。

なんとか雲雀を押さえつけるのに成功し、今回の内容を説明する。

ちなみに雲雀には技を掛けた状態で押さえつけてる。

そうでもない、また暴れだすからね…………

「……………以上が今回の作戦内容だ。」

「それであたし達を呼んだって事？」

「ああ、まずお前はアーティファクトであの中を調べて来てくれ。」

「いいけど…………アレって!？」

あの映画に出てた…………!」

「……………そういえばお前はここを知っていたな…………

安心しろ、ここはお前の時代から100年以上前だから、危険性はないはずだ。」

とは言っても警備とかいるのに危険性もクソもないが。

「へー、この時代ってまだ100年以上前なんだー。

で、報酬は？」

あー、報酬ねえ…………

朝倉は偵察の類で使えるんだが、パパラッチと呼ばれているだけに、見返りを求められる。

まあ常識的に考えれば報酬を貰わないとやってられないのは確かだが。

うーん、今回は何にしようか・・・前は金一封だったしなあ・・・

「そうだな・・・他の奴らの情報を聞いてもいいぞ。
だが、一人限定だ。」

アイツらには話を付けておいてやる。」

「OK、交渉成立だね。」

じゃあ行くよー！^{アデファクト}来たれ！」

読者のほとんどは大体把握出来てるだろうが、作戦内容を説明すると、まず朝倉のアーティファクトで中の様子を調べ、その後に「墓守り人の宮殿」に突入。

そこから各自別れて戦う作戦だ。

出来れば戦いは避けたいけどな。

基本二人一組のチームにしようとは思うが、雲雀は群れるの嫌うため、必然的に一人で行動してもらうことになる。

さて、朝倉のアーティファクトで中の様子を見ている間にチーム決めでもありますか。

「えーと、とりあえずチーム分けをするぞー。」

まずFF組（クラウド・ティード）。

次に剣士組（神田・ロクサス）。

で、最後は俺と朝倉のペア。

このチームでいいか？」

「「「（チッ、）それでいい（ツス）」」」」

「一つ質問いいかなー？」

「何だ？」

答えられるモンなら何でも構わんぞ？」

「何であたしまでペアに入ってるの？」

あたし戦闘はちょっと・・・」

「お前のアーティファクトで各チームに一つずつ渡オクルス・コルウィヌス鴉の人見を付けて様子を見てもらうためだ。

もし戦闘になったら、俺が守るかあら安心しとけ。」

「ふーん、そういう事ねー
でもちゃんと守ってね。」

「ああ、女の一人守るくらい、楽勝だぜ。」

さて、後は雲雀だな。

言うまでもないが、まだ技を掛けた状態で押さえつけてたりする。

「おい、雲雀。」

「何だい？」

もしかしてあなたを咬み殺させてくれるの？

それなら——」

「ちげえよ！

お前は一人であそこにいる奴らを倒してくれればいい。」

雲雀、戦闘狂過ぎて扱いがスゲエムズい……
その点じゃディーノ俺よりスゲエよ……

「……強いのはいるの？」

「多分少しはいると思うぞ。」

「……念のために言うが、殺すなよ？」

「へえ、殺しがいがあるね。」

人の話を聞けやこの戦闘民族野郎。

しかし、転生してなかったら間違いないく咬み殺されてもおかしくねえ……

それくらい、面倒くさいタイプだ。

ん……そろそろ『オクルス・コルウイヌス渡鴉の人見』が戻って来るんじゃないかな？

流石にあれだけデカイ建物だと、全体をまわるのにかなり時間がかかるだろうが、スピードはそれなりに速いし、30分もあれば戻って来る筈だ。

実は既に結構な時間が経過しており現在の時点でもうすぐで20分くらい経過してたりする。

そして、更に約10分が経過し——『オクルス・コルウイヌス渡鴉の人見』が戻って来た。

「どうやら戻って来たようだな。」

朝倉、どうだ？

中の様子は。」

「んー、めばしい所はほぼ見回ったよ。」

やっぱりかなりの見張りがいるね。」

「そうか。」

それじゃあアーティファクトを解除していいぞ。」

「OK。アベアット」

よし、これで後は潜入だな。

「さて、お前ら準備はいいか？」

「「「「OK（ツス）！」「」「」」

「僕はそれで構わないよ。」

「それじゃあ、まずは俺と空を飛べるメンバーが先に行く。
俺達が向こうに着いたら、空を飛べないメンバーを召喚する。
それまで飛べない奴は待機だ。」

結果的に、以下のようになった。

潜入組 俺（浮遊術）・ロクサス（グライド）・雲雀（ボックス）

待機組 クラウド・ティード・神田・朝倉

一応意識してなかったけど、ここまで綺麗に分かれるとは……
偶然ってある意味恐ろしいね。

「ロクサスとはにかく俺に着いて来い。」

「わかった。」

「僕は僕の好きなようにやる。
君達を見てると咬み殺したくなる。」

「はいはい、そう言うのはわかってるから。
テキトーに敵を咬み殺しちゃってくださいーい。」

俺より弱いのは確かのはずなんだが、恐怖を感じるわ……殺気とか半端ないし……

だが、今はそんな事を考えている暇はない。

ただでさえ場所を探し当てるのと選別でかなり時間を食ってるんだ。
潜入を開始するか。

く空中移動でのお話タイムく

「しかし改めて見ると、これは相当広いな。

オクス・コルウイヌス

『渡鴉の人見』で内部の様子見てなかったら、迷うレベルだぞ。」

「確かにデカイ建物だなあ。

存在しなかった世界にあった城程ではないけど、それでも大きいレベルだな。」

「ああ、アレほどデカイ城は見た事ねえなあ。」

アレよりデカイのあるもんなら見てみたいね。」

「世界単位で見ればあるんじゃないか？

俺も見てみたいな。」

「……君達、あんまり群れないでくれる？

咬み殺したくなる……」

「へいへい、わかったっての。

ったく、話くらいさせろっての……（ボソツ）」

「何か言った？」

「いいや、何も？」

「空中移動でのお話タイム 雲雀によって強制終了」

ふー、アレ聞こえてるとか・・・天然の地獄耳過ぎるだろ。

まあ、最終的に雲雀に強制終了させられたものの、そんな他愛もない話をしている間に「墓守り人の宮殿」に着いた俺達。

原作を見る限り、下から行った方が安全だろうと判断したので、下からの潜入になる。

・・・雲雀は別で正面から行ったがな。

今頃、上で大暴れしてるだろうさ・・・

雲雀は戦力的には6人の中でも上位なので、期待をしている。

多分大半は潰してくれるはずだ。

よし、宮殿の最下部についた所で・・・と。

「召喚 クラウド・ストライフ ティーダ 神田ユウ 朝倉和美」

俺は待機組を召喚する。

そして、改めて説明をする事に。

「さっきも言ったと思うが、今現在雲雀が正面に入って敵を集めている（俺達のためではないけど）。

その内に俺達は下から行く。」

「で、もし警備を見つけたら俺達はどうすればいい？」

「見つけた警備は全て殲滅。」

だが殲滅って言っても、当然殺す事は禁止だ。
一番ベストなのは・・・気絶させる事だな。」

「チッ、面倒くせえ・・・」

「ボヤくな、神田。」

元の世界に戻るような事があれば・・・『アレ』をやるからな？」

「・・・ツチ！」

ホント『アレ』やるって言ったらどの契約者も大人しくなるのでかなり便利な用語だったりする。

・・・同時にこれ言うとか心の涙が出るんだけどね。

「とにかく、まずは全員で行動する事になる。

下の方は螺旋階段になっているからそうするしかないんだ。」

「で、その螺旋階段はどれくらいの長さなんだ？」

「大体外観で見えていればわかると思うが、下の細い所のほぼ全部が螺旋階段と言っている。」

「長いな。」

見る限り、少なくとも余裕でビル20階はあるぞ、アレ。
で、それからは？」

「これもさっき言った通り、螺旋階段を越えた後の事だが、歴代女王の墓が続くと思われる。

目的地は——初代女王の墓だ。

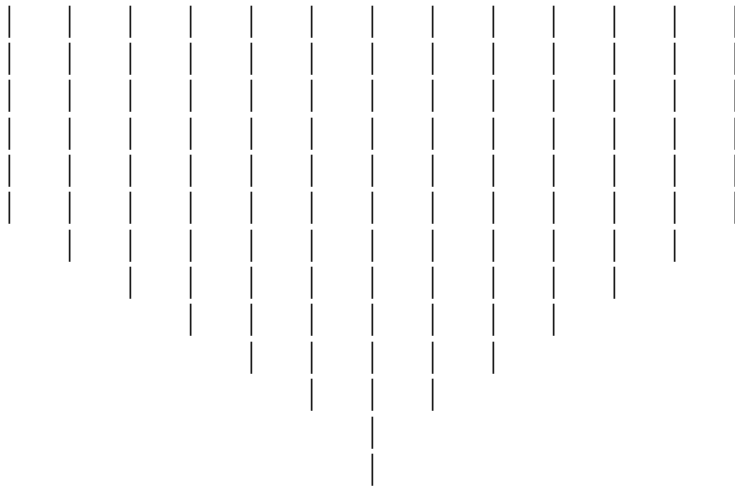
ちなみに、初代女王の墓は中心にある。

出会った敵を片っ端から殲滅しながらそこに移動してくれ。」

「「「「「了解（ツス・だよ）」「「「「」

よし、まずは螺旋階段を行くか。

俺達は螺旋階段を登り始める。



長い。

長過ぎる。

既に30階は登ってるはずなのに・・・

疲労が・・・せっかく温泉で癒したのに・・・

コレ作った奴誰だよ・・・いつかカシオペア使って作った奴に文

句言ってやるウウウウウ！

S I D E シン O U T

S I D E 雲雀 I N

ドッ

「がっ！」

ドガッ

「ごほっ！」

ガキンッ！

「あべっし！」

「……弱過ぎる、弱過ぎるよ……君達。」

「クソッ、なんなんだあの男は！
もっとだ、もっと兵を集めろオオオ！」

「全部の兵を相手にしてもいいけど……弱過ぎる君達じゃ、束になっても僕には敵わない。」

……肉食動物ではない、かと言って草食動物でもない、あの男……

どれもこれも僕を楽しませるような敵なんか、いないじゃないか。
ったく、後で咬み殺そうk「お前達、どけ！」……僕の思考を
妨げたのは誰かな……？

「貴様、一体何者だ！」

返答次第ではただではおかんぞ！」

僕の思考を妨げたのは結構若い女。

周りの兵を見る限り、随分階級は高そうだね・・・

「僕かい？」

僕は・・・風紀委員長さ。」

「フウキイインチョウ？」

何を訳のわからぬ事を！

食らえ、魔法の射手 サギタ・マギカ 風の五十一矢！」

「へえ・・・君、それなりに出来そうだね。

・・・僕を楽しませてよ。」

僕は思考を妨げた者の懷に飛び込む。

「頼むよ、ロール。

球針態。」

「な、なんだこの攻g・・・ぐっ!？」

相手は球針態を見事に食らう。

「君は出来ると思ったんだけどね・・・僕の見当違いか。」

「ぐ・・・ナメるな！」

ウエニアント・スピーワキムス・レス・マルタリウダチオアヒット・テンペスターズ・アウストリーナ
ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス
来れ雷精 風の精 雷を纏いて吹きすさべ 南洋の嵐 雷の暴風！」

ワオ。

雷の暴風かい。

これが出せるなんて、大したものだね。

だけど・・・あの男のとは比べ物にならないくらい——弱い。

「ロール、防御だよ。」

「キュ♪」

ロールによる球針態の防壁を作る。

あの男のは5重は防壁貼ってやっと防げるレベルだからね。

この程度で防げる攻撃なら、全然問題ないね。

『魔法無効化』マジックキャンセルなんか僕には必要ない。

「なっ!？」

私の雷の暴風を・・・!」

「君は強い。

それは認めよう。

だが・・・あの男には至らない。」

あの男なら恐らく10秒も掛からないであの女を倒すだろう。

雑食動物だからね。

※雑食動物Ⅱこの場合、滅茶苦茶強い人物の事を指す。

「さあ、続きと行こうか。」

とにかく、今はこの兵達を倒そうか。

今はまだあの男には敵わない。

だけど、いずれあの男を——虹すら、咬み殺す。

SIDE 雲雀 OUT
SIDE シン IN

（20分後）

俺達はようやく螺旋階段を登り切る。

「ハア・・・ハア・・・長ッ！
長過ぎだ！」

20階どころじゃない、あの螺旋階段、思った以上に長い！
少なく見積もっても100階越えてやがるよ！

おまけに朝倉おぶってたから、更に体力がああああ・・・！

「だらしないぞ。

この程度でへばるとは。」

「ケッ、貧弱過ぎるんじゃないのか？」

いくらチートな奴でもこれは体力的にキツいつつの！

つーかなんでクラウドと神田は息切れしてねえんだよ・・・おかしいだろ。

チートな俺が疲れて、スペックはかなり高いけどチートじゃないクラウドと神田は息切れすらないって・・・おかし過ぎるだろjkエエエエ！

「なあ、ロクサス、ティーダ。

なんでアイツら息切れしないんだよ・・・アイツらが普通に俺が

おかしいのか・・・？」

「いや、お前が普通だろ。」

実際、俺とティードもへばりかけてるからな・・・つか、俺グラ
イドで行った方が楽な気がしたんだけどな・・・」

「あぢいッスよお。」

だ・・・誰かポーションか回復魔法を・・・」

「・・・ああ、ロクサスの言う通りだな。」

正直失敗だった。

ティード・・・ドンマイ。

とりあえず治癒^{クーラ}かけるから待ってろ。」

完っ全にミスった。

螺旋階段登り切ったところで召喚した方が全然効率が良かったのに
気づかんかった・・・

作戦立てた頃の俺を殴ってやりたいわ・・・

本当に完全にやっちまった・・・コレは。

「治癒^{クーラ}。」

これで体力は回復したはずだ。」

「助かったよ・・・シン。」

「ありがとッス、シン。」

とりあえずへばり寸前のロクサスとティードに治癒^{クーラ}を掛けた。

さて、螺旋階段を登り切ったのはいいが・・・道がまるで都合主
義のように3つに別れてる。

ラッキーと言わなきゃ嫌な予感かすると思わなきゃ……とにかく、よくありがちだが、3つの道それぞれ一組ずつ行きますか。

「よし、まず左へはFF組が、真ん中は俺と朝倉、右には剣士組が。以上のようにそれぞれ分けるぞ。」

「……問題ない。」

「クラウド、早速行くツスよ！」

指示通りFF組は左の道へと。

「栗頭、さっさとついて来な。」

「何回言えばいいんだ！」

栗頭って言うな！

俺にはちゃんとロクサスって名前があるんだよ！」

剣士組は右の道へ。

「さて、朝倉。」

さっき言った通り『オクルス・コルウイヌス渡鴉の人見』をアイツらに付けてくれ。仲間割れをされるとたまらんからな。」

「了解！アデアット！」

俺達は左右に一つずつ渡鴉オクルス・コルウイヌスの人見がFF組と剣士組をそれぞれ追跡したのを見送り、こちらも移動を開始する事にした。

……FF組は問題ないとして、剣士組は少しヤバいかな、

性格的な意味で。

そして――――

「よし、俺達も行くぞ。

朝倉、準備はいいか？」

「OKだよー！」

「じゃあ行くぜ！」

俺達は真ん中の道を歩き出す。

・・・何もアイツらに起こらなければいいんだが・・・

S I D E シン O U T

第十二話 Xを冠する男と炎を宿す拳？（後書き）

それでは、シンとのお話を始めます。

シン（以下シ）「なあ作者……」

作者（以下作）「ん？どした？」

シ「駄文過ぎやしねえか？」

作「グフツ！いきなりなんつー事を言い出すんだこの主人公（笑）は！」

シ「（笑）を入れるな（笑）を！つーか、今までの全部見ても俺の思考長過ぎだろうが！下手したら二分の一が俺の思考だぞ！？」

作「お前の元俺だから、思考が無駄に長くなるのかもしれないのよ！」

シ「だからって設定変え過ぎだろうが！」

作「仕方ないじゃん！修正かける前アレより酷かったのよ？スカスカでその場のノリで書いたせいで、修正前のなんか見せられないもの！」

シ「お前、今の見ても修正前のじゃねえの？って言えそうなレベルだろうが。」

作「ゲフツ！やかましい！俺の文才じゃアレが限界なの！」

シ「無駄な文が多過ぎなんだよ、お前。」

作「ゴフツ！お前、俺のライフをゼロにする気かバーロー！俺は他の作者のように短い文で簡潔になんか書けないんだよ！」

シ「無駄に長いから読者にもちゃんと読んでももらえてないっぽいじゃねえかよ。感想とかレビュー総じて1個しか来てないのなんか、お前くらいのもんじゃないのか？」

作「それを言うなあああああ！！意外と気にしてるんだから！」

シ「いつか消せ言われて自己嫌悪に陥ってたよな、お前。」

作「昔の話をすんなあああああ！」

シ「・・・なんか弄るの飽きたわ。」

作「散々やつといてそれか!？」

シ「だってワンパターン過ぎるんだからしょうがねえだろ？」

作「それ言っちゃいけないお約束！メタ発言多過ぎだろうが！本当に俺の分身か!？」

シ「一部の性格だけだろ。容姿はほぼ真逆じゃねえか。」

作「あー・・・シンが本編では少ししか出てないS成分めっちゃかもしだしてるよー・・・」

シ「つーかそろそろ時間だぜ？」

作「ゑ！？うわ、30秒切ってるウウウウ！？」

シ「結局作者が弄られたりしてるだけじゃねえか。」

作「お前が途中から弄り出したからだろうが！ってもう15秒切ってるし！」

シ「ま、弄るのは今回限りにする・・・多分な。」

作「多分って何！？多分ってーーーーー！あ、今回はここまでです。また次回！」

・・・ええ、見事なまでに批評された上、弄られましたよ。

他の小説じゃ比較的作者がキャラを弄るのに真逆ってどういうことなの・・・orz

それでは、また次回（未定）！

第十三話 Xを冠する男と炎を宿す拳？（前書き）

前回未定とか書いてましたけど、後々考えたら俺前編二分割してたじゃん・・・と思いだしました。

俺ってバカス。

あ、そうそう、一応前回ゲストとして呼んだシンですが、あのコーナーは毎回やる事にしました。

回数を重ねる事にメンバーが増えていく事になりますね、常識的に考えるとWW

シ「全く作者のアホさ加減はどうしようもねえな！」

作「ちなみに今回以降は後書きだけではなく、前書きにも登場します。」

シ「スルーかよ！」

作「前回俺にした仕打ちの仕返しです（笑）」

シ「まあいいが・・・ここでいったん本編をお送りします。」

作「（できたら）ゆっくりして行ってね！」

第十三話 Xを冠する男と炎を宿す拳？

S I D E クラウド I N

何故こんな事になっているのだろうか・・・

俺はデリバリーの仕事をしているのだが、その帰りにいきなり召喚されたのだ。

何故いつも何か用事がある時に限って呼び出されるのか・・・しかし、放っておく訳にも行かないし、何より重要な用事の時以外に帰還リリースをすると『アレ』をされるという問題があるため、早いところ終わらせるしかない。

嘘を付いてもすぐにバレるので、結局仕方なくやるしかないのだ。さすがに少し憂鬱だ・・・

「はぁ・・・」

「なーに落ち込んでるんツスか？」

「いや・・・今回も強制的に呼び出されてな・・・」

「ああ・・・クラウドって用事がある時ばかり呼び出されるツスよねえ・・・」

・
「ファンリルの走行中に召喚されなかったから良かったものの・・・
もはやここまで来ると意図的に狙ってるようにしか思えん・・・」

過去では本当に走行中に呼び出され、結果フェンリルが大破するという事件が発生した事もある。

シンが時間を戻してくれたからなんとかなったものの・・・そのうち更なる嫌な事が起こる予感がする・・・

「まあオレもブリッツの試合直前に呼ばれた事があるから、他人事とは思えないツスねえ・・・」

ホントあの時はもう少しで相手の不戦勝になるとこだったツスよ・・・」

「お前もか、ティーダ・・・」

「おそらく契約者の大半が何らかの用事の前か途中で呼び出されてるんじゃないツスカねえ・・・」

「多分そうだろうな・・・」

むしろこっちでは10年以上経っているらしいし、そういうので呼び出されてない奴の方が少ないと思うがな。

とにかく早いところ終わらせて帰りたい。

ん、あれは・・・？

「(ティーダ、向こうを見てみる。)」

「え、何スカ？」

「(警備がいる。)」

少し静かにしてろ。」

俺が指差す先には警備が周りを見回っている。

5人でどこか・・・この人数なら何ら問題はないが、どうやって気絶させるか・・・

援軍を呼ばれるのだけは避けたい。

「（ここをどう切り抜けるんスカ？）」

「（とりあえず、二手に別れて見張りを気絶させる。
援軍を呼ばれる前に、できるだけ早く倒せ。）」

「（OKッス！）」

俺達は仮契約カードを取り出し、警備に奇襲をかける準備をする。

「^{アデファクト}来たれ」

俺達がそう唱えると、武器が出現する。

武器を持ち歩けるスペースがないため、元の世界からカードを通じて呼び出す必要があるのだ。

当然だが、武器がアーティファクトではない。

「よし、行くぞ。」

「合点ッス！ Lady go！」

ティーダは持ち前のスピードに加えて、アーティファクトの力になり軽快になっている。
そのため――――

「ぐっ！」

「だ、だr・・・ぐふっ！」

「がっ!？」

「げえふうっ！」

「ぎっ！」

あっという間に見張り全員を気絶させてしまった。

・・・俺の出る幕なし、だな。

どーでもいい事だが、警備全員が行の音を発してるな。

「あっ、ゴメンッス。

見張り全員ぶっ倒しちゃって。」

「気にするな。

むしろ手間が省けた、先に進むぞ。」

「わかったッス！」

・・・正直言うと、何か空しかったりする。

S I D E クラウド O U T

S I D E ロクサス I N

・・・最悪だ、最悪過ぎる。

何が最悪かと言うと・・・

「おい、栗頭。

そこに突っ立ってんじゃねえよ。

さっさと歩け。」

「だ・か・ら俺はロクサスだ！
栗頭とか言うな！」

「フツ、足手まといにならなかったら覚えてやるよ。」

ああああ、コイツ・・・本当にムカつく！

そもそも栗頭と呼ばれるようになったのは、初めて顔合わせした時。初対面なのに何故が仏頂面で俺を見て、「チツ」って舌打ちされたのを今でも覚えてる。

その時はまだ良かったんだけど、その後、用件が終わった後に「足引っ張ってんじゃねえよ、栗頭」って言われてプツンした。

その後は言うまでもなく大喧嘩。

あの時はシンの両成敗で落ち着いたんだけど、神田と会う度何かと衝突が起こるのだ。

そんな事があって神田とは口喧嘩が耐えなく、今現在イライラが収まらない状態だ。

何故そんなに邪険にされるのかと言うと、神田曰く「テメエはモヤシに似てるんだよ」らしい。

アレンに似てるだけでここまで言われるとか、酷いと思わないか？そんな愚痴を口に出さす思っている

「ツ、殺気！」

「え？どうした、神田？」

「いいから隠れろ！」

いきなり神田に首根っこを掴まれて引っ張られた。
当然俺はむせる。

「ゲホッ、ゴホッ、何すんだよ！
いきなり首を掴むなよ！」

「（静かにしやがれ！
お前はこの殺気に気付かねえのか！？）」

「何？」

感覚を研ぎ澄ましてみると、確かにいくつかの殺気を感じる。
・・・10人って所か？

感覚の研ぎ澄ましは、機関にいた頃に少しは鍛えられたから出来る。
少し鈍ってるけどね。

「（確かに殺気を感じる・・・アーティファクトの力を使った方が
いいんじゃないか・・・？）」

「（ハッ、テメーに言われなくてもそうするつもりだ。
さっさとカードを出せ。）」

「（命令すんなし。）」

しかし神田のこの性格、なんとかならないかなあ・・・
いくらシンに言っても「それはどうしようもないな・・・」とか言
ってなかなか対処しないし・・・
それと、「アイツのあの性格は過去の経験が原因と言ってもいいは
ず」とも言ってたな・・・
一体何があってあんなったんだかはともかく・・・今は警戒しない
とな。

「アデアット
来たれ」

俺と神田はアーティファクトを発動し、殺氣の元の方を見る。
姿は見えないものの、間違はなくあちらもこっちを警戒している感
じが見て取れる。

「（いいか、俺が先に攻める。
お前は出て来た奴を倒せ。）」

「（OK、わかった。）」

随分短い作戦会議だと思うだろう？
長引かせると喧嘩になりかねないからだよ。
はぁ・・・どうせならティーダかクラウドと組みたかったよ・・・

「姿を現しやがれ。
そこにいんのはわかってんだよ。」

神田一步出て、そう言うが一切の反応なし。
隠れて攻撃する方が慣れてるって事か。
こういうタイプって、何かと引きずり出すのがめんどくさいんだが・
・
神田なら簡単に出来るだろう。

「は、テメーらがそう来るなら・・・こっちから行くぜ！」

神田は作戦通り殺氣の元へ近付いて行く。
それを見た敵はすぐさまクナイを飛ばして来る。

「フン、こんなのに当たっかよ。
遅過ぎだな。」

神田は難なくクナイを避けていく。
まあ、ただでさえ身体能力高いうえにアーティファクトの力で更に向上してたら、そりゃ遅く感じるだろう。
つまり一言で言うとか、神田の身体能力は普通でも異常って事だ。

「コソコソしてんじゃねえよ！
さいやくしょうらい かいちゅう いちげん
災厄招来 界蟲『一幻』！」

神田は蟲のような形をした斬撃を殺気の元全てに送り込む。
それを危険と察したのか、すばやく回避する。
そして、殺気を出していたと思われる奴らが神田の周りを囲む。

「よく我らを見破ったな。

さすが・・・と言ったところか。」

「よく言うぜ。

殺気をハンパなく出してたクセによ。」

「あれでも我々は抑えたつもりだったんだがな・・・久しぶりに手応えのある侵入者に会えたようだ。

ここは礼儀として、こちらから自己紹介でもしようか。

我らは「墓守り人の宮殿」守護暗殺部隊『闇鴉』ヤミノガラス。

君達の名前も聞こうか？」

「（！？）」

・・・バレてる。

俺がいる事が完全にバレてる。

つまり、これ以上隠れてても無駄って訳だ。

仕方ないな……

俺は身を隠していた壁から姿を現す。

「まさかバレるとは思わなかったよ……俺はロクサスだ。」

「神田だ。」

「暗殺部隊とはいえ、私達が暗殺だけに特化されていると思わない事だ。」

私達は様々な状況に対応出来るように訓練されているからな。」

確かに魔力容量を見る限りそこそこ強いとは思うが……

俺はともかく、神田に勝つのは難しいと思う。

あんな奴でも一応、神の使徒と言われてるからね。

多分マジになったらこの敵達、切り刻まれるぞ。

「御託はいいから、さっさとかかってきな。」

俺は早く終わらせてえんだ、こんな用件はな。」

「ふ、そんな余裕を出せるのも今のうち」「話が長い!」ごはっ!?
バ……バカな……」

悪いけど、話が長過ぎる。

これ以上聞いててもめんどくさいから、さっきまで話してた隊長的なを含めた2、3人は気絶させた。

これだけ倒せば、後は神田が全滅させるだろう。

「何!?

隊長を一撃で!?!」

「アイツの動きに気付かないとはお前ら、本当に暗殺部隊か？

まだ俺にげんがいる世界のAKUMAの方が張り合いがあるぜ？

二幻「八花螳？」はつかとうろう 7連！

「「「「「「ぎゃあああああ！！」「」「」「」

残っていた敵全てが神田の技によって倒れていく。

あの技、懐に入られると、8回連続で切りつけられるんだよねー・・

それを7回連続で使えるとか・・・早過ぎだろ。

正直、俺は食らいたくはないね。

ちなみに、あの攻撃は八つの傷跡を放射状に残すため、神田が斬った敵は全てその跡が残っていた。

この傷・・これヘタしたら死ぬんじゃないか・・・？

大丈夫なのか・・・？

「安心しな、死んでねえよ。

アイツから殺すなど言われているしな・・・

手加減するのはめんどくさかったがな。」

俺の疑問を察したのか、神田が答える。

どうやら手加減はしてたようだ。

それでこの威力なのかよ・・今更ながら、よく喧嘩で俺、コイツと渡り合えるな・・・

まあ、なんだかんだで手加減してるんだから、結構いい奴だn――

「早く目的地に行くぞ、栗頭。
トロトロしてんじゃねえよ。」

前言撤回。

やっぱり腹立つ。

栗頭って言われただけでそんなイラつくなよって思ってる奴。

言われたくもない、人の嫌なあだ名で呼ばれるのは予想以上に腹立つもんなんだよ。

それを、何回言っても直さない、神田のような奴は特に！

「ロクサスって言ってんだろ、いい加減学習しろこのクソロン毛野郎！」

プチッ

・・・プチ？

何か今、何かが切れたような音がした気が・・・

「・・・あ、？」

少し黙れ、このクソウニ野郎が。」

プチッ

・・・ああん？

今、何て言った？

クソウニって言わなかったか・・・コイツ？

今で俺の頭の神経プツンしたわ。

「あゝあゝ？」

お前が黙れ、このパツツンが！」

ブチッ

「栗ウニの分際で調子こいてんじゃねえよ、このクソガキが。」

ブチッ

再び俺の何かが切れた音が聞こえたが、怒りが勝って考える暇はほぼなかった。

「テメエこそ調子に乗んなよ。」

ああ、神田はバカだから学習能力がないんだよね。」

「……テメエ、相当死にてえらしいようだなあ……六幻の錆にしてやるよ！」

「上等だ！」

その言葉、キーブレードで打ち返してやるよ。

お前なんざ5分もあれば楽勝だ……」

「ハ、言いやがったな。」

やってみろよ……それじゃ今から————」

「死合の始まりじゃあああああああ!!!!!!」

バキッ、ベキッ、ピ———・・・・・

——しばらくお待ちください——

S I D E ロクサス O U T
S I D E ティーダ I N

警備を倒した後、新手が来ることもなく順調に進んでいたオレ達だったが・・・問題が発生した。

いや、普通の問題だったら何とかなった、というかむしろその方がまだマシだったと思う。

どういふ問題かというと・・・

「天使なのに黒翼天使なのに黒翼天使なのに黒翼天使なのに黒翼天使なのに（ry」

クラウドが・・・闇人格に入っちゃったんツス・・・
とりあえず、闇人格が何なのかを説明する前に、こうなった流れを説明しようと思う。

（現在から約10分前）

オレ達は運がいいのか新手の警備にも見つかる事無く、順調に歩を進めていた。

そう、ここまでは。

「なあ、クラウドー！」

「いきなり何だ？ ティーダ。」

「聞きたい事があるんスけど！」

「答えられるものであれば別に構わんぞ。

あんまり変な事を聞くなよ？」

「了解ツス！」

クラウドって、あのトラウマは克服出来たんスカ？」

「・・・何のトラウマだ？（何か嫌な予感が・・・）」

今思えばこんな事を不用意に言ったせいでこうなったんだと思う。
もうこの地点で一部の読者は何を言ったかわかるだろう。
ちなみに、何を言ったかと言うと

オレの呼びかけにも全然応じないクラウド。
相当重症スね……。どうしよう。

ヤバい、このままじゃクラウドが本当に壊れる。

いや、しかし今の時点でほぼ壊れた（ry

「ほらほら、早くコレ終わらせて元の世界に戻るツスよ!」

[illegible]

「クラウド！」

目を覚ませ！」

[illegible]

あー・・・ここまで言ったり揺さぶったりしても戻って来ないと
は・・・

こうなったら、最終手段しかないな……「鶴の一声」、やり
ますか。

オレはスーハー、スーハーと深呼吸をし、そして――

「ティファに会いたくないんスカー!?」

言い放った。

一応クラウド限定で使える「鶴の一声」なんすけど……これが効かなかったら、打つ手なしッスよ。

すると……

おや………？

クラウドの様子が………？

「……行くぞ、ティーダ！」

闇クラウドは クラウドに 戻った！ ▼

復活したようです。

本当にありがとうございました。

ホントこれで元に戻ってなかったらもうどうしようもなかったッスよ……

「しかし、ここ何分かの記憶がなんかぼんやりとしかないんだが……
・どうなってるんだ？」

「そ、それはきつと気のせいッスよお。」

「そうか？」

お前が言うなら別にいいんだが・・・」

ちよつと記憶が吹っ飛んでるものの、むしろ都合が良いッス。

本当に元に戻って良かったッス！

んじゃ、再出発と行きます——

「ん？」

念話が・・・？」

——か？

「ティードもか？」

「え、まさかクラウドも念話繋がってるんスカ！？」

一体誰がこんな事を・・・」

オレ達のカードには、一応契約者同士の念話も出来るように作られてる。

まあシンが約3000枚程度のカードを持ってるんで、めっちゃくちゃ念話の通信頻度が多いんスケどね・・・親しいメンバー以外拒否設定してるはずだから・・・親しいメンバーの誰かか？

オレ達はカードを額に付ける。

（おっすおっす！

永遠の20歳児、バツツです！）

（何の用スカ、バツツ・・・）

（釣れないなあ、暇だから念話で雑談でもしようかと思ったのにさ

！。）

（俺達今シンの用件で忙しいンス・・・後にしてくれッスよ・・・）

念話の相手はバツツ。

話す分には問題ないけど、何かトラブルを起こしそうな気がしてならない。

何しろ、わかる人にはわかると思うのだが、バツツはある戦いで一緒にいた時期には時折ムードメイカーになったりトラブルメイカーになったりと、何かと活発な性格だった。

もちろん毎回ではないのだが、今回は確実に何をやらかす予感しかないのだ。

（別にいいじゃんかよお、話すくらいさあ。）

（お前は俺達に片手で戦えと？）

（戦いながらカードを額に付けるのって思う以上にキツインスよ・・・？）

（そんなのテープでカードを額に貼り付けとけばいいじゃん。）

（（その発想はなかった））

見事にハモるオレとクラウド。

つかそれじゃカードが視界の妨げになるっての。

（まあ用件なら雑談はいいや。
そろそろ念話も終わらす。）

「・・・・・・・・・・」

嫌な予感が当たりやがった・・・・・・
現在、警備に一切出くわす事無く、普通に目的地に近付いている俺達。

つか、よく警備に出くわさないと疑問に思えるのだが、フラグが立ちそうなのでこれ以上何も思わない事にする。

そんな事より、今朝倉を中心に展開する『オクルス・コルウイヌス渡鴉の人見』に雲雀とF組と剣士組を捉えた様子があるのだが・・・・・・・・雲雀以外、映ってねえ。

というか、『しばらくお待ちください』なんて文字が表示されてる始末。

「ん？シン、どうし・・・・ああ、剣士組は大喧嘩で破壊されて、FF組はティーダ君のブチギリタイムで自粛中になってるね・・・・こればかりはどうしようもないよ・・・・」

「・・・・・・・・なんか俺のストレスがマッハになりそうだよパトラッシュ・・・・・・・・」

「ドンマイとしか言えないね・・・・（というか、何故にパトラッシュ？）」

予想はしてたけども、どうして本当に起こってしまうのか・・・・雲雀のも普通なら破壊されてもおかしくねえし。

全く・・・・俺達は遭遇してないとはいえ、ここは敵がいるんだぞ・・・・・・・・
見つかったらどうするつもり・・・・・・・・

「いたぞ、侵入者だ！」

・・・・・・だ？

直後、大量の兵士らしき奴らが俺達の周りを囲む。

ええええええええええええええええええええええええ！？

ちよ、嘘！？

フラグまた立ちやがったよ！

アレフラグ未遂じゃなかったのかよおおおお！

しかし、雲雀が大半の兵をおびき寄せてるはずだろ！？

それでこの人数って・・・300人くらいいるんですけど。

多過ぎワロタと言わざるを得ないわ！

「我らは精鋭部隊『墓守ノ守護者』だ！

速やかに投降しろ！」

ナンジャコリヤ・・・有りがち、有りがち過ぎるぞー。

精鋭部隊が300人もいるって多過ぎワロタ、ガチで多過ぎワロタ。

大事な事なので2回言いました。

ホント、ガチで。

・・・まあ、倒せなくもないな。

魔力容量1人辺り約500と魔法世界編初期のネギクラスだし、なんとか対処出来るだろう。

冷静になれば、全然問題ない。

「投降？

そんな事する訳ないだろ、俺は武器を探しに来ただけだ。

避けてくれれば怪我人を出さずに済むが・・・？」

うわー、自分でやっというてなんだけど、悪役っぽいセリフになってるな・・・

まあこう言っても引き下がる奴など普通に考えてもいる訳もなく

「何を意味の分からない事を！
総員、かかれー！」

こうなる訳よ。

ったく、どうしてこういうセリフをいうと、こんなワンパターンになるのかねえ・・・？

こことかは普通にテンプレの壁ぶち壊してもいいだろうに・・・ま、向こうは俺の忠告を聞かずにかかって来たんだ・・・多少の怪我は我慢してもらおうぞ？

「朝倉、全員倒すからそこでジッとしててくれ。」

「わかった、出来るだけ動かないようにしておくよ。」

「んじゃ、ほいっと。」

俺は縮地で精鋭部隊とやらの一人の後ろに回り、手刀を当てる。

「がはっ・・・！？」

達人がよく使う手口だが、実際やってみると、なるほど、これは使えるなとつくづく思う。

手刀を入れた奴はすぐに気絶する。

そして再び縮地で、次の敵の背後に移動する。

今度は背中に魂威を叩きこむ。

ソウルイーターのシュタインなどが使っていた技だが、普通の掌底より比較的少ない威力で倒せるので、効率がいい技だ。

そこから俺は縮地で移動、攻撃を繰り返す。

すべての敵を叩き、殴り、潰して行く。

ちなみに何人かは股間に蹴りを入れといた。

ソイツらは言うまでもなく昇天した。

精神的な意味で。

悪いけどこれは一番、ダメージが少なくて楽なのよね。

まあ、不能になったらサーセンとしか言えんが。

そして約5分後————

「な、何をやっている！

早くソイツを倒————」

「おい、後はテメーだけだぜ？」

「え・・・なっ!？」

隊長らしき奴以外全員を俺は倒していた。

コイツら本当に精鋭部隊か？

下手したらさっき言った時期のネギより雑魚いぞ？

あんまし体力とか魔力消費しなかったからいいけどな。

「隙だらけなんだ・・・よっ!」

「・・・・っ!」

隊長らしき奴に掌底を鳩尾に入れて、気絶させる。

「ふう・・・思ったより消費しなくて良かった・・・朝倉!大丈夫か？」

「うん!こっちは問題なかったよー。」

よし、あっちにとぼっちは来なかったようだな。
問題は……

「アイツらに付けた渡鴉オクルス・コルウイヌスの人見の様子は？」

「剣士組に付けた方は修復終了して復活したんだけどさー……」

「FF組は未だにアレか……」

朝倉はコクリと頷く。

いや、予想はしてたけども。

クラウドがあの状態になったら、なかなか元に戻らないし。

ロクサスと神田が喧嘩終了してたのはちよつと予想外だったが。

しかし、普通ならティーダが戻して万事解決なんだが……

ティーダがブチギレてた辺り、こりゃあバツツのアホが関わってやがるな……

バツツは実力に関しては、ジョブマスターと言う能力があり、万能力に長けてるんだが……

性格が問題なんだよ……原作を俺が知らないからか、DFF仕様になってたな……

ムードメイカーでもあり、トラブルメイカーでもあるのよ……

多分、面白がってクラウドにセフィロスのワード言ったな、コリャ。あのクラウドは、メンタルが異常に弱くて、セフィロスに関するワードが入っただけで闇モードになるというめんどくさ過ぎる仕様になってるのだ。

女神の遊び心なんかねえ……一部の契約者にニコ動での仕様が入ってる感じがあるんだよね……

バツツもその一人であり、たまーに黒くなったりもして、ちよつと扱いが難しい奴なのだ。

だが、そういう奴はガチでキレるとやはり怖いもんで・・・

確か、この前ジタンがバツの事をフラグクラッシャーとか言った瞬間、即EXモードになった事があった。

あの時は引き止めるのに苦労したなあ・・・

とにかく、早くFF組復活してくれる事を祈るわ・・・

俺達は俺達で、初代女王の墓を目指さなきゃならんし。

・・・再出発しますか。

S I D E シン O U T

第十三話 Xを冠する男と炎を宿す拳？（後書き）

シ「俺以外のキャラは比較的あっさりとした思考だよな。」

作「まあシンは性格だけだけど、俺ベースだからね。思い入れが強い分、思考も濃くなるのさ。」

シ「自分の思考なのに本当に濃過ぎると思えてしまう件」

作「俺がベースだから仕方ない件」

シ「で、修正作業はどこまで進んでるんだ？」

作「現時点では修正が終わったら大抵はすぐに投稿するからね。今回ののはついさっき終わったばかりのモンだよ。」

シ「おま・・・一応修正前の奴、8人目の途中までなのに・・・
・本当に原作や大戦どころか、思念編を終わらせられるかどうかすら疑問だよ。」

作「作者の創作意欲が続く限りは投稿し続けるよ。問題は・・・」

シ「問題は？」

作「修正してるだけで、新しく話を書けるかどうかってどうかなんですよねー・・・」

シ「重大な問題じゃねえかよ！」

作「いや、出来るだけちゃんと書くつもりだよ？一応ストーリーは頭の中で展開されてるから、なんとか書けるとは思う。」

シ「その辺は作者に任せるとして、万が一クロスとかの要望来たらどうするつもりだ？」

作「一応シンが40年前までパラレルワールドを周るという事までは考えてるんだが・・・他の作者さんが持ちかけてくれる事って皆無だと思っただよねえ・・・」

シ「つまり、知名度上げないと余計来ないって事か？」

作「そうなるねえ・・・ちなみにこっち（修正後）しか見てない読者は知らないから言っときますが、この作品、ある作品とコラボしてるんですよ。」

シ「そのある作品の主人公は、たびたび物語の中に出てくる『賞金首』なんだよ。」

作「まあ向こうはシンとの関わりがないお話なので、この物語はそのお話にシンが更に介入してるっていう話なんですよ。まあこれもパラレルワールドの一種ですね。」

シ「ちなみにその作者はこのサイトでは書いてなく、現在は個人のサイトで書いてるぜ。」

作「どこにあるか書いておきたいところなんですが、その前に本人に許可取らんなあ・・・」

シ「まあ似た展開とかあるからねえ・・・デジャヴを感じたのも、

それが元であつたりする。」

作「少しネタバレですが、間章でその『賞金首』の仲間の1人と戦う事になります。」

シ「少しなのかそれ!？」

作「当時その仲間の一人の描写書いてたら、その作品の作者とは別のそのキャラを考えた人から「キャラが違う」って言われちゃいました……」

シ「作者は別の作者が書いたキャラの描写が苦手だからな。おかげでその仲間の思考の一部がBエ r……」

作「やめえええええい!」

シ「とりあえず、後編は出来るだけ時間かけんなよ!」

作「うん……出来るだけ善処するよ……今回はここまでです。また次回!」

何度も言いますが、ガチで文才が欲しいです。

他のネギま小説書いてる作者達天才過ぎるだろ……

今回は出来れば半月以内に書ければいいと思っています。
ではまた次回!

第十四話 Xを冠する男と炎を灯す拳？（前書き）

前の話の投稿から奴二ヶ月・・・
もうここまで遅くなっても未だにお気に入りに入れてくれてる人に
感謝してます。

シ「お前はただでさえ遅筆なのにニコ動とか見まくってるからそう
なったんだろうがアホ！」

蒼「いや・・・それはしょうがないのよ・・・ニコ動が面白いから
S「言い訳無用！読者を待たせた事を考えろ！」はい、そこら辺は
マジで反省してます・・・」

シ「で、やっと3人目のお出ましたな。」

蒼「うん、なんとか今年中に投稿出来てよかったよ。」

シ「それでは本編、どうぞ！」

第十四話 Xを冠する男と炎を灯す拳？

S I D E 神田 I N

クソ面倒くせえ。

何故俺を呼んだのかが理解できん……呼ばれただけならまだ少しは我慢出来る。

だが、何故こんな栗頭と一緒にいないとなんねえんだよ！モヤシに似ている上に、モヤシ並みに腹立つ野郎だよ。しかもついさっきまで俺達は大喧嘩。

それが原因で、現在俺達はボロボロになっている。

ちっ……栗頭を見るとアイツの事を思い出す……あの頃を……

んな事を考えてると栗頭が

「おい、神田！」

「……どうした？」

何かあったのか？」

「あれって……FF組じゃないか？（あれ？険悪そうな表情を取るかと思っただが……）」

向こうを見ると、あの2人がいた。

しかし、明らかに片方の様子がおかしい。

というか、何故アイツらは左、俺達は右に行ったのに遭遇してんだ？

この宮殿の構造、おかしくねえか？

……俺の世界でもイノセンスによる奇怪があるから驚く程でもないが、魔法は架空のものだ。

魔法が実在する世界など、俺の世界の連中からすれば非常識としか
言いようがない。

実際に、その世界に呼ばれなければ、な。
それはとにかく、話し掛けるか。

理由？

このまま立ち止まられると、帰還^{リリース}出来る時間がその分遅くなっ
ちまうだろうが。

俺は早く帰ってえんだよ、元の世界に。

「おい、そこでどうしたんだ？」

栗頭が呼びかける。

見ただけで把握できるだろうが！

どう考えても面倒な事しか起きてねえよ！

「あ、助かった・・・ちょっと問題があって・・・手伝ってく
れないッスか？」

「問題だと？」

俺と栗頭はもう一人の方を見てみた。

そこには・・・

「サスペンダーサスペンダーサスペンダーサスペンダーサスペン
ダーサスペンダーサスペンダーサスペンダーサスペンダーサスペ
ンダーサスペンダーサスペンダーサスペンダーサスペンダーサ
スペンダーサスペンダー（ry）」

「・・・・・・・・」

ナンジャコリヤ。

どうしてこうなってる？

まさか予想の斜め上行ってるとは誰も思わなねえよ……
まず過程がわからなければ把握できん、論外過ぎる。

「一体どうなってる？過程を説明しろ。」

「実は……」

（約5分後）

かくかくしかじかで話が省略されと思ったのか？
一回出直して来な。

「……要するに、クラウドは今闇人格になっちゃってるって事なのか？」

「……そのようだな。」

こんな時になんでこうなった……頭痛くなる……」

ただでさえ栗頭と一緒にいてイライラしてんの……ストレス
で髪が抜けかねえ勢いだ……

コイツらは俺の足を引っ張るどころか千切る気か！？

「最初は「鶴の一声」で復活したんすけど、ある奴のせいで元に戻
っちゃって……「鶴の一声」も効かなくなっちゃったんすよ……」

」

「「あるバカ？」」

チツ、なんでここでハモリやがる。

ここが更にモヤシに似ててイライラしやがる・・・モヤシともよくハモるのだからムカつく事この上ねえ。

・・・心の中で愚痴ってる場合じゃねえな。

早いところなんとかしねえと・・・

「で？あのバカってのは誰の事だ？」

「バツツの事ッスよ・・・一回直ったクラウドと移動を再開しようとしたら、念話でバツツが話しかけて来て、クラウドのトラウマをえぐり返したスよ・・・」

「遠くでなんかブチギレたような声が聞こえたのはティーダだったのか・・・」

・・・シメてえ。

原因を作ったクラウドザーを殴りてえ。

しかも、それを聞いて更に髪どころか血管が本当に切れそうになった。

用件に応じるたびに、ストレスで本当に髪が抜けそうになって来やがるんだよ！

さすがに耐性は多少付いてきてるものの、これだけ連発でイライラさせられると殺意が湧いてくるのは言うまでもねえだろう。

「おい・・・」

「な、何スカ？」

「ソイツとオレを念話で繋ぎやがれ。」

「え？ いいッスけど・・・どうしたんスカ？」

「いや・・・クラウザーを血祭りに上げてやろうと思ってなあ・・・」

「・・・えっ!？」

「ちよっ、いきなりなんつー事言ってるんスカ!？」

「契約者同士の戦いは喧嘩までOKであって殺し合いはご法度だぞ!？」

第一、シンしか召喚使えないんスよ!？」

どうやって血祭りに上げる気なんスカ!？」

「さっきまで喧嘩という名の殺し合いだっただろう・・・？
今からやる事も同じだ・・・それに、奴なら快く召喚してくれる
だろうよ。」

断ってきたとしても、無理矢理召喚させてやる。

『アレ』なんざ知った事か。

俺は今腹が立ってるんだ。

「いや、確かに殺し合い寸前になってたけども!
しかもシンに召喚してもらおう気満々だし!」

「つーかまたアンタら喧嘩してたんスカ!？」

ここで対応しないと、本当に斬られると。

「し、承知しましたアアアアアアア！
テレパディア
念話！」

ティーダは即行動に移す。

（おい！バツツ！）

（ん、どした？

さっきの事なら謝っただろ？）

（謝って済む問題じゃねえッスよ！
とりあえず、本題に入るッスよ？）

（あー悪い悪い！ホントそこら辺は反省してるからさー！
で、本題って何だ？）

（・・・本当に反省してるんスか？まあ、いいッス。
今からある人と念話で繋ぐけど、バツツ・・・心の準備をしないとッスよ？）

（は？何で心の準備をする必要があるんだ？）

（聞けばわかるから！とにかく繋ぐッスよ！？「今にも斬りかかり
そんな形相で神田が睨んで来てるから早く繋がってくれッスー！」）

（はいはい、OKOK。
雑談でもすればいいんだろ？）

（そんなところッス．．．〔雑談で済めばいいッスけどね．．．合掌。〕）

「はい、繋がったッス．．．」

繋がったようだな。

これで溜まったストレスを発散できる．．．

「これでクラウザーを殺れるわけか．．．」

「（おいロクサス！また物騒な事言っちゃってるッスよ！？
なんとかしてくれよ！

お前、渡り合えるレベルじゃんか！）」

「（無茶言うな！

俺もキレてる状態ならともかく、今の状態で神田と戦ったら確実に俺が殺されるわ！）」

「（とにかく、ここは様子を見た方がいいようッスね．．．（汗））」

「（そうだな．．．死にたくないし。）」

2人は神田の様子を窺う。

（おい、テメエ。

何の話だか、わかるよな．．．？）

（ん？神田か？

お前に余計な事した覚えはないんだけど？）

（ヤツから話を聞いた。

めんどくせえ事をやらかしたくれたな、クラウドザー……………）

面倒事ばかり起こしやがって……………

ちゃんと謝って対処してくれるんなら殴る程度に収めてやってもいいんだが……………

一発ぐらい殴らねえとイライラが収まらん。

（あー、あれからクラウドのメンタルが更に弱くなったって話を聞いて、冗談半分でセフィロスの事聞こうとしたんだよ。

まさか、一言だけでなるとは思ってなかったけどな。

まあ、面白かったし、謝ったから問題ないだろう？）

ブチ

「……………ブチ？」

「（な、何かが切れる音がしたけど……………？）」

「（もう嫌な予感しかないッス……………！）」

「つーか……………」

「というか……………」

（（もうバツの死亡フラグがビンビンに立ってる予感しかない
！））

(デメエ……ちょっとツラ貸せ。)

(……え?)

「オイ、栗頭。

シンとも念話を繋げ。」

「わ、わかった………(栗頭って言われてムカつくけど、逆ら
ったら……絶対斬られる!)

テ、念話………テレパディア(い、生きた心地がしない……(汗))」

面白がってんじゃねえよ、アホクラウザーが!

あ、あ、あ、あ、あ………何て俺の周りにはこんなウゼ

エのが多いんだ!

さっき言った通り、

(ん……誰だ?

こんな時に。)

(か、神田が……お前に繋げって言ってきて………なんとかし
てくれないか?)

(……OK、ある程度把握した。

大方バツツ絡みなんだろう？)

(俺まだ言っていないのによくわかったな!?)

(何年契約者達を見てきてると思ってるんだ。

これくらいわかるのは当然だったの。「ぶっちゃけ原作見て性格を把握してたからってのもあるけどな・・・」)

(とりあえず、神田をなんとかしてくれないか？

このままじゃ、バツツが殺られかねないんだけど・・・)

(んー・・・悪いけど、それはほぼ無理だな。

毎回毎回俺が用件出す時に何故かイライラさせられるメンバーばかりで構成されてるし、むしろよく今までマジ切れしなかったなと疑問に思ってるくらいだ。

しかも、今回はバツツときた。

トラブルを良く起こすし、アイツは一回フルボッコにされた方がいいと思うぜ?)

(・・・バツツが殺られないように見張らせてもらおうわ・・・)

(とりあえず、神田と話せばいいんだな？

切り替えさせてもらおうぞ。)

「(わかった。)・・・繋がつたぞ。」

これでもう少しでクラウドを血祭りに上げる事が出来るな・・・

(オイ、シン。

テメエの召喚でクラウドのアホをこっちに召喚しろ。)

（え！？神田オレに何する気！？）

（ああ、いいぜ。

正直バツもおイタが過ぎてきてるしな。

お前がやらないならそろそろ俺も『アレ』をしようかと思ってたところだった。）

（あのー・・・一体オレに何する気なんスカ・・・？）

（バツ、神田に血祭りに上げられるか俺に『アレ』されるのと、どっちがいい？）

（え、ちょ・・・『どう足掻いても絶望過ぎる！』）

（どっちを選んでも、ボコボコにされるのは確定だ。

ただ、程度だけなら選ばせてもいいって言ってるんだ。）

（えーと・・・俺が責任持ってクラウドを直すって選択はないんですかk（ねえよ）デスヨネー・・・）

（オイ、んな事はいいいから早く呼べ。

もう限界突破しそうなんだよ・・・！）

（ん、前言撤回、バツ。）

（な、なんでしょうか・・・？）

（お前、神田にフルボッコされて来い。）

（え、待って（召喚 バツツ・クラウザー）あ、人生オワタ……）

(ゆっくりフルボツコされていてね☆)

「ギニャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアア！！！！」

直後、墓守り人の宮殿中にバツツの悲鳴が響いたと響かなかったとか……

—— ゆっくり自主規制していったね ——

SIDE
朝倉
IN

SIDE
神田
OUT

「あ……また剣士組に付けた方が……」「ゆつくり自主規制していったね」って……
一体何やったのあのメンバー……」

しかも人が出したとは思えない悲鳴が響いてきたし……

「今頃神田がバツツをフルボッコにしてるんだろうよ。

神田の気が収まるまではそのままだと思うぜ？」「まあバツツを召喚したのは言うまでもなく俺なんだが……」

「全く、今までで一番トラブルが多い気がするよ……」

アタシたちは、あの後急激に増えた警備を撃退（全部シンがやったけど）して、既に目的地である初代女王の墓の前に到着した。

そして、残りの二組＋雲雀君を待つ事になったんだけど……見ての通り、二組は立ち往生。

雲雀君は、警備を次々へとV^{ボンゴレギア}Gでなぎ倒すという荒業を出している。

「しかし、遅いな……」

「剣士組とFF組はアレだからね。

雲雀君は、警備の数もあってか、まだまだ掛かりそうだし。」

「つか雲雀ホントに半端ねえな……半分の警備は潰してるぞ。戦闘民族だけはあるわ……」

雲雀君はホントにヤバイね……魔族をボコボコにした程だから、シンが戦闘民族っていうのも頷けるしね。

というか、雲雀君のいる世界って、あんなのがゴロゴロいるものなのか……？

「……そろそろ待ってるのも限界だな。

俺は先に初代女王の墓に行く。

お前らは俺が戻って来るまでここにいてくれ。

一応、強力な物理兼魔法障壁貼っとくから、安心してくれ。」

「わかった、待機しとくよ！」

この先に異世界の武器があるんだよね……見てみたいけど、行ったら巻き添え食らいそうだし……
戻って来たら見せて貰おうかな。

S I D E 朝倉 O U T

S I D E シン I N

……さて、ついに目的地に到着だ。

一人目はハセヲ、二人目はエルザ。

果たして三人目は——一体誰かな？

墓の中心部を見ると今までとは違う穏やかな、包容感を感じさせる存在がいた。

『やあ、ついに来たね。

待っていたよ。』

「へえ……三人目はお前か。

意外だな、お前が選ばれてるなんて……」

『ホントは戦いたくはないんだけどね……そうも行かなくてさ。』

「そうか……じゃ、いきなりで悪いが、武器を貰うぜ——」

ツナ！」

沢田綱吉。

ボンゴレ10代目にして、初代ボンゴレの直系の子孫。

様々な戦いを乗り越えて尚、その優しさを失わない心を持っている。
超死ぬ気モードでは普段とは打って変わって冷静沈着な言動が目立
つが、それでも戦闘中ですら非情になることはなく、相手に対し同
情することもある。

『オレが君の契約者になってからかなりの年月が経ったね……』

「何の話だ？」

『オレが本体から独立した存在になってから、かなりの時が経った
って事だよ。

ハセヲも言ってただろう？

オレ達思念は未来の本体から独立した存在だという事を。』

「ああ……聞いている。

だが一つ聞きたい事がある。

一体思念は、後何人残ってるんだ・・・？」

いくらなんでもあれだけの強力な思念を本体から分離させるなんて無理があり過ぎる。

アレはもはや複製のレベルだぞ！？」

まあ、おそらく本体と思念とは全く別の進化を遂げているのだから・・・。

『そうだね、教えた方がいいね。』

君も残っている思念の人数を知らないと苦労するだろうしね。

後六人だ・・・オレも含めて、後六人が残ってる。

オレと、同じような思念が。』

「六人・・・だと？」

よかった・・・よくある人数に設定されてて・・・

これで後10人以上いるとか言われたら探すのに何年掛かるかわかったもんじゃないわ。

それだけがわかっただけでも収穫だな。

『もう一つ、教えてあげるよ。』

オレ達思念は、未来のキミによってこの時代に送られてきた。』

「・・・だろうな。」

こんな事が出来るのは未来の俺か、同じような転生者くらいだろうよ。」

正直、俺は普通に前者だと思っていた。

後者に関しては、俺を強くする理由なんてないだろうし、何より俺の知る限り、この世界には俺とはつきりはしていないが、伝説の賞

金首と称される奴ぐらいしか転生者がいない。

だが、こんな事を簡単に出来るなんて未来の俺、どれだけ強くなつてんだよ!?

最低でも本体と思念を分解する能力、時空移動は必要な筈だ。

時空移動はカシオペアなどを使えばともかく、本体と思念を分解する能力なんて聞いた事がねえ。

そもそも、人為的に分解するなんてほぼ不可能だ。

いや、今はそんな事を考えても仕方ねえな。

今は——ツナを倒す。

「興味深い話をありがとよ。

じゃ……そろそろ始めてもいいか?」

『こういうのは気が進まないんだけどね……未来のキミからの

頼みだから断れなかったんだ。

相手をするしかないね……来たれ!」
アデアット

俺は戦闘態勢を取り、ツナも仮契約カードバクティオーを発動する。

え? 何故アイツだけ仮契約カードバクティオーを発動して最初の二人は発動してなかったって?

答えは簡単、アイツ等は俺と出会った時既に発動させていたからさ。

もつとも、ツナを含めた3人のカードはコピーカードを更にコピーした仮契約カードバクティオーのようだが、それでも本体達の持つコピーカードと違いはないだろう。

しかし……伊達に未来の姿の思念だけあって大したもんだな……

包容感が今のツナと比べ物にならないくらい異常に高い。

まるで、暖かい風に包まれるような、そんな感じだ。

実力もそれに見合う力を持っているのもわかる。

『それじゃあ、始めるぞ。』

「ああ、よろしく頼む・・・ぜっ！」

よし、先手は取った！

雷速瞬動程ではないが、縮地レベルのスピードで俺は突っ込む。そして、もう少しでツナに一発当てる所まで来た——のだが

『もっとスピードを上げて来い。
遅過ぎるぞ？』

「何！速い！？」

後ろに回りこまれる。

ん・・・雷速瞬動を使っていない普通の状態とはいえ、後ろに回り込まれるとは・・・

やっぱりツナのスピードについて行くのには雷速瞬動で行った方がいいか・・・？

しかし、使うのはもうちょっと後に取つときたいし・・・

『雷天大壮でも使ったらどうだ？』

それ以外にオレのスピードには追いつける方法はないんだろ？』

いや、あるにはあるが、数えるくらいしかない・・・って！

「心を読んだか・・・読心術とか、反則だろうが。」

『いや、たまたま読めただけだ。

俺の読心術はリボンと違って、不完全だからな。』

不完全とはいえ、読心術が出来るっていうのは結構なアドバンテージになる。

特に俺みたいに思考とかが無駄に長いタイプにはな。それはともかく、何か武器を使わんとな・・・

「そうか。」

生憎だが、雷天大壮はまだ使わん。

だが、術式兵装は喜んで使わせて貰うぜ！
まずはこれをぶっ放す！

ドゥアーブス・エーミツサエ
双腕解放

デクストラ・スタグナンス エンシス・エクセクエン
右腕固定「断罪の剣」

右腕に断罪の剣を。

シニストラ・スタグナンス
「左腕固定「光ノ深淵×2 闇の始まり×2」」

左腕には光と闇の魔力の塊をそれぞれ2つずつ。

ウニソネット
「術式統合！」

カワルケン
「――狭間ノ剣。」

俺は両腕に解放したものを統合する。

そして、出来たのは――光と闇がの属性が混じりあった、灰色の剣。

ちなみに光ノ深淵と闇の始まりは、エルザの時にも出したが、ハセヲとの戦いの時の後、記憶が鮮明に残っているうちに習得しといた。

そして、俺はエルザが使っていた武器の一つ、夕凧を出す。
右には狭間ノ剣。
左には夕凧。

この二つををさらに————

「融合——————夕凧ノ狭間。カワルユウナギ」

狭間ノ剣を夕凧に取り込ませ、夕凧に灰のオーラが混じる。

ホントはエクスカリバーでやってみたかったんだが、なんせあの性格だからな・・・相手にしたくねえ。

GETしてからずっと放置の状態だし。

調きよ・・・教育しとかんといかんー・・・

融合に関してはほぼ術式統合をベースにしたやり方でやれば『十字架ノ眼』クロス・アイで弄らなくても簡単に出来る。

しかし、エルザの武器・防具の倉庫を漁ってたんだが・・・原作で出てない鎧、持っていたのが闘神の鎧以外にもあったんだ。

「換装、迅速の鎧。」

迅速の鎧には、相手のスピードを見て、それを越えたスピードで動く事が出来る鎧である。

これを使う事で、雷天大壮を後にとっておくのだ。

ただ、さすがに雷速クラスのスピードだと、鎧が耐えきれずに壊れてしまう。

ま、ツナのスピードを見る限り、多分なんとかな————る？

「ゑ・・・鎧にヒビ？」

『遅い！魔法の射手 集束・炎の500矢 X イクス ブレイク BREAK！』

「しまっ……ゴフウウウウ！」

俺は思いつ切りぶっ飛ばされ、壁に激突する。

アイツスゲー速いな……。どうやってその領域に至ったのかはわからんが、雷速レベルのスピードを手に入れてやがる。

完全に迅速の鎧で対応出来るスピードを越えてるわ……。しかし、やはりコイツも魔法の射手とか使えんのか……。しかも火じゃなく、炎。

火より上位の魔法の射手か。

……。面倒くせえが、このままじゃハセヲの時の二の舞になりそうだし、雷天大壮を使うか。

第十四話 Xを冠する男と炎を灯す拳？（後書き）

蒼「・・・切り方が雑だと我ながら思うよ、話を三分割もしたからかさ・・・」

シ「修正度も異常なレベルだなコレ・・・」

蒼「最終的には約28000字とか・・・今までの最高記録だよ・・・しかもこれ・・・後編だけでなんだぜ・・・？」

シ「これ下手したら更なる記録更新しそうだな・・・」

蒼「とにかく、今日は三分割した一つ目のみ投稿し、明日は二つ目、明後日に三つ目を投稿します。」

シ「その方が読者も楽しみにしてくれるだろうしな。」

まあ、楽しみにしている読者がいるかどうかは疑問だけど。」

蒼「いや・・・そこは言わんといってくださいえ・・・（汗）」

シ「つーか普通なら感想の二つや三つ貰えるもんだが・・・遅筆過ぎて未だに初期に貰った一つだけじゃねえかよ！」

蒼「ぐぼあ！ホントサーセン・・・」

シ「こんな馬鹿作者ですが、数少ないお気に入りに入れてくれる皆さん、これからもよろしく願いします！それでは・・・」

蒼・シ「また次回（明日）！」

第十五話 Xを冠する男と炎を灯す拳？（前書き）

少し時間が遅れましたが、予定通り二つ目を投稿します。

ちなみにタイトルの数字がいままでと違うものになっているのはP
SPでやってるからです。

シ「そこら辺は後で修正するらしいので安心してください」

蒼「後、感想欲しいとまでは言いませんが、せめて誤字脱字などを
報告してくれたら嬉しいです
それでは本編を・・・」

蒼・シ「どうぞ！」

第十五話 Xを冠する男と炎を灯す拳？

キーリブル・アスネタダネットコンプレクシオ中・アルマデイオーネー・アウトラスター・ヒガトギ母ナメネー
「千の雷 固定 掌握 術式兵装 雷天大壮！」

しかし、今までの思念の戦いで雷天大壮何回も使ってるよな。
使いすぎても見栄えがないし、今度縛ってみるか？
ま、4人目の戦いまでには考えとくか・・・

「これでスピードは互角だ。
さて、スピード勝負と行こうか？」

『望む所だ。』

スピード対決になってもおかしくはねえが、それを含めたパワー対決になりそうな気もするな・・・

実際、ツナは普段の状態からでは想像しづらいだろうが、スピードとパワー両方を兼ね備えた万能に近いタイプだ。

現時点ではXグロブはまだver. V. Rだが、ボックス匣があるし、少なくとも初代の武器は使えると考えてもいいな。
んじゃ、今度は剣技で行くか。

「時雨蒼燕流 攻式 五の型 五月雨」

俺は五月雨をツナの腹に峰打ちしようとする、が――――

『遅い！それでも雷化してるのか？』

「ちっ、やっぱり避けられるか・・・！」

またもやあっさりと回避された。

前言撤回、コイツの速さは既に雷速どころか神速の域に入ってる。

死ぬ気の炎は純度が高く、炎がデカければデカい程優れた力を発揮する。

コイツに至っては炎が大きいだけではなく、純度も透き通るようなオレンジの炎、純度が半端じゃない。

半透明になる程の純度なのだから。

俺も同等クラスの純度ぐらいだが、俺みたいなバグキャラでないツナがここまで純度を高くなっているのはかなりのものとも言える。
だが……

「そうだな、雷化の本領、見せてやるぜ！
オラァ！」

『ク……ッ！』

俺は今雷化している。

これがどういう意味を持つかというと——剣を持った方の腕を一時的に離してツナに切りかかったのだ。

よし、少しひるんでる。

ここから……！

ベルフェクトウス・プラムヤ手前オレンネム
「術式解放 完全雷化！」

腕を再び体にくっつけ——

チハヤブリイカヅチ
「千磐破雷——！」

雷をツナに解放する。

この影響で雷化が解除される。

「まだまだまだあ！」

そこからさらに後退し、ディレイ・スベル遅延呪文を発動。
両手に装填した魔法を解放する。

エーミツタム・エト・ヌタダネツチンベスタヤタラカ形ダオエンヌルゴエリネント
「解放固定 雷の暴風 雷の投擲 術式統合！」

ティタノクトノン ヤクラーティオンヌル子テギス・
巨神ころし？ 暴風の螺旋槍！

行くぜ———オラァ！」

術式統合した暴風の螺旋槍をツナに向けて投げる。
そして、ツナの腹に突き刺さる。

『痛っ……！』

どうやら貫通はしてないようだな。
普通は人くらいの大きさなら貫通どころか真っ二つになってもおかしくないレベルなんだが、貫通してないって事は、肉体の強度が高い事と、大地の重力コーティングをしている事が大きいか……だが、抜かせる暇は与えねえ！

エーミツタム
「解放。
トゥルボトルフ勝ダーシネイス
抉れ雷の狂嵐！」

——瞬間、槍を中心に瓦礫が、壁が———そしてツナが抉られるように吹っ飛ぶ。

……やっべえ、やり過ぎた。
死んでねえよな？

あ、思念だから、消滅してねえよな？ だったか。
ってんな事はどうでもいいわ！

俺はツナの様子をおそろおそろ見る。

……ツナの体が見事に横に真っ二つになってた。

「あの肉体強度なら大丈夫だとは思ってたんだが……やっちゃまったな……」

エーミッサ・スタグネキトリブル・アストラベール
解放固定 千の雷」

とりあえず、念のため遅延呪文を発動し千の雷を解放して掌握する。
ちなみに断面を見る限り、エグいもんでなく、アーウェルンクス
シリーズにたような構成になっている。

クウアルトゥム クウイントゥム
つーか四番目と五番目みたいに断面が見事に挟れてるよ……
消滅はしてない限り生きてるはずだが、さすがにあれだけ損傷を受
けてれ———ば？

さっきまでいたはずのツナがない！？

少し目を離れたスキに一体どこに……！？

『まだ終わってなんかいないさ。』

「はっ、しまっ……！」

グラディウス・デオウメヌス・アルデンティス
『燃え盛る炎の神剣！』

はあっ！』

無詠唱の燃え盛る炎の神剣！？

マズい！

急いで障壁を……！

レインボーバリア
「虹楯！」

よし！なんとか貼れ「バキン！」……バキン？
直後、俺は吹っ飛ばされる。

「いっつ……！？」

飛ばされながらも俺はツナを見る。

嘘……だろ！？

体がくっついてやがる！

まさか治癒か？

いや、いくらなんでも治癒クイラであのレベルの傷を治すのは不可能だ。

上半身と下半身が真っ二つになってたんだぞ？

普通なら死んでるレベルだ。

思念だから、当然こんなあっさり終わるわけがないと思ったが……

・予想以上にキツイ戦いになりそうだな。

え、なんでこんなに思考が長いかって？

……わからん！

って、壁がすぐそこまで来てるウウウウ！

「雷速瞬動！」

すんでの所で壁の激突を免れた俺。

まあ、激突しなかったのはいいんだが……腕がもげかけてる。

虹楯と夕風カワルユウナギノ狭間を盾にしたのにこれだよ。

雷化してるはずなんだが……退魔の力でも持ってるのか？

あ……まさか、あの剣に退魔の炎の類とか入れてんのか？

もしそうだったとしたら、めんどくさい事この上ないぞ。

とにかく今はこの腕をなんとかせんといかん。

怪我はある程度慣れたがやはり痛いものは痛い。

転生直後の俺だったらエグさに軽く失神できるレベルだよ、これ。断面丸見えなんだぜ？

いくら転生前でグロゲー見慣れてたとしてもも実際のとは比較にならないぜ？

「超速再生。」

超速再生によって腕が元に戻っていく。

不老不死ではあるが、肉体が異常に頑丈なくらいで、再生能力は持っていないのよ。

だから、色々な作品でよく出てくる再生能力を習得しておいた。

大方のモチーフはBLEACHの虚の超速再生ホロウを元にしてる。

織姫の事象の拒絶、Dグレの第二使徒の梵字セカンド・エクソシストとREBORNのデイ

ジীর修羅開匣も考えたんだが、事象の拒絶は完現術フルブリングであるため、

物質と能力両方揃わないとできないのと、梵字は能力に入るかって

疑問と不老不死とはいえマジで命吸われそうなのと、修羅開匣は能

力とは言い難く、能力に分類してたととしても匣ボックスを体に埋め込みたく

ないんで断念した。

「・・・よし、治ったか。」

俺は手を開いたり握ったりを繰り返す。

まあ手がもげかけるなんて事滅多にないから重宝してるとは言い難いが。

一応万が一を考えて、頭とか内臓器官も再生出来るように弄ってる。世界によって理が違うが、少なくともこの世界では魂の概念があるので、魂さえあれば肉体の大半を破壊されても再生は可能だ。

『「調和」の炎を込めた燃え盛る炎の神剣でも斬れきれないとは・・・硬いな。』

「いや、俺の腕斬っただけでも十分斬れてるレベルだ。

「調和」の炎で腕の雷化を無効にするとか・・・ほとんど魔法無効化^{セル}じゃねえか・・・」

原作じゃ大地の炎を取り入れてたが・・・まさか逆も出来るとはな・・・

「調和」の炎を使い慣れてやがる・・・!

今現在の形態はさっきも言った通り、イクス Xグロブver.バージョn.ボンゴレリnG.ボンゴレギアR.カンビオ・フォルマだが、おそらくXグロブver.イクスVG、形態変化VGver.バージョn、誓いの炎（36巻のアレ）の状態になる事も可能だろう。

バージョn.ボンゴレギアVGならともかく、形態変化VGver.カンビオ・フォルマ、誓いの炎はさすがに少し手こずるな・・・

重傷だったとはいえ、D・スピードを圧倒してたのだから。

あれでナッツが万全だったら形態変化で更にパワーアップしてただろう。

おそらく魔法もあるだろうが、実質的な最終手段は、誓いの炎での形態変化^{カンビオ・フォルマ}。

正直、俺はその状態のツナと戦ってみたい。

さっきは思念は頑丈だろうだからという根拠のない事を考えていたから、暴風の螺旋槍を使っちゃったのよねえ・・・

よくよく考えれば、原作じゃ炎帝を普通に決ってたからなあ・・・あれだけの巨体が決れるとか、随分な威力だと思ったよ。

『さて・・・無駄に長い考察はそこまでにして、戦闘を再開しようか?』

「ん、それもそうだな。

早いところ、お前の本気を見たいいな。」

『・・・雷化は地味に厄介だからな・・・炎圧を更に上げるか・・・』

え、ちょ、マジで？

あれだけの純度の炎で、まだ最高出力じゃない訳？

ま、予想はしていたんだがな。

思念に限らず大抵の敵キャラとかによくあるパターンだ。

最初から力を全開にするような奴は大抵主人公や主人公サイドの奴ら、後小物悪党くらい。

少なくとも複数回敵として出てくる奴らはほぼ一回目で本気を出す事はほぼ少ない。

もつとも、思念達とは一回しか戦えないし、特徴がバラバラだからハッキリは言えんが。

ハセヲは速攻で攻撃に掛かる攻撃アタック＋速度スピードタイプ。

エルザはエクスカリバーや闘神の鎧の人格の補助によるバランスタイプ。

ツナは――ハセヲとほぼ同じだな。

だが・・・攻撃力、速度スピードは共に完全にツナの方が上だ。

『ナッツ、カンピオ・フォルマ形態変化 モード・ディフェンダー 防御モード』

いつの間にナッツを出し、防御モードに変化するツナ。

初代ボンゴレのマントか・・・初代バージョンver.とVGver.ボンゴレギアバージョンの切り

替えが出来るのか？

やっぱ出来るよなあ・・・っかアレ、結構防御力あんだよねえ・・・

俺も少し防御力上げないとな・・・アレ、行きますか。

ホ・モノリートネウキホイジッ
「冥府の石柱」

石とかこの10年やった事ないが、行けんだろ！
多分な・・・我ながら安直過ぎるだろうと思う。

スタグネット
「固定」

よし、固定出来た！
後は掌握するだけだ。

コンプレクシオープロ・アルマティオーネいせきめいおう
「掌握！ 術式兵装 雷石冥王」

あっさり出来たっぽいな。

ちなみに名前はテキトーに付けてみた。

これで今の俺は雷速に加えて、かなりの硬さになってる筈だ。

・・・まあ、重みも増してるっぽいが。

実際、掌握した瞬間俺の足場の周りが陥没しやがった・・・今何kgになってるんだ俺？

・・・んな事考えてないで、早い所攻撃しないと・・・迫ってきてるからな、ツナが。

しぐれそうえんりゅう
「時雨蒼燕流 攻式八の型 篠突く雨！」

エーミツタムイクス クリムゾン
『解放 X CRIMSON！』

カウンターで篠突く雨を食らわせようとしたが、ツナは充填していた技を解放してくる。

新技盛りだくさんだな、ツナは。

だが、まだまだだ！

らいめいけん
「雷鳴剣！」

すぐさま神鳴流しんめいりゅうに切り替え、雷鳴剣を放つ。
よし、これは行った・・・！と思ったが

『カンビオ・フォルマ モード・アタック形態変化 攻撃モード！
バーニングアクセル！！』

カワルユウナギ狭間ノ夕凧と初代のガントレットがぶつかり合う。

さすがに俺と修行で戦ってただけあって簡単にそう何度も攻撃を食らってくれねえか・・・

しかし初代のガントレットか・・・攻撃力が高くて、地味に厄介なんだよな・・・V G v e r . ボンゴレギアバージョンよりはマシだが。
まあいい。

俺は空いている方の手にXキーブレードを出し、別の技を掛ける。

『らいこうけん雷光剣！』

大方当たらねえだろうが、相殺できれば上出来だ！

『サギタ・マギカ魔法の射手 コンゲルゲンティア集束・爆炎の900矢 X イクス ブレイクBREAKver. 2.
0！』

やはりコイツも同じ事を考えていたのか、空いているもう片方の手で同じように技を発動してくる。

そして、雷光剣をいとも容易く突き破る。
さっきは不意に食らっちゃったが、二度も食らう程俺もバカじゃねえ。

カワルユウナギ狭間ノ夕凧を一時的に手から離し、魔法の射手を作り出す。

『サギタ・マギカ魔法の射手 コンゲルゲンティア集束・疾風の900矢 ふうしんほうけん風神崩拳！』

拳と拳、爆炎と疾風がぶつかり合い、炎は蒼炎に昇華しかけ、爆発を起こす。

一応俺も、風の上位は使えるんだ。

ただ、使う機会が少ないのと、能力が多過ぎるのが原因で、あまり日の目を見なかったりするわけなのだが……なんかデジャヴを感じるな……

気にはしないけども。

俺は再び狭間ノ夕風カワルユウナギを手を持ち、Xブレードキーを引っ込める。

先程の攻撃でツナは拳にダメージは多少なりともあるはずだ。

冥府の石柱を取り込んで、今俺の身体構成は雷と石で構成されてし、俺の拳はグローブ越しからでもかなり固かった筈だ。

石と言っても元が俺だから、鋼鉄をも簡単にブツ壊せると思う。

よし、ここで更に追撃、行くぜ！

俺はツナの懐に入る。

「魔法の射手 集束・虹の千矢」
サギタ・マギカ コンゲルゲンティア

俺は魔法の射手を足に巻きつけ————

「七色崩脚！」
なないろほうきやく

そのままツナを蹴り上げる。

この技は、約8年前、腕とかに巻き付けられるなら足でも行けるんじゃない？

という事でやってみたら普通に成功。

晴れて技の一つになった。

読者や数ある転生者の中にはこの発想はあったというのが大半だと思う。

んで、ツナだが、飛ばされそうなりながらも、炎の噴射で急ブレー

キを掛ける。

しかし、ホントアレって便利だよな。

ますます手に入れたくなってくるぜ・・・だってアレだぜ？

半端ない推進力があるし、拳の保護も出来る。

エルザの時、戦闘終了後拳が地味に痛かったから、拳当が欲しかった所だ。

オマケに戦いながら浮けるからねー。

浮遊術じゃまだ少し戦りにくいし、翼とかはいちいちアビスとか出したりして掌握しないと翼を出せないし。

ぶっちゃけ俺竜族なのに、自前の翼を持ってないんだよね。

しかも何故か竜化出来ないし・・・どういう事なの・・・

「換装 闘神の鎧。」

ま、この鎧で少しは拳を保護出来るか。

(・・・お前か。

俺を出したって事は、力を貸して欲しいという事か？)

(ああ、結構厄介な相手なんだな。

まだ持ち主になってから日は浅いが、手伝ってもらうぜ？)

(エルザが認めたのなら俺に異論はない。

力を貸してやる。)

(サンキュー。

負けるつもりはないから、大船に乗ったつもりで任せな！)

その直後、俺の体に特殊な属性が宿るのを感じる。

これが勝利の属性か・・・なるほど、思念のエルザでも手を焼くわけだ、実際ガチで手が焦げてたが。

体中がめっちゃくちゃ熱い。

まあすぐに慣れるだろうが・・・

ト・シュンポライオン デイアコネットー ウンデセクサーギンタ コウエンテース アベス・イグニフエラエ
「契約により 我に従え 炎の精霊 集い来たりて・・・紅蓮蜂
！」

とにかく、ツナが態勢を立て直して、魔法の詠唱かましてきたから、ここは夕風で対応だ。

迫りくる紅蓮蜂に対抗するべく、一旦納刀し、抜刀の構えを取る。

・・・よし、抜くか。

「行くぜ・・・次元斬！」
スラッシュディメンション

発動した次元斬により、紅蓮蜂は一匹残らず真っ二つになり、爆発する。

え、俺は爆発に巻き込まれてないのかって？

・・・ギリギリだったかな（汗）

「さて・・・もういっちょお！」

再び次元斬を、今度はツナを初めとした周辺に発動する。

だが、ツナは難なくそれを避け、拳を俺の腹に打ち付けようとするが、すんでのところで左手で拳を抑える。

「ぐっ・・・あぶねー・・・」

『遅い斬撃だな・・・そんな調子でこのスピードに追いつけるか？』

次元斬を避けるとは・・・やはりスピードに関しては契約者の中
でもトップクラスなだけはある。

ぶっちゃけ、雷化してる状態でもかすかにしか見えなかった。
あのスピードで縮地が出来るって怖くね？

「・・・どっちにしろ、これじゃあ拉致があかんな。
神速の中の神速で行くか。」

『神速中の神速・・・？』

実は、『闇の魔法』^{マギア・エレベア}を手に入れてから恥ずかしながら、光系の魔法
をほとんど掌握した事がないんだよね。

いやー、統合は何回もしてるんだけどねー。

今回使うのは、『闇の魔法』^{マギア・エレベア}で取り込むだけのためのオリジナル呪^ス
文^{ベル}。

一回しか試してねえから少し危険性はあるが・・・何事も経験が大
切だ、一応な。

無詠唱じゃちと不安だから、詠唱いつきまーす。

「ウエル・シエル・リ・ウエル・ウエラリオル 契約に従い 我に
応えよ 風を 音を 雷を越えりし光の神よ 我に従え 闇を討ち
うる光よ 白へと塗り替える光よ 我に光速の力を 白き光り響く
光神！」

よし、固定。

^{スタグネット}
「固定」

掌握する、と。

コンプレクシオー
「掌握！」

うぐっ！？

掌握した瞬間、まるで拒絶反応を起こしたかのような激痛が走る。
だが、それも一瞬で、徐々に薄れて行く。

「ふう……プロ・アルマティオーはつきようこうしん術式兵装 白響光神。」

あー、代償的なものかねえ……千の雷と冥府の石柱の力がなくな
った。

前にやった時は素の状態で行ったから気付かんかった。

しかし、結構しんどいな、コレ。

前回もそうだったが、『マギア・エレベア闇の魔法』で拒絶反応的なのは出たが……

・すぐに適応でもしたのか……？

一瞬あった痛みが一切感じない。

これほど痛みを感じないとむしろ不自然にすら感じるが……

まあ、いいか。

今は……飛ばす！

S I D E シン O U T
S I D E ツナ I N

『アレはマズい……！』

この技は……昔、見た事がある。

とは言ってもシンにとっては、未来の話だ。

昔、まだオレが本体と分かれる前、いつものように修行に付き合う
——はずだった。

その後——シンが白い塊を掌握したと思った瞬間、消えた。
否、見えなかったのだ。

当時のオレは成す術もなく、あつという間に気絶してしまった。
そこから、何十回と修行を繰り返すうちに速度、炎の純度に磨きがかかり、当時のシンと同等の純度の炎を得る事が出来た。

・・・少しシンにXグローブを弄られたけどな。

『イクスXグローブ カンピオ・フォルマイクス形態変化！ボングレギアバージョンXグローブ V G v e r . ！！』

どこを弄られたかって？

光に限りなく近い速度をコントロール出来るようになった事と、過去のXイクスグローブに切り替えが出来るようにされただけさ。

今思えば、これは過去のシンと戦わせる伏線だったのかもしれない
な・・・

「これでお前を逝かせてやんよ、神速瞬動！」

『行くの字が違・・・うつ！』

腹に左拳が入る。

ぐっ・・・これだ。

これでオレは昔何度も気絶させられた。

あの時は成す術もなかったが、あの時よりオレは強くなったし、何よりこの過去のシンなら多少ムラがあってもおかしくない！

オレはシンの左腕を掴む。

「なっ・・・！？」

『腕を掴まれると思わなかったか？
甘いな！ゼロ距離 インケンディッシュナエ奈落の業火！』

「マズ・・・っ！ 神速瞬動！」

シンはオレに掴まれている腕を残して一時的に離れる。
そして、掴んでいた腕を離れた瞬間、再びシンにくつつく。

・・・腕を犠牲にしてゼロ距離を回避したか・・・まさに肉
を切らせて骨を断つ、だな。

バージョンアップしてるとはいえ、これはいい加減本気で行かない
といけないか・・・！

そして、これで決着が付くだろう。

オレは両手を前に構える。

『ナッツ カンピオ・フォルマ 形態変化————オペレーション ダブルイクス XX。』

S I D E ツナ O U T

S I D E シン I N

・・・あー、痛ってえー。

奈落の業火をゼロ距離でやるとは・・・下手したら自分も巻き込
まれかねなかったぞ！？

光精化したからなんとか回避出来たが・・・左腕の火傷が酷い。

超速再生を使いたいところなんだが、さっきから使おうとしても発
動しねえんだよ。

とりあえず、考察は後回し。

マギア・エレベア
『闇の魔法』を第二段階へと上げるか・・・おそらく、これが最
後になる。

何故なら、ツナが両手を構え、ダブルイクス XXバーナー打ち出す準備をしてい

もちろん、威力も技名を変えるだけの破壊力はあるつもりだ。

『・・・・・・・・痛ッ！』

あの一撃で超化^{ハイパー}が解けちゃったようだ・・・・・・・・』

「・・・・・・・・ツナ！

どうやら消滅はしてないようだ・・・・・・・・」

ツナは壁によりかかっていた。

あの激突の影響か、両足が崩壊、両腕も崩壊寸前にまでになっていた。

真っ二つよりかはマシだが、これもやり過ぎだな・・・・・・・・

『一応、キミの本気でも出来るだけ消滅しないようになってるからね・・・・・・・・』

少し、危なかったけど。』

「そういえば、ハセヲもエルザも、かなり崩壊しながらも消滅までには至らなかったな。

まあ、あれぐらい頑丈なら、思い切りやれるからより良いんだけどな。』

『でも最後の一撃だけとはいえ、キミが本気を出したらこのザマだよ・・・・・・・・未来のシンが実力を見誤るとは思えないんだけど・・・・・・・・後、一応武器は無事だから安心していいよ。』

「とりあえず体の事だが、消滅さえしなければ同化させられるから、安心しときな。

それに、俺はやり過ぎる事はあっても、消滅だけは絶対させる気はないしな。」

『そうか……どっちにしろ、このザマじゃこれ以上戦うのは無理だ。』

さっきレベルの治癒クエラは一回が限界だから……キミの勝ちだ……
・Xグローブとこの二つのリングを渡そう……』

ツナが崩壊寸前の腕を上げ、手袋に戻ったXグローブと、二つのリング、大空のボンゴレリングと——大地のシモンリングを俺に渡す。

炎真からシモンリングだけを複製コピーして、思念このツナに渡したってところか……正直、未来の俺なら某悪平等ノットイコールを圧倒しそうで怖いわ。

『キミなら残りの思念達にも勝てるだろうね……オレに対しても最後の時以外本気じゃなかったんだから。』

「ああ、さすがに余裕に勝てるまでは断言出来ないが、全員倒してみせるぜ。」

その後はもはや恒例となった同化を行い、ツナの思念との戦いは終了した。

そして、俺はボロボロになった初代女王の墓修復し、後にした。

さすがにあの二人がいた場所とはかく、ここは崩壊したままじゃマズいからな。

第十五話 Xを冠する男と炎を灯す拳？（後書き）

シ「これまた随分雑な切り方だなー・・・」

蒼「三分割でキレイに分けるのが予想以上にムズくてさー、あれでもまだマシだと思うよ？」

文字数にバラ付きは出ちゃったけど」

シ「本来ならここで3人目の話は十分なはずなんだが・・・一体三つ目は何を書いたんだ？」

蒼「当然武器を取った後の話なんだが・・・あるキャラの祖先って設定のオリキャラが出る予定だよ」

シ「一体どんな蛇足話になるかと思ったら結構重要そうな話っぽいな」

蒼「うん、この二次ネギま小説見たけど少なくとも人気の作品で祖先が出たって話の類は見たことないんだよね」

シ「少なくともこのサイトで見たことは俺もないかなー・・・転生前の記憶見てもな」

蒼「お前この世界の出身！？」

作者の俺も初耳だそオイ！」

サ「まあ別に言う事でもないしな、それよりこのままじゃ脱線するぞ？」

蒼「おっと危ねえ！

で、誰の祖先かと言うと・・・秘密です（キラッ）」

シ「真顔でキラッすんな！キモいわ！
てかそれぐらい教えろよ！」

蒼「秘密にしといた方が面白いだろ？
終了まで20秒ねえし」

シ「時間過ぎんの早ッ！
それじゃ・・・」

蒼・シ「また次回（明日）！」

第十六話 Xを冠する男と炎を灯す拳？（前書き）

昨日は諸事情があったので投稿出来ませんでした。
ホントすんません。

シ「つーか前回のあの最後の技、いくら元ネタ知ってるからってちゃんとアニメ見てねえのに出して大丈夫か？」

蒼「一応お前は知ってる設定だし、アニメはこれから見れたら見る予定だから大丈夫だ、問題ない（キリッ）」

シ「そういう問題か！？つーかキリッすんなし！」

蒼「それでは・・・本編をどうぞ！」

シ「聞けよ！」

第十六話 Xを冠する男と炎を灯す拳？

「初代女王の墓付近」

「……武器は手に入れたし、仲間全員が集合してるのはいいんだがなあ……」

「シン！ブーツとしてないで手伝ってくれ！」

「ロクサス……これは一体何があった……？」

墓守り人の宮殿全ての戦力を集めたと思われる兵士の数がいた。

おかげで俺の周りにもすぐさま兵だらけに……いや、予想はつくよ？

雲雀がいるって事は、多分大半がアイツを追って来た兵士だろう。

そして、あのバツツの絶叫……アレの影響で追ってきた兵士達から、FF組と剣士組が逃げて来たのも原因の一つだろう。

もっとも、大元の原因と思われる雲雀は既に2、3割ぐらいの兵士を倒しているがな。

「つかよ、俺達を倒すためとはいえ、人数多過ぎじゃねえ？」

外の警備とは大丈夫なのか？

んな事考えても仕方ない、っていうかご都合主義で考えろって事ですわねわかります。

「んじゃ、成り行きとはいえ今までこいつらに守ってもらってたんだし、この兵士達を新しく手に入れたXグローブでフルボッコにしてやるか！」

「よし、俺のNEWウェポンでボッコボコにしてやんよ！」

「・・・・・・・・やっぱり思念達と比べると滅茶苦茶弱ええ・・・・・・・・」

フルボッコ終了。

大体20秒程度で終了した。

ま、当然だけどさ。

どうせなら、神殺しとかご大層な異名持つてる奴とかと戦いたいぜ・・・・・・・・

「・・・・・・・・いや、お前が異常に強いんだって。」

「あの人数をたった20秒を倒すとか普通できない芸当ッスよ・・・・・・・・？」

「自業自得とはいえ、オレまで参加させられるとは思わなかった・・・・・・・・」

何回もキンクリしてすんませんね、ハイ。

どうでもいい情報だが、キンクリってキングクリムゾンの略って知ってた？

知ってる？ですよねサーセン。

ん？雲雀はどうしたって？

亀甲縛りにして放置中。

それも特別製の縄でな。

後、念のために猿ぐつわも巻きつけといた。

「おい、お前らー。

そろそろここを出るぞ。」

「「「「わかった（ツス）！」」「」」」

「うっ……わかった……（雲雀は大丈夫なのか……？）」

「……フン。」

まだクラウドに闇人格の影響が残ってるっぽいが、まあ問題ないだろう。

ほとんどネタ要素に等しいし、命に関わる事でもないし、何より面白からな。

まああの状況でやられたから少しイラッ？としたわけなのだが。

とりま、これ以上話しても時間の無駄になるだろうからキンクリでカット。

その後、俺達は行きとは違う方法でオスティアの市街地へと戻った。ま、俺がティーダとクラウドを持ちながらで、ロクサスが朝倉と神田を持っていき、雲雀はロールに乗せてる状態でだ。

縛ったままにしたから、ロールには俺が乗せた。

召喚を使っ行ってきたかったところだが、万が一残ってるメンバーが兵に見つかる可能性も否定出来ないからねえ……

ちなみにオスティアはネギま読者なら知っての通り空中都市のため、空を飛んでいる間朝倉とティーダが

「高い！高過ぎだつてばアアアアア！」

「下が見えないッスよオオオオオオ！？」

「怖えエエエエエエ！」

なんて感じで絶叫マシーンに乗ったかの如くの悲鳴を上げてた。

というか何故にティーダまで怖がるんだか……原作じゃ高い所からスノボーするみたいに滑ってたのに……あ、普通にこの高度が高すぎるからか。

普通に低くても雲と同じくらいの高さだからな、オスティアは。ちなみにクラウドなんだが

「絶望などいらん！」

「無に帰れ！」

幻覚を見ているのか、2人とは違った意味で暴れていた。

また少し影響が出てるよ……面倒だなオイ。

そして、オスティアに戻って来た俺達は、つかの間の観光をする事にした。

理由ティーダとロクサスとかが祭りを見たいと言うため、この際このメンバー全員で行こうって話になったのだ。

「オイ、もうちょっとまともに運べねえのか？」

「仕方ないだろ、俺の体の大きさじゃ運ぶのも一苦勞するんだから！」

「ハッ、そんなんだから貧弱なんだよ。」

「……はあ？運んだのに何だよその言い草！」

全く、こいつらはいつまでたっても関係が悪いな……
どうしてこうなった……（汗）

「おいそこ、喧嘩すんな！」

「……全く、お前ら少しは仲良く出来んのか？」

「無理だな。」

「絶対無理！こんなパツツン野郎と仲良く出来る訳がないだろう！」

「ハア……わかった。」

だが、これ以上続けたら、『アレ』をやるから……覚悟しと
けよ？」

ゾクッ！

それを言った瞬間、二人はビクツツと体を震わせた。

どうも、最近このワード多用する事多いなあ……それも、仲が
悪いペアが何組かいたりするからなのだが……

「・・・・・・・・チッ！」

「いやマジそれだけは勘弁してくれ！」

「わかればよろしい。」

よし、これで次この二人を召喚するまでは大丈夫だろう・・・・・・・・問題在先送りしたただけだな。
とにかく市街に入るのはいいが、このままの姿だと捕まるな。
ちよつと路地裏へつと・・・・・・・・

よし、これで大丈夫だろ。

「・・・・・・・・シン。」

「どうした？ ティーダ。」

「その姿、何ツスか？」

「・・・・・・・・ああ、コレね。」

俺、賞金首になってるから変装をせざるをえないんだよね。」

「変装ってレベルじゃないツスよ！？」

「変装って言うより、変身とか変化のレベルだよそれ……」

「おまつ……俺と違って完全に女になってるじゃん……」

そう、現在俺は性別詐称魔法で女になっている。

最初にも言ったが、警備の目が厳しいために詐称能力を使う必要があるのだ。

ホント詐称能力重宝するわあ。

しかし、能力で思い出したが、あの白き光り響く光神……まさか使ってる間他の能力使えないのか……？

とんでもない弱点が残ってやがったな……俺はとにかく、ハセヲの光ノ深淵を超える光系掌握専用魔法を作ろうとしたわけだが……

……まさかあそこまで酷い弱点があるとは……

修正？能力面をとにかく強力にしたから、修正に割くのはかなりの時間がかかっちゃうし、そもそも修正出来るかどうかすら怪しい。

何故かって？『十字架ノ眼』^{クロス・アイ}で神クラスの能力は作れない。

つまり、これ以上やっちゃったら形容だけだった能力が、神クラスにしないと完全な能力には出来ないって事だ。

そもそも、俺はすでに某悪平等程ではないが、少なくとも千単位、多くて万単位は達しているかもしれない数の能力を持ってるんだ。

転生前はかなりの漫画、アニメ、ゲームを見たりやったりしたからな……使えそうな能力を習得して行ったら、かなりのチート能力を除くほとんどの能力を習得しちまった。

※ちなみにシンはすでに『十字架ノ眼』^{クロス・アイ}を持っているため、能力創造系は習得していません。

とは言っても、記憶を片っ端から引っぱり出して思いだしては習得

という荒業を何回かに分けてやったから、普通に習得していても意味がない。

なので、俺はある特異体質とも言える能力を習得した。

某目次の持つ能力、『完全記憶能力』。

一度見聞きしたものは絶対に忘れない能力だ。

これによって、今まで習得してきた能力は全て頭の中に記憶されている。

普通だったら、記憶が摩耗して能力の1つや2つ余裕で忘れてしまいかねないため、習得した。

最終的には全ての能力を極みのレベルまで昇華させるつもりだ。

ただ、結構前に習得しといたはずなのに何故不老不死の事を忘れてたんだが……少し能力の習得に不備でもあったか……？
今度改めて弄っておくか。

「んな事気にすんなよ。」

見た目が変わっただけで、中身は変わってないぜ？」

「いや、違和感バリバリだよ！」

「シンの女化は他の奴から聞いてはいたが想像以上だな……」

「そうか？ そんなにこの姿にビックリしたのか？ クラウド。」

「いや、そういうわけじゃなくて……（正直、女装した時を思い出した……）」

「ま、お前らにはもちろん、大半の奴らはこれを知らないからな。」
「というか、知ってるのはハセヲとかソラ、初期に呼んだメンバーばかりだからな。」

端から見たら女なのに男言葉で喋ってるし、ガサツな感じだから男勝りで姉御肌とかに見られてると思うけどね？

「それより、早く行かねえと祭りが終わっちまうぜ？
言ってなかったが、今日が最終日らしいんだ。」

「「「それを早く言（え・なさいよ）！」「」」」

だって言うタイミングがなかなかなかったんだもの。

んじゃ、祭りでいつも以上に賑わってるあそこに連れて行こうか。
え、どこへ連れてくかって？————大拳闘大会だよ。

この大拳闘大会はかなりの歴史があり、伝説の賞金k……あーこの
名前で呼ぶのも面倒くせえ。

過去に『神王』が出ていた大会という事で話題が上がり出場者が増
えていき、その結果、現在では本選に上がるには各予選を勝ち抜か
ないといけない程の肥大化し過ぎなシステムになっている。

しかも、この時期が一番拳闘大会の全盛期とされているため、かな
り猛者が多い。

ちなみに『神王』はもう予想出来てると思うが——エヴァと一
緒にいる転生者^{ロリコン}である。

何故ロリコンだってわかるかって？

ネギまの二次小説では過去の話でエヴァに関わる確率が高いが、例
外を除き、大体2パターンに別れる。

一つは、過去でエヴァが襲われてるところを助けて親しくなるパタ
ーン。

これはほぼやってる奴が多いな。

もう一つは、そこから更に愛でるレベルで愛するパターン。

これに関しては、ほぼロリコンな奴がやっていると考えてもいいだ
ろう。

何より、この世界に来てからわかったんだが、エヴァを傷つけた奴が星になったとか……

『福音の守護騎士』と名乗られてるだけに、厄介な奴なのは確定的である。

ここまで詳しいのは、何も文献や噂を見たり聞いたりしただけではない。

転生前に見た二次小説で、『神王』が主人公の小説を見た事があるのだ。

つまり、ここはただのネギまの世界ではなく、『神王』というイレギュラーな存在がいる世界だという事、もっと簡単に言えば――その二次小説ネギまの世界だという事。

元小説では疑似世界の設定だったが、この世界はモノホンっぽいし、多分『神王』がモノホンネギま世界に来た場合のパラレルワールドってところか。

つか毎回ながら考察長過ぎるわ俺。

転生前もこんな厨二思考が長かったせいでもあるんだろうなあ……

おっと、とりあえず視点を現実に戻そう。

現在は既に大拳闘大会の本選の舞台にある席に座って観戦中である。

……個々の実力は墓守りの奴らよりは高いな。

さすが本選を勝ち残った奴らだけある。

だが……興味を持つほどではないな……

「あの警備達よりはマシだね、咬み殺してみたいよ……」

「オメーが言っていると本当になりそうだからやめてくれ。」

もしやらかしたら事後処理がめんどくさくなる……」

「いつその事、次回があるならそれに参加させればいいんじゃないか・・・？」

「次回って・・・この大会、絶え間なく開催するから参加させるなら早いところしねえと無理だぞ・・・？」

「へえ・・・そうなんだ。

じゃあ、エントリーして来ようかな・・・」

雲雀はそう言って、会場を抜け出す。

さすがに会場でまで物騒な事は起こさないだろうし、縛ったままだと他の観客に目立つから解いた。

不安要素が拭えないけどな・・・頼むから厄介事起こすなよ・・・

『試合終了！

リン選手、アーク選手ペアの勝利です！』

お、どうやら試合が終わったようだな。

トーナメント表を見ると、次の一試合を除く二回戦は全て終了していた。

しかし何度見ても多過ぎるだろ試合・・・ネギが出たナギ・スプリングフィールド杯はせいぜい三回戦ぐらいいけば決勝だったわけだが・・・このトーナメント、良くて八試合、酷い時には十試合以上になる事がある。

一体どうやって時間を工面してるかって？

深夜もブツ通しでやるのが日常茶飯事になってるのさ。

まあ幸いな事に過労死した観客はまだ一人も出てない、倒れた奴はそれこそ毎回三桁に達しそうだけだな。

後は、ギブアップか戦闘不能に加えて約15分〜30分の制限時間も設けられている。

そうでもないかと、時間がないしな。

それはともかく、そろそろ二回戦最後の試合が始まるようだ。

『さて、2回戦も最後になりました。

アリス選手、レイ選手ペアVSシギ選手。

アリス選手、レイ選手ペアは上位常連で、今回もここまでの試合を素晴らしい連携で圧勝。

一方、シギ選手も無名でありながら、圧倒的实力で予選を突破しています。』

ほう・・・やはり今回もアリス、レイペアが上がって来てたか。

このペアは上位常連だけにそれなりの魔力を有しているペアだ。

そうだな・・・3000から4000はあるんじゃないかな？

原作で言えば、フェイト（本気じゃない）クラスの奴らだな。

一応全盛期で上位常連の奴らは少し注目してるが・・・

だが、それを踏まえてもシギの魔力容量が半端じゃない。

下手したらナギ、いや、それ以上かもしれない。

ナギは少なくともラカンと同等クラスとされていたのだから、最低でも12000以上はある事になる。

この勝負・・・実力があればどちらが勝つかなんて目に見えてる。実際、アリスとレイは冷や汗を垂らしてるくらいだ。

『果たしてどちらが勝つのでしょうか？

インキビテ
それでは、開始!』

ま、シギにどう挑むか見させてもらおうか。

「食らえ！雷の暴風！」
ヨウイスヲルグクエタネズ・

まずレイが無詠唱で雷の暴風を打ち出す。
んー、いい具合に魔力を練りこんでるな……

「おっと、アレは危ないな……」

シギは縮地でそれを難なく避ける。

そして、体術の構えを取る。

シギが使ってる体術は中国拳法、それも八極拳と少林拳を混ぜた感じのだな。

あの二つを混ぜる事で全く新しい体術を作っていやがる。
ん、シギが動くか。

シギはそこから縮地を使いレイの懐へ入る。

「速ッ……！？」
デフレクシオー
「風楯！」

風楯か、とっさの判断にしてはいい判断だ。

もっとも、今から出すであろう技に風楯が耐えられたらの話だが……

「食らいな。
らいしょうてい
雷掌底！！」

バキン！

「なっ、障壁が破壊され……ぐはぁ！」

シギは風楯を掌底をレイの腹に食らわせる。

地味に浸透勁も併用してるからか、雷がレイを貫いてるように見える。

が、傷は一切付いていない。

つーかアイツ、複数の体術を使えんのか・・・こりゃレイの方は終わったな・・・

「なんつー衝撃だ・・・クソっ・・・」

掌底を食らわせてから約数秒後、レイが遅れて倒れる。

『おおーっと、シギ選手、レイ選手をいとも簡単に倒しました！アリス選手、これを一体どう切り抜ける！？』

「実力差が歴然としてるのはわかってたけど、レイが・・・一撃で！？

嘘でしょ！？

こうなったら・・・燃える天空！」
ウーロニア・ラゴース

ほう、ディレイ・スベル遅延呪文か。

この時代でも遅延呪文の使い手は原作程ではないが珍しい。

おまけに、結構使い慣れてるんだよな、アリスは・・・遅延呪文だけなら、トップクラスと言っても過言じゃない。

アリスは燃える天空をシギに向けて放つ。

今度はどう出るか・・・

デフレクショール
「風楯。」

シギは難なく風楯で防御していた。

・・・レイの風楯も十分練りが良かったが、シギの風楯の方が遥かに優れている。

「わ、私の燃える天空が・・・風楯で防御された!？」

驚くのも無理はない。

燃える天空は、それこそ他属性の古代語呪文と比べると難易度が低めだが、それでも最上級魔法の一つに上げられる魔法だ。

それを障壁、それも炎と相性が悪い風楯で防いだのだから、普通はありえない話なのだ。

観客達はそれを理解しているため、これにはどよめきが走る。

まあ、燃える天空を出した本人が^{アリス}一番動揺してるんだけどな。

そんなアリスや観客達をよそにシギは詠唱を唱え始める。

ヘカトンタキス・カイキリーリアキス・アストラフサドー
「百重千重と重なりて走れよ稲妻 千の雷!」
キーリブル・アストラペー

「くっ、火楯!」

かさずアリスが炎楯を展開するが、千の雷はいとも簡単にそれを打ち破り、アリスにへと直撃する。

出力を調整してるようだが・・・火楯を貫いた辺り、それを加えてもかなりの威力がある。

「キャアアアアアア!
そ、そんな・・・」

そう言うと、アリスも倒れた。

出力を調整されたおかげか、何とか生きている。

というか、この時代でも殺ったら失格になるけどね。

『ああつ、アリス選手も倒れた!
ここで試合終了!』

最後の2回戦の勝者は、シギ選手です!』

予想通り、勝者はシギになったか・・・

当然と言えばそうなんだが・・・この世界に来てから、万越えした魔力の持ち主は思念を除けば数えるくらいしか見たことがない。

それに、アイツ誰かに似てるんだよな・・・誰だったかな・・・赤髪で・・・イケメンで・・・千の雷を使う奴・・・

あ!ナギ!

アイツ、ナギに似てるんだ。

青眼である事と、髪型が多少違う事を除けばほぼ瓜二つだ。

オイオイ、すぐに思い浮かばないとか絶対完全記憶能力に不備があるよコレ・・・(汗)

え?何でステージの様子がわかるかって?

聴力と視力を身体強化してるからさ。

周りの歓声とかがうるせえが、鼓膜とか無駄に頑丈だからな。

そんなに問題はない。

どっちにしろこの大会・・・優勝はシギだろうな。

上位常連は魔力をうまく使うから上位に位置しているが、シギはそれに加えて魔力も段違いに異常だ。

シギクラスのスペックで優勝できなかったらそれこそ力を制御できないバカくらいものだ。

一応、この時代でも賭けとかがあるので、俺はシギに全部賭けておいた。

「へえ・・・あの赤髪の男・・・強いね。」

雲雀が横でシギを見てそう言う。

いつの間にか戻って来てたようだ。

「お、雲雀か。」

エントリーはしてきたのか？」

「勿論して来たよ。」

これだと思う存分、咬み殺せそうだよ……」

「せいぜいやるなら半殺し止まりにしろよ……
もし殺ったら、俺は無殺者の異名ノークライを捨てるかもしれんからな……
」

当然意味は分かっているだろうが、無殺者ノークライの名を捨てる＝雲雀を殺
るかもしれない
って意味だ。

俺の契約者が人を殺るところなんざ見たくねえしな……

「……わかった、あなたの言う通りにしてあげるよ。」

……素直に言う事聞くなんて、珍しいな。
やっぱりさすがに殺る事はし

「半殺しならいいんだね？」

「……エ？」

「半分までなら咬み殺してもいいんだよね？」

……やっぱり雲雀は雲雀だったあああああ！

「いや、確かに半殺し止まりにしとけよとは言ったけども！」

俺は、出来るだけ穏便に倒せと言いたかったんだよ！
毎回の事だが、物騒過ぎるわ！

「なら、いいよね？」

「いやいやいや・・・拳闘大会はある程度のケガなら大丈夫だけど、お前の半殺しって100%致命傷になる確率が高いだろ・・・何より、お前のVGは凶悪過ぎなんだよ！」

「そう・・・なら、普通のトンファーでなら咬み殺してもいいんだね？」

「そ・う・い・う・問題じゃねエエエエエエエ！」

結局、3分の1殺し以上半殺し未満で落ち着いた。
後、周りの観客からの視線が痛かった・・・
で・・・拳闘大会の結果だが、結局シギは決勝までの全試合を圧

勝し、優勝となった。

シギが優勝したので、結構大儲け出来てたりする。で、シギに関してなんだが、後にこの拳闘大会の試合の記録を調べ、シギの情報を見ていると、シギのフルネームが書かれていた。

読者の察し通り、フルネームは——————シギ・スプリングフィールド。

予想はしてたのだが、まさか本当だとはな・・・

これはもう確実にナギの祖先と考えてもいいだろう。

なるほど・・・ナギの異常な魔力は家系共通という訳か。

いや、でも確か原作で一番目が「特に名家と言う訳でもない」「7代遡っても何の因果も見い出せない」とか言ってたはずだが・・・これほどの魔力を持つてるのに、因果もないとは・・・『神王』と俺が介入したからなのか？

あ、でも『神王』^{ロリコン}は関係ないか、元々あの小説にはシギ登場しなかった訳だし。

とりあえず、ナギはおそらくシギの魔力が遺伝してるんだと思う。

あくまで予測だが。

ま、いつかまた巡り会えるだろう。

次に出会ったら、仲間にしたいところだ。

さて、クラウドも完全復活したし、全員帰還^{リリース}させますかね。

「さーて、拳闘大会も終わってクラウドも復活したし、帰還していぞー。」

「よし、これでロクサスからもらった情報を元にスクープを書けるぞー！」

「俺もブリッツで遊ぶ予定に間に合いそうッス！」

「これでクラウドの代理も終わりか……まあ、普段見れなかったものが見れたし、いいか！」

「んじゃ、用件も終わった事だし、そろそろソラの所に戻るとしますか……」

「今度呼ぶ時はムカつく野郎を呼ぶなよ！」

「次、召喚する時に気を付ける事だね。」

「……シン、すまなかった。」

俺がああならなければ……」

「気にすんな、元はと言えばティーダとバツツのアホがやった事だし。」

あ、頼みがあるんだけどさ。」

「何だ？」

(ゴニョゴニョ……)

「……わかった。」

手に入るかどうかはわからんが、やってみよう。」

え、何を頼んだかって？

次回までの秘密だ。

ふー……全員帰ったようだし……俺は武器を探す旅を再開するとしますか……

第十六話 Xを冠する男と炎を灯す拳？（後書き）

蒼「さて、前回言ったオリキャラが出て来ましたが……」

シ「まさかナギとネギの祖先とか……一体どういう発想で出したんだよ……」

蒼「いやー、最初はシンにもそろそろずっと一緒にいる仲間が欲しいなあーと思って考えついたキャラなんだけど、今じゃ結構愛着が沸いてたりするね」

シ「で、一番目^{プリムム}が言ってた事と矛盾が生じかねないが、そこら辺はどうするんだ？」

蒼「一応補完設定は考えてあるので問題はないと思う、伏線的なものにはなるんじゃないかなー？」

シ「で、後々重要なキャラクターにはなるのか？」

蒼「一応なる予定だね。」

原作の時代にも登場する予定だし」

シ「どうやって登場させる気だよ……年月が立ちすぎて軽く死んでるだろ……（汗）」

蒼「ま、それまでのお楽しみって事で！」

シ「次回からはどうやら新メンバーが登場するようです。と言っても、少し考えれば容易に考えられるキャラクターですが。」

・ ・ ・ やつとこの二人だけの寂しいコーナーからおさらばできるわ・
・ ・ ・ ・

蒼「それでは、今度の投稿はいつになるかはわかりませんが・ ・ ・

蒼・シ「また次回！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3749p/>

第一部「魔法先生ネギま！ 史上最強の転生者——Fight with the personified

2011年12月25日15時49分発行